

が遺存しないといふ弱點があり、其の弱點は永遠に除き去られさうもない。近代の物には此の弱點のないものがある。歌人俳人等の眞蹟が遺存してゐて、私の此處にいふ鑑賞をするに困らない。但しそれが眞蹟であるか、模寫であるか、他人が記憶に便する爲に原物に近く書留めたものであるかを見分けることが肝要である。何となれば此の三者の間には、意氣の充實と筆致と氣韻とに於て大きな差違があるからである。敢て詳述しなくても理解されるであらう、私どもは日常之を経験するのである。厭でも経験させられてゐるのである。是に於て鑑賞に先立つて鑑定をする必要がある。鑑定の結果眞蹟疑無しと認め、さて其の作意筆致と此の兩者間の調和等を味ひ、併せて作者の人物境遇等をも想起して後、其の作の出来不出来を判斷して始めて鑑賞の二字が許されるのである。しかし明敏な人にあつては鑑定と鑑賞とが同時に行はれ得る道理で、行はれても一向差支ないのであるが、何人も某作家の作を初めて見る場合には眞蹟の決定はなし得ず、唯面白いとか、いゝとかいひ得るだけに止まる。鑑定も鑑賞も其の作者及び作品に對して、相當の知識を有すべく、いやそれ以上に傑作

となすべきものを屢次熟視したことのあつたものでなければなし得ない。

世にいふ鑑賞とは、かうつき詰めたものでない。眞否を判斷するどころか、疾風一過的な見方をして、自己主觀の下に勝手な感想を敘して鑑賞と稱へてゐる。典籍などになると、其の見る物も、普通には版下書の手になつたもの、現今にあつては活字本、一段進んで寫眞版にした複製品によつて、作意と表現の巧拙とを論じて鑑賞と稱へてゐる。徒然草鑑賞、一代男鑑賞、雨月物語鑑賞など皆此の類だが、それも鑑賞でないことはない。無いが、それと作者の眞蹟に就いて鑑賞するものとの間に、味ふ上に於て強弱深淺の差のあることは争ひ難く、何れが充實したものであるかは説くを俟たないであらう。

かう立言すれば、本當の鑑賞は眞蹟に對して行はるべく、鑑定眼の無い者はなし得ないといふ事になる。勿論さうだ。書畫の場合には殊にさうだ。もと鑑定といふは眞偽の判定に他ならず、鑑賞の前段に立つて、之を鑑賞しようとする者に不安の念を抱かしめないやうにするための行爲である。書畫を骨董扱にする場合には、特にこれが緊要事である。最初から人を欺瞞しようとする、低劣な



商人なら別だが、正しい道を歩かうとする人にあつては、先づ鑑定に長ずる人に見て貰つて、眞蹟だと知つては、はじめに商品として扱ふべきである。其の鑑定に當る人が報酬を受けて見分けるのなら、營業だが、報酬を受けても受けなくても眞實の鑑定を下してゐるなら、不安の念を抱かしめない事に於ては變りがない。それで鑑定書の有ると無いと、又鑑定者が精通達識者であるか否かによつて、價に大きな開きがあるものである。此の事は、苟くも古人の筆に成る床掛の數幅を藏するもの、新書畫でも高價の品を求めたことのある者なら、熟知する所である。世に書畫の箱書が重んぜられ、副書が喜ばれ、訓み方まで記してあるのが迎へられるといふのは、鑑賞の妨をする不安の念を除去する上に大效があるからである。又從來其の書畫を襲藏した人たちが、社會的に地位のある人であり、鑑識のあつた人であれば、育ちがよいと稱して珍重する。もしそれに作者の傳記でも録し添へてあれば、ますます満足し、詩の書幅なら筆者の詩集まで添へてあるのを歡ぶといふのも、念入りに過ぎるといへば過ぎもするが、一切は鑑賞の妨をなす不安の念を除き去らんが爲である。元來作品購求者の各に向つて博識

と蘊蓄とが望めないのであれば、此等の方法の發生するのも當然である。

私がかうまで鑑定家の必要を唱へるが、江戸時代から明治年中にそれで立つた古筆家の鑑定なるものは、初代の古筆了佐あたりの鑑定なら大抵信を措けさうだといふが、其の後の人たちのなら、あつても無くても同じだといふことを明言して置く。それは貧弱な書留や不正確な手鑑を基礎にしでの審定で、當今の如く史料や古文書の公開される世、寫眞の應用される時代には、もはや信用を失ふのが當然なのである。依てそれよりも眞實に鑑定眼を有する者に審査して貰ふがよい。鑑定眼は由來天稟によるもので、明敏にして作家の癖を會得する事が早く、利慾の念が極めて淡く、鋭利な良心の所有者たるを要する。これが鑑定者の如何によつて、價に開きのある所以である。かの數圓の金によつて鑑定筆を曲げるやうな、そんな手合は論外だ。

研究といふなら、又別に考へる必要があらう。例へば芭蕉なり蕪村なりの眞蹟はさう容易に寓目し得るものでない。しかるに其の研究家は幾十百人がある。此等の人は、何意と其の表現とに就いて巧拙を攻究するのが主目的で、必ず



しも鑑賞を旨とするものでない。隨てそれほど鑑定眼を要せず、古來其の人の作として傳ふる句について論評をすればよく、文學上からしてはこれも立派な研究である。少くとも世の所謂研究とはこの事であつて、其の材料としては眞蹟の複製本のあるものは、それによる人もあるが、大抵は往時の刻本と現時の活字本とに就くのである。複製本を用ひるのは最も周到な方法で、刻本はこれに次ぎ、現行活字本は最も劣つて、句意だけを味はふにしても遺憾が多い。けれども現代の教育は往時の刻本や寫本を讀ましむるが爲に、行書や草書に通ぜしめようとしてゐない。おまけに普通の略字を排斥して楷書の正體ばかりを教へてゐる。爲に最高等の教育を受けた者でも、刻本や寫本を座右に備へてゐないものが多い。それを辯じて、場所を取つて困るといつてゐる。鑑賞とか研究とかの嚴めしい態度を示さうといふには、そんなことではかたはら痛い話だが、事實讀めないのであれば、亦以て致方がないといふべきであらう。私がかう迄極言するのは、必ずしも現行活字版本には誤植があるが爲にいふのではない。往時の刻本は率讀疾過の弊を防ぎ、我等に藝術感を興へることに於ては活字版に

幾倍する力を有してゐるからである。疑ふ者は宜しく往時の刻本を讀み習ふがよい。二三箇月の練習はよく生涯の不安を除き去るであらう。當今刻本を獲ようとしては現行活字版入手以上の經費を要し、結局金錢に恵まれたものでなければ、眞の研究はなし得られさうもないといふ虞が涌きさうである。事實に於て涌く。私も學究生活が彼是四十年に及ぶが、いつも此の虞に襲はれて來た。圖書館があつてもそこへ繁く通ふ程の時の餘裕はお互に持合せてゐない。其の結果生活難に陥らないのを限度として私は刻本を求めた。固より子孫の爲に美田を買ふことは出來ず、本當に公債證書の一枚をも持つてゐない。これが學究に與へられた運命だとあきらめて來た。それでも私心滅却派の一人、文獻立證派の一人たり得るを思つて、これでわが生を終らうと思つて來た。世には私と同志同行の士も少くはなささうだ。意を強うするに足りさうだが、私は衷心に於ては相當な蓄財をしてゐる者に羨望の念を有してゐる。また世評を顧慮せず、専心蓄財に終始した人に對しては、羨望以上の驚歎を禁じ得ない。學問に忠實といふことも程加減にすべきで、要領とかをよくして行くのが當世で



あるらしい。

たまたま近刊の書三四を通讀して、學究生活は庶幾したいが、決して人に勸むべきでなく、止むを得ずして學究生活に沈んでゐる人には、同情だけは十分にすべきである。殊に困難の伴ふ書畫の鑑賞や研究は大きに天賦によるもので、何人も之を能くし得るのでなく、又勸むべきもないといふ考を抱いてゐる時、

#### 一茶眞蹟集

を私の許に寄せて、意見を徵せられた方がある。此の人は一茶と同じく、又私と同じく信州に生れられた方で、篤實でしかもよき理會を有してゐられる人だけに、私は所見を公にする事を快諾した。題して眞蹟集とある。すなはち鑑定眼を有する者の審定を経た筆蹟集であらねばならぬ。一茶の傑作と認むべき數幅又は十數幅を鑑賞するに比して幾十倍の勞苦を要するのである。私は先づ其の目次を見て二百點以上の作品がコロタイプ版にされ、其の一々に譯文と解説の施してあるのに、編者の力を竭されたことの大且つ深に驚き、次いで凡例を一讀して一茶の眞贋を鑑定する一つの鑑として世の中に役立つものとして編

纂に心がけられたといふことを知り、其の精且つ偉なるに驚歎した。

私は一茶の故郷柏原から二三里の距離にある一邑に生れて、二十歳近くまでざつとそこらで過した。其の私の地方には一茶の句に關する逸話が數多傳つて居り、一茶崇拜の人もあつて、眞蹟と稱するものが尠からず傳つてゐた。同時に眞蹟ならざるものも澤山諸方に所藏されてゐた。私がそれに寓目したのは今から四十年もの前に屬し、爾後は東京にゐるのだが、こゝでも年々新に寓目するものは四五十點に止まらない。私は一茶が四十餘年の放浪にも近い生活の中に遺した句の多いのに驚いた。また駄句の多いのにも喫驚してゐる。私どもの幼時及び壯時には、此の人の自畫賛といふものは甚だ少くて、あれば一見してわかるやうな特徴の存する物であつたことが今も腦底に刻みつけられてゐる。殊に私の老父は書畫好きで、私は山陽東湖、文晁、蜀山といつた人たちの作品と稱するものは子どもの時から目睹して來た。中には眞蹟も稀にはあつて、それが茶話の話題となることが多く、隨つて其の眞蹟の印象は時々喚起せしめられて來た。その當時から一茶の筆蹟はあるにはあつたが、相當に骨董扱をされてゐ



た。滅茶苦茶な物までが眞蹟として喧傳されてゐた。一茶と親交のあつた家の中には流石に頭の下がるものはあつた。それでも中に一二のイミテーションの混在するのが珍しくなかつた。近年改装したかと問へば四五年前にしたといふ答もよく出て、改装の際の逸失混入の歴然たるものがあつた。名家の藏は一茶生存時代に作製されたかと思はれる擬似品もあつて、それが如何にも時代色に富んでゐた事が今以て想起される。私から寄贈された幅の中にもそれがあつたことであつた。而して紙質墨色筆致に於て稍許し難いのも之を寫眞に撮り、更にコロタイプにすると、缺點はかくれて、如何にも眞蹟の如くに見えるに至るが、眞蹟でないものは何處までも眞蹟では無いのである。他人の藏につきて、一見眞蹟と思はれるものも床に掛けて熟視すること少時にして疑が生じ、半日にして嫌忌の情に堪へず、翌日は之を見まいとして努力することは屢次あることで、鑑賞家や研究家は幾度となくこれに遭逢してゐられよう。私自身にもあまたたび其の經驗がある。さうして寫眞は展覽直後に撮ることが多い。さて時をおいて集を編輯しようとして寫眞に基づく時は、前記の如く缺點

のかくされた物に就いて選擇するのであつて、時に擬似品も混入せられる。寫眞によつて眞蹟集を選び、コロタイプ版によつて眞贋を判別するの難事はこれだけ述べたらもう十分であらう。私は此の十年ばかり前から一茶自畫賛幅の續出するのに後じさりをしてゐる。

一茶の畫讀で、素人の目を欺く程度の擬似品は容易に出来るらしい。殊にまきを焚く信州にあつては煤による時代色を付けることも容易であり、發裝の削り方なども信州には古風が遺つてゐる。そこで一茶の壯時から晩年までの作品に通じてゐる玄人でないと、判定を誤りさうに思ふ。決して裝潢は異風に富み、紙中に汚染や皺や折れがあつて時代色を現してゐるなどと、自ら辯護の辭を下して購求または鑑賞をしてはならぬ。一體信州には目今到る處に擬似品があるのではあるまいか。最近の十日間に其のあやしいもの三幀を見せられた。所謂箸にも棒にもかゝらぬ物だが、それが誇りかに見せられたのである。他國でもこれと思ふ程の作品に出會ふことは極めて尠い。一茶の展觀會に於ても其の前を早く通り抜けようとして努力するやうな作品が随分ある。



其の作の喜ばれると同時に擬似品が作成される。ひとり山陽、東湖、星巖、象山等ばかりでなく、困難な應舉、竹田、玉堂、木米、米山人、文晁、靄厓、草雲等にも作り出され、書では良寛、寂嚴等にも驚くばかり作成された。試みに其の一例を語るであらう。

もう二十幾年かの前になる。私は寂嚴の書が好きで、一幅得たいと思つてゐた。それを周旋してやるから来いといはれて、岡山市に夏期講習の講師となつて行き、次いで津山へも行つた。さうして羨望に堪へない作品十數點を見るを得た。津山の愛染寺の屏風なども其の一つであつた。市中の書畫商にもそれと聞いて見せに来てくれた者が何人かあつたが、皆疑はしい品ばかりで、たうとう一幅も手に入らずに歸京した。其の時の話に十年前では一圓以下で手に入つたとのことであつた。然るに翌年になつて岡山の古老から世話して貰つた時には、一行物に百圓近い金を支拂はせられたことを記憶してゐる。其の又翌年になつて備中某町の書畫屋が、知人の紹介狀を携へて寂嚴の書だと稱して四五十點を持參した。概ねマクリで、拙劣極まるものであつた。唯横マクリに眞

蹟疑の無い物が一枚あつて、私はそれだけを買つてやつたら、書畫屋は顔色を變へたが、心に安心する所があつたと見えて、忽ち喜色をあらはし、蒼皇として歸つて行つた。半月ばかりたつと又やつて来て、幸に寂嚴は悉皆東京で賣れまして、豫想外に利益を得ましたといつた。私はあれが賣れたのかえと問ふと、賣れましたといつて冷笑とも苦笑ともつかぬ表情をして見せた。さうして私に向つて先日お床に掛つてゐた山陽を割愛してくれないかといつた。私は花の散り時に其の意を録した幅は賣り得ないといつたら、山陽の一行物は珍しく、それに若書きなのがうれしい。是だけ奮發しますといつた其の金額は買つた時の十倍にも近いものであつたが、私は遂に應じなかつた。其の後此の男の手によつて捌かれた寂嚴の擬似品は美しく表装されて知名諸家の床を飾つてゐる。もう寫眞に撮られてゐるものもあるらしい。撮影されると眞偽の判断が一層下し難くなることは前述の通りだ。私は眞淵、宣長、篤胤等國學者の眞蹟と稱するものにもままそんなに出逢ふ。

私どもの父祖が直接に書いて貰つたものにも、筆者の年齢によつては甚だし



い差異があつて、其の筆者の書としては世に通用しさうも無いやうな出来もある。象山や一齋一茶の如き、書體が一度ならず變つた人の筆蹟に就いて、眞蹟か否かを判断するには、周到な用意の下に鑑査を施さねばならぬ。鵬齋や東湖や星巖なども識別は容易でない。要は眞蹟を永年の間に數多く見てゐる人の言に聽くがよく、責任感の強い人なら、番頭君の意見をも徴するがよい。最もよいのは、點が辛いと評せられる人數人が相集つて、合議制の下に一の反對者もない作品だけを採るべく、所藏者の誰彼を問はないのが第一策である。第二策は決して其の數の多きを求めず、選集を作るが如き態度をとるがよい。しかして眞蹟研究の資料を提供しようと思つて、登載の數を多くし、所藏諸家に就いて採訪に力め、一々之を寫眞にし、後日之を輯めて眞蹟集を作るは最下策で、勞が最も多くて、動もすれば人を誤らしめることになる。何となれば眞蹟の境に立つ作品を藏する者が、これによつて急に所信を高め、眞蹟疑無き品と誇稱し、世も亦これに倣つて、作の標準線をいたく低下せしめる事になる。

私は一茶眞蹟集を編成の際、忌憚なき意見を吐く人に協議せられたことを信

じ、且つ一茶の書風考査の上に寛政初年寛政末年享和時代文化初年文化後年文化政初年晩年の六時代を立て、句作の年代の明かなるものは之を考量の中に加へて眞蹟の査定に従事されたことを多とする。編者が細心精緻の用意は此の上にも窺はれる。此の用意は解説の上にも施されて一茶句研究には絶好の指鍼たることは何人も疑はぬであらう。我等は爲に教へられたことの尠少でないことを告白するに躊躇しない。それと同時に登載數の多きに過ぎたことを憾むの情を抱く事も告白したい。十人の子供があらうか、其の中には二三不肖の子もあるのが世の實情である。例をそれに取つたら比倫を失ふかも知れないが、私は此の際それが恰當の譬喩であると思ふ。

落葉して三月頃の垣根かな 一茶



## 二 不忘帖

(昭和十二年十一月—十三年四月稿)

不忘と書き出してある帖に對しての記述であるが故に、かう題するのではない。文字通り忘れない帖といふことである。帖とはいつても折帖だけでなく、卷物をもこめていふのである。さうして搨本ではなく眞蹟の方を主としていふ。勿論唐宋の碑拓をいふので無く、我が邦人の筆蹟に限つていふのであり、需められた處も亦それなのである。

慶長元和以來名蹟と稱譽すべき書は決して尠くない。世人のいふ徂徠山陽も名筆であり、玄人筋でいふ雪山や大雅堂も卓拔雄偉である。けれども私は聞見が狭く、此の四者に就いては僅かに大雅堂の間行流水帖に傾倒しただけで、雪山や山陽の大字法帖といつた物には絶品を見たことがない。徂徠の天狗賦にだけは見とれたことはあるが、不忘の部には入れ難い。かへつて書名がないわけでもないがといつた程度の人の書に忘れられないものが二三ある。先づ癖

のある書からいふ。

### 1 藤篤の秋興帖

藤篤は内藤就篤のことで、自ら修してかう署してゐる。一名希顔閑齋又樂山と號す。長州の産で、仙臺侯に仕へた人である。傳記は東藩史稿仙臺史料仙臺人物史以下諸書に載せてある。今簡明を旨として岡千仞の仙臺史料に據るであらう。同書卷三にいふ。

内藤以貫號閑齋、長州人、少好讀書、涉獵群籍、博聞強記、能屬文、又學擊劍、皆精到、仕義山公、家食三百石、常陪左右、溫柔寡默、能爲應對、甚蒙恩遇、……平生不喜程朱之學、用陸氏及明儒之說、作石經大學諺解、……常好書法、學朱子筆迹、推爲能書、性勇敢、輕死、同僚數爲其所屈、多病不任官務、隱居根白石、賦詩樂幽趣、而詩文不留稿、弟子須藤氏集遺稿一卷、元祿中以壽終。

これは虎岩道悅の記す所によつたものだといふ。忠宗は政宗の子である。以貫は忠宗の子の綱宗、綱宗の子の綱村、以上三代に仕へて侍讀をも務めた。僧



の虎溪が東昌寺へ聘せられた時、伴ひ來つて忠宗に薦めたのだといふ。東藩史稿には「書ヲ能クシ、宋朱熹ヲ學ブ、後程朱ノ學ヲ學バズ、石經大學諺解ヲ著シ、陸氏明儒ノ說ヲ主トス」とあつて、最初は朱子學を修めたが、後、宋の陸象山や明の王陽明の學説を奉じたとある。朱熹の字を學んだのは恐らく壯時のことで、後、陽明學に轉じて、書はやはり壯時の體を守つたのであらう。元祿五年に六十八歳で歿した人であれば、陽明學者としては古い部に屬する人である。誰も知る如く、我が國の陽明學は中江藤樹を首唱として、次は熊澤蕃山であるが、此の人は元祿四年に不遇で歿した。其の次は即ち此の内藤希顔であつた。彼の北島雪山もやはり朱子學から陽明學に轉じた人で、晩年は長崎にあつて放浪に歲月を送り、元祿十年に六十二歳で歿した。以上四家は皆書に長じて、林家の羅山、鶴峯、鳳岡以下の拙劣なものには比ぶべくもない。

希顔は朱熹のどの法帖を學んだのか傳つてゐない。朱熹の帖卷は甚だ多く、刻石も諸所にあつたのであれば、長崎の商舶を経て、江戸の初期から拓本帖卷が傳播したことであらう。今眞蹟とせられてゐる易繫を見るに、筆法は甚だ嶮勁

で、近寄り難き觀がある。又停雲館帖に載する尺牘を見れば、強ひて奇を求めず、穩健を以て稱すべく、此の二者の中間に立つものは長尾雨山氏藏の眞蹟論語集註殘裏書道全集所載である。而して希顔の書體は略これに近い。試に朱文公の石搨拓にして晦翁の名あるものに比較するがよい。相似るは朱熹の結廬對中岳詩幅ぐらゐるものである。

私の見た所では希顔が朱熹の眞蹟を學んだとも思へないのであつて、概ねこんな體を目撃して自己の一體を立てたのではあるまいか。嶮勁怒張に於ては共通の致を見る。

藤篤の眞蹟では、秋興八首書卷を第一と見た。方四五寸大の行書、年次は記憶を逸したが、一見宋人の書を修めたことが知られた。蘇東坡が出自かと思つたが、さうも定められず、二十年前賈人の手にあるを見て、求めようとして獲られず、終に菊池惺堂氏の藏となり、大正の大震災に烏有に歸してしまつた。これが私の不忘帖の一である。爾後斯人の書を搜ねたこと數年、仙臺に赴いても殘缺甚しきもの一點、怪しげなもの一點を見たに過ぎなかつた。其の後月を踰えずし



て中字ながら出来のよい節軒記を獲た。東京の小骨董舗に於て偶然求め得たのである。節軒は希顔の門人伊藤實民が游息の所、其の記は希顔の手に成つたもので、書辭共に莊重雅健、元祿二年六十五歳の時の書。昭和十二年四月に「逸人書家藤篤」と題して文藝春秋誌上に斯人を紹介し、併せて日清戦役媾和談判の會餘に李鴻章が伊藤公に向つて藤篤の書を推賞したことを記したことであつたが、其の直後に又古書肆の目錄に此の人の法帖が載せてあつた。就いて見ると、宋儒程伊川の語、四箴（視箴、聽箴、言箴、動箴）を記したもの、字大方四五寸、同じく元祿二年の書であつた。既に法帖として行はれたことを知り、之を仰ぎ之を學んだものにあつたことに驚いた。蓋し相當の癖を有し、文徵明又は子昂等の書風とは對蹠的な此の書が法帖として刊行せられてゐたのに驚きを禁じ得なかつたのである。

同十月に入つて、一日古書肆から先般紹介せられた内藤希顔の書卷を求めた、思召があらばといふ電話が來た。直に往訪した。疑もき藤篤の書で、最も晩年即ち元祿四年の十二月に凍筆を呵して記すとある。惜むらくは惡質の絹に筆

を揮つたもので殊に燈下の書であるが爲に、謹嚴な態は見られても怪奇奔放雄宕等の致は此の上に見られない。それでも杜甫の秋興二首、謝靈運の春登池上楼と杜少陵の宴漾陂及び禹廟と他に耳聾と合せて六首の詩を見ることが出来る。凍筆であつた上に絹の歪曲は印章の鮮明を缺き、文字の倚傾を増大した感がある。それにしても最晩年の書としては之を推すべきであらう。

蓋し藤篤の書は嶮勁に於ては朱熹に劣らないが、徒に松枯石老で精彩を缺くの憾があり、晩年に及んでますます此の風を加へた。私が不忘の中の一とする秋興八首の卷は天和又は貞享年中の書であつたが、秀拔渾厚甚だ觀るべきものであつた。けれども其の代表的ものは四箴帖であつたが爲に刻せられたのもあらうか。四箴の作者程伊川は、程顥の弟程頤で、大觀元年に七十五歳で歿した人、資性が嚴格で、蘇東坡と相容れなかつた人、此の二程の所説を集大成して宋學を組織したものは朱熹であれば、朱熹に伊川の語を書いた四箴帖があつて、藤篤が之を學び、後年己れの個性によつて之を變化せしめたものが此の四箴帖であつたのもあらうか。聞けば仙臺以外の根白石附近には時に藤篤の額面

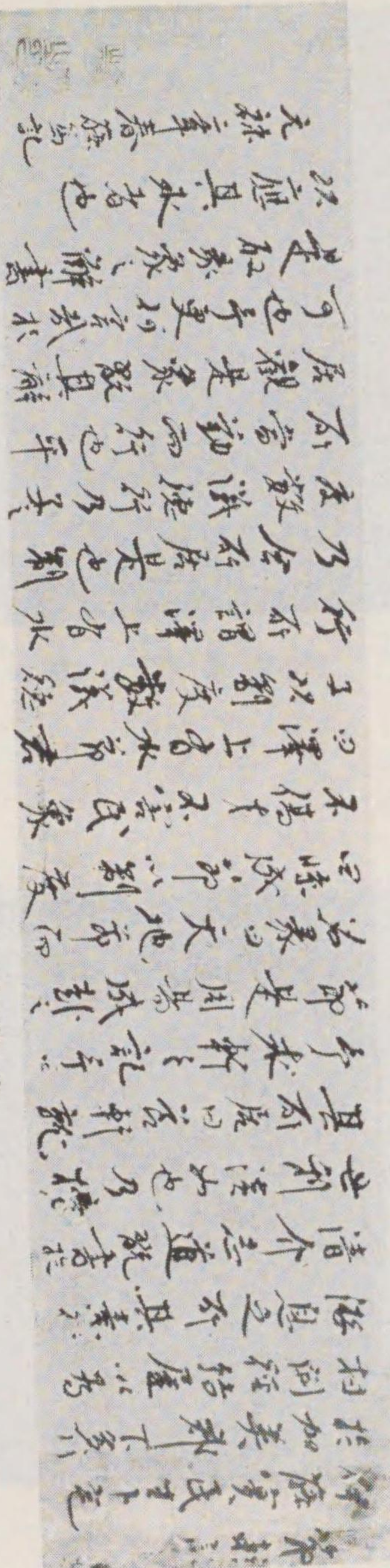


位は遺存するといふ。もし篤志家が搜索に力められたら、書卷類はまだ見出されるであらう。書道勃興の徴ある今日でもあり、探訪の上之を紹介せられたなら、喜ぶものはひとり地下の樂山ばかりではあるまい。

### 2 雪山瀟湘八景詩帖

我が近代にあつては、雪山を書聖となすことに諸家が一致してゐる。熊本藩醫の家に生れ、父に従つて長崎にゐる時、愈立德から、文衡山直傳の筆法を學んで書名が高く、後に張瑞圖の書風を加味して遂に書聖と目せられた。邦人の唐様に於ては先づ第一指を斯人に屈すきであらう。

漢土とは少しく事情を異にして、邦人の書名の高いものには、動もすれば無學の詬の伴ふ者が多かつた。上古は暫く措くとして、中古近古には、まだ此の病がさう著しくもなかつたが、近世江戸幕府時代に入つては、能書無學の評を免れなかつた。所謂手習師匠のみでなく、古帖を泥守してわづかに形似を喜び且つ誇り、氣魄神韻を傳へることに至つては之を知らなかつたものが大多數であつた。



内藤希顔筆 節軒記眞蹟



晚來堪事予  
 一水雪中  
 分與人懷  
 詩來前  
 江天  
 元稹也  
 十、秋

(三 其) 書詩景八洲瀟山雪島北

一秋孤舟雨  
 不分流与湘  
 夢遠蓬底  
 清風一水長  
 瀟山初雨

(一 其) 書詩景八洲瀟山雪島北

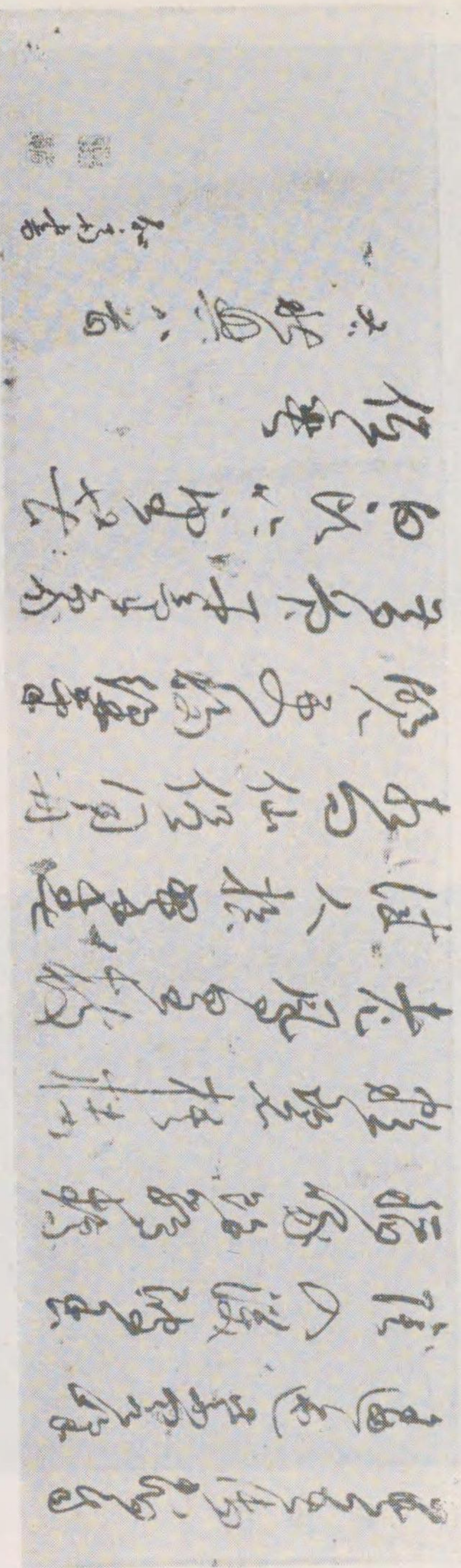
雲亦子賦存之  
 亦言此是生漏  
 不神學世  
 人非電  
 非  
 人

同 上 廣 澤 跋

歲更去  
 知多少  
 拍江  
 心布晴嵐

(二 其) 上 同





卷書景八湘藩筆卷省東安

蓋し無學の致す處で、神采突々どころか、書品の見るべきものは甚だ以て乏しかつた。彼の氣韻生動に至つては、近時に至つて稀に之を見るを得るのみと評し去つても大過ではあるまい。ただ北島雪山大雅堂等の書に至つては、時に景仰に堪へない神品に接する。さうしてそれは必ず恬淡古高、逸氣横溢の超人に限つてゐた。草書にあつては殊にさうであつた。

雪山は東都にあつては名儒と交り、柳澤侯に仕へ、藏書の富裕を以て書廚と稱せられたが、塵累を脱して西に歸り、岡侯に仕へて厚祿を食み、侯の陽明學を禁ずるに及んで、仕を致して長崎に出で、自適を事とし、佚宕勁剛の書を侶として、元祿十年十月六十二歳で歿した高士である。世に此の人の書として傳ふるものは敢て僅有にもあらず、逸話も甚だ多いのであるが、眞蹟無疑の書として傳へられるもの、特に法帖にあつては、謹嚴を極めたものが多い。さうして、奔放奇逸の書は却つて少いのである。或は即興の書で、神品秀作は其の上に見出されても、伯樂には逢ひ難くて拋棄されてしまつたのでもあらうか。雪山の眞蹟は熊本地方、長崎地方に比較的によく遺存するが、私の聞見した所のもは、多く謹嚴な法



帖ばかりで、時に屏風や額面の一二を寓目し得たのみであり、それにも款記印章の具備せるものは極めて尠かつた。

假名交り帖も無かつたのでなく、それにも大きに認むべき帖があつた。けれども眞價は文衡山式の唐様にあり、しかも、詩書ともに観るべきは、瀟湘八景詩賦書卷であらうと思ふ。私の手許にも眞蹟の長文俗帖が無いでもないが、敢て八景詩帖を推す。八景詩帖は雪山六十歳、老熟の時の書であつて、詩賦も亦自作なのが嬉しい。其の詩其の書はただ稀観だといふだけでもあらうが、私は細井廣澤の跋文と合せて、此の帖を同好に觀して、示誨を希ふことも年久しきに涉つてゐる。跋にいふ、

右雪山先生瀟湘八景眞跡、肥國人士獻之其國君、研覃公、往年國君使慎補三蠹蝕、慎固辭、君謂、雪山之弟子今無其人、非爾其誰與焉、慎不得拒、補三成一兩字矣、昔蘇舜欽補三顛素自敘六行、慎雖不敢當、然但據三故事、族人芝田繁卿工於響揚、善於彫刻、成而求之跋、慎老病不果、去歲繁卿以疾歿矣、遺愛遂歸、慎感悔無追、今錄三數字、亦據三延陵之故事、雪山先生筆迹不多、詩賦絕少、慎所貯只洛

陽幽賞及贈詩數首而已、此作不知爲誰、慎不忍獨賞、教三兒知文、打三成數帖、以贈諸友、呼嗟先生之異表、崎人至今傳之、若其字迹、則歿後益久而愈顯、不復言、雪山晚作雪參、

享保戊申春二月 後學廣澤知慎敬題

帖の來歴はこれに委しく、廣澤は雪山門人であり、兪立德からの直傳撥證法を授けられた高足である。我が邦の墨帖は正保年間京都の書賈が始めて刻したものであつたが、所謂左版で、まだ正面版なるものを知らなかつた。さうして臨摹雙鈎から鏤刊打摺に至るまで其の法を得ず、其の製は甚だ羸なるものであつた。貞享年中、廣澤が榊原篁洲や今井順齋と謀つて始めて其の法を審にして世人に教へたのであつて、支那墨池家の所説に従つたのである。其の廣澤が吾が子の知文をして數帖を打成させて諸友に分つたといふのである。精且つ稀であつたことはこれによつて知られるであらう。跋文中蘇舜欽が懷素の自敘六行を補つたことは、帖後李東陽の跋にも見えて、もと帖は蘇氏の家物であつたのだといふ。



## 3 恥齋の秋興八首書卷

恥齋とだけでは、ちと耳遠からうが、筑後柳河藩の古儒安東省庵のことである。蓋し晩年の號で、恥齋漫錄の序に、向之所爲者皆恥而已矣。痛悔深懲悉焚前作、因扁恥齋之二字、掲左右以爲戒焉といつてゐる。

省庵が知行二百石の半を割いて、明の遺臣朱舜水を扶知し、舜水が水戸に仕へるに及んで、それに酬いようとしても、毫も請けなかつた高義は周知のことながら、あれ迄に書に達してゐようとは思はなかつた。

二十幾年か前、伊豫の松山へ行つた時のことである。明月和尚の書が疑もなく懷素から出て、適宜な個性化が施されてゐるが、どうかすると少々翫び過ぎた憾がないでもない、と率直にいつた。すると其の座に居合せた西園寺富水老が、其の弊の無いのは安東省庵だと話された。やはり懷素から出た書であらうかと問ふと、其の點は判じ難いが、草書の長卷に尤品があるとのことであつた。省庵は私の尊敬して止まぬ學者の一人である。斯人の行書は少々見てゐるが、草

書にはさう秀拔の作があるなら是非見たいと思つた。歸京後一見希望の旨を申送ると、日を経て宇和島にあつた卷物を遞送して下さつた。私は見て驚いた。これが邦人の書であらうか。まるで唐宋人の書だとのみ感ずる。だが熟視してゐるうちに、御家流の混在を始として、筆の弛緩緊張の不整を思ひ、疾書の失を知り、さては臨摹ではなく、自己の好惡に應じて筆を動かした某法帖の臨書であらうと思つた。それにしてもうまい。厭ふべき濃艶や嫵媚もないのがうれしい。此の枯淡味の高きを買ひたい。たしかに懷素を習ひこんだものらしいが、之を手放すのは惜しいと感ずるやうになつた。其の情は一日毎に強まつて、ここに不忘書卷となつてしまつた。そこで言辭を鄭重にして割愛を申込んだ。數十日を経て希望が貫徹した。それが杜甫の秋興八首書卷で、曩に内藤希顔に得られなかつた歡喜を、是の獲得の上に味つたのである。反復幾回玩味熟覽をしたことであらう。果ては恥齋の書學に於ける經歷も知りたく、省庵先生遺集を繙讀した。成程、臨寫蘭亭帖跋があつて、四十を踰えてから書に志し、蘭亭帖や十七帖を臨すること數過とあり、又臨右軍草書跋もあつて、百遍見るよりも一遍



臨寫をするがよいなどと述べてゐる。乃ち書にも相當の力を致したことが知られた。當時羲之は誰も一度はやつて見たらしいが中々容易でないので、概ね他に轉じてゐる。省庵もそれで、私の見た所では秋興八首書卷は懷素の帖を臨したものに相違ない。そこで中村不折翁の書道博物館に就いて明刻の秋興帖を借覽して見ると、果してそれであつた。ただ極めて自由な臨書で、字の大きさを字詰なども一向原帖に基づいてゐない。自由であるだけ、それだけ拘束澤山でなく、生命の逸失してゐる文字ではない。名玉はつつむに骨が折れる。新獲の卷を甲に話し、乙に談すと、まづ展覽會への出品を勧められた。一二度出して見た。見せるたびに好評であつた。

何故に懷素の書が邦人に喜ばれたのであらうか。所謂御家流が成立した我が國である。伊呂波假名の使用された國である。支那本土式の楷行が喜ばれず、草體が最も親近され易かつた。草體も心徐かに見來れば、張旭よりも誰よりも懷素の書が喜ばれさうである。猷美のみに失せず、適宜な奔放性を發揮してゐる。それで底の心を汲んで見れば、謹嚴を失してゐない、一線一點も輕々しく

してゐない。良寛和尚は此の點をよく會得してあの字を大成したのである。菱湖も此の謹嚴味を失ふことなく、巧に取入れてあの書風大成の礎石の一としたのである。邦人には、隨分懷素を學んだものが多さうだ。秋興帖は省庵以下、自敘帖は良寛、千字文は明月の書の由つて出づる所だと私は見てゐる。

書家としては記憶されてゐないが、大阪の懷徳書院の最初の教授であつた三宅石庵は立派な唐様書家、確に法帖から出た書風で、所謂和臭味の少いのである。私は三十年前斯人の眞楷、字大方四寸ばかりの書放し一紙を見た。勁奇秀拔、何の流風とも片づけかねたが、其の見事なるに驚いた。筆者を問へば、三宅石庵だとのことであつた。其の時は購はうと思へば買へもしたのだが、款記の無いのがもの足りなくて差扣へた。其の後此の人は決して書いたものに款印をしないと知つて、買はなかつたことを悔い、時々それを想起したことであつた。顔法に通じてゐたといふのだが、顔法の外に懷素の字態筆意がありくと存する。たとへば明和に刊行した紫雲帖を見ても知られる。此の帖の奥書にいふ、

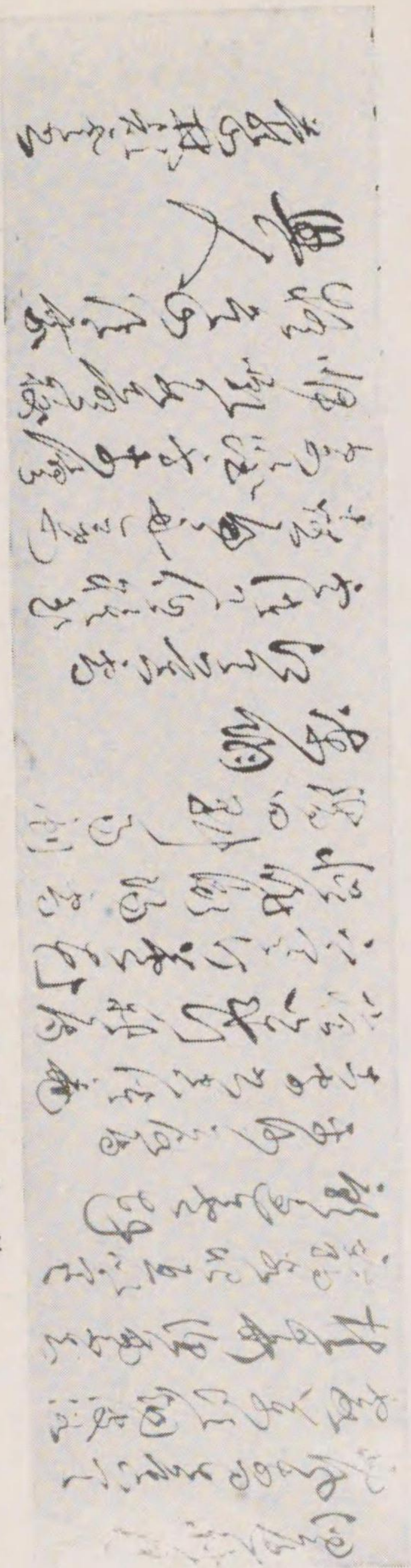
先子書法之妙、高攀唐宋、講學之餘、信筆揮寫、紙不留餘白、子弟或揀取得、存者



如此、絶句十九首是也……明和甲申之冬三宅正誼敬書  
 石庵の書は稀に存するが、款記のあるものは却つて怪しいものの如くである。  
 紫雲帖を見るに、決して凡筆でない。平俗とは對蹠的である。これだけ時流に  
 超越した筆を有しながら、落款もせず、印章も捺さなかつた所に、斯人の恬淡と高  
 逸とが知られる。但其の筆をやるのが疾きに過ぎるが、これが邦人一般の病  
 ではあるまいか。とはいへ、それなればこそ悠長性を缺けばこそ、戦へば捷ち、攻  
 めれば取るのであつてと抗辯をなさる人もあらう。それも亦一の見方であり、  
 書を藝術として取扱ふのと實用符標として考へるのとの間には絶大の開きが  
 あるのであれば、一概には論定すべくもないであらう。

4 林道榮瀟湘八景詩書卷

大正六年長崎に赴き、奄留數日、一日少閑、磨屋町に骨董商龜島某を訪ねた。某  
 は林道榮の後裔官梅雅一の遠姻である。喜び迎へて近代の書畫を觀せてくれ  
 やがて祕匣を披き、故紙の間より一葉を抄出して、是が林道榮の書だといふ。全



林道榮筆瀟湘八景詩書卷

蘇矣周文歌  
 夔鑄還輕漢  
 武舉橫汾豈  
 知玉殿生衣  
 善拒有銅池  
 出五雲陌上  
 夷樽傾非斗  
 樓榭舜樂飭  
 南薰共巖天  
 意同人意萬  
 歲千秋奉聖  
 君  
 丁酉之冬  
 林道榮書

中野搗筆八景詩書卷



紙に鶴の一字を篆體で書いたもの、決して筆力の雄健を以て勝るものではないが、方度嚴正に於ては群を抜いてゐる。よくも延寶・元祿の交に於て此の域に達したものだと思ひ、割愛を求めて歸つたことであつた。私はこれから一層道榮の書に興味を覺えた。

道榮は長崎の醫家の出だが、朱子學を修めて精通し、又文徵明や董其昌の眞蹟より悟入して懸腕直筆の事を識り、北島雪山と共に六書の講習を始めた人で、日本書道史上に忘れてはならぬ先輩である。朱舜水が長崎に滞留の時、永明王と定西侯に答ふる書と二通が、病褥にあつて執筆に堪へないのに、舟の出發期が迫つた。道榮が十三歳の時であつたが、小楷が巧だと聞いて代書して貰つた。道榮は毫を濡して疾書した。舜水は驚いて、氣度冲融、兔起鶻落、筆撮すべからず、小王令の家法の如くだと激賞した。萬治年中、長崎奉行の妻木定兼が任滿ちて江戸に歸る時、隨從して來て、其の邸舎に居つた。忽ち名聲が起つて、就いて學ぶ者が多く、爲に忌まれて竊害される虞があり、已むを得ずして長崎に歸つた。爾來ますく、尊敬を請けて寶永五年十二月六十九歳で歿した。著書は墨癡存稿十



二卷、杏僊帖、四體千字文等他になほ多い。道榮の書はさう稀少といふでは無い。随つて獲得も困難でなく、私も三點や五點は買求めもした。但近視眼の人で、行の曲る癖があり、其の最も長ずる所は草書であつたかと思ふ。瀟湘八景詩書卷は其の一である。惟石秋澗に奔りといつた概はないが、驚蛇草に入るの態はある。暢達自在に於て當さに無比、近視眼であつたといへば、目を以て書かず、意に任せて筆を驅つたのであらうが、習熟の極致を此の上に見るべきである。

## 5 中野搗謙の書卷

長崎の歸途耶馬溪を一見しようとして同志兩三人と車を中津驛に飛ばせると、汽車は今出たといふ。二時ばかりを待たなければならぬ。つひ二三町の所に書畫を商つてゐるものがある。そこへでも行つて見るかといふことになつた。行つて見た。御茶を賣る店であつて、主人は更に我等を迎へてもくれない。我等の中には中津の人も居るので、何か一品か二品見せてくれよといふ。主人は

奥へ入つて書卷の箱を持出した。「此の箱書はどう讀むのでせう。」私が「ナカノギケンだよ。」といふ。「どういふ人でせう。」と聞く。私は「太宰春臺の先生だよ。」といひ乍ら展べて見た。前赤壁賦でまさに名出來、裝潢一切が昔の儘である。よくもかうした名卷がこんな所に有つたものだと思つて買求めた。之を往年黒木欽堂が存生中書苑に連載したことがある。

搗謙は道榮の甥で、搗謙の母は道榮の妻と姉妹なのである。幼時父を喪ひ、母と共に道榮の家に寓居し、道榮は搗謙を子の如くに慈んで、讀書と書法とを懇切に教へた。搗謙も書に巧で、十二三歳の頃から書名が高く、特に草隸に長じてゐた。十九歳にして江戸に出でて朱子學を學び、關宿侯の書記に召され、元祿年中將軍綱吉が屢關宿侯の邸に臨み、搗謙を召しては經書を講ぜしめた。それより從學者が多く、春臺や安藤東野も其の門人となつた。關宿侯の封が吉田に轉じてからも相當に重んぜられて、享保五年七月五十四歳で歿した。

搗謙の書の出自は未だ詳かでない。道榮の書であらうか。やや媚嫵であるが、陥りがちな卑俗味は絶無である。むしろ謹嚴端麗である。行草が得意らし

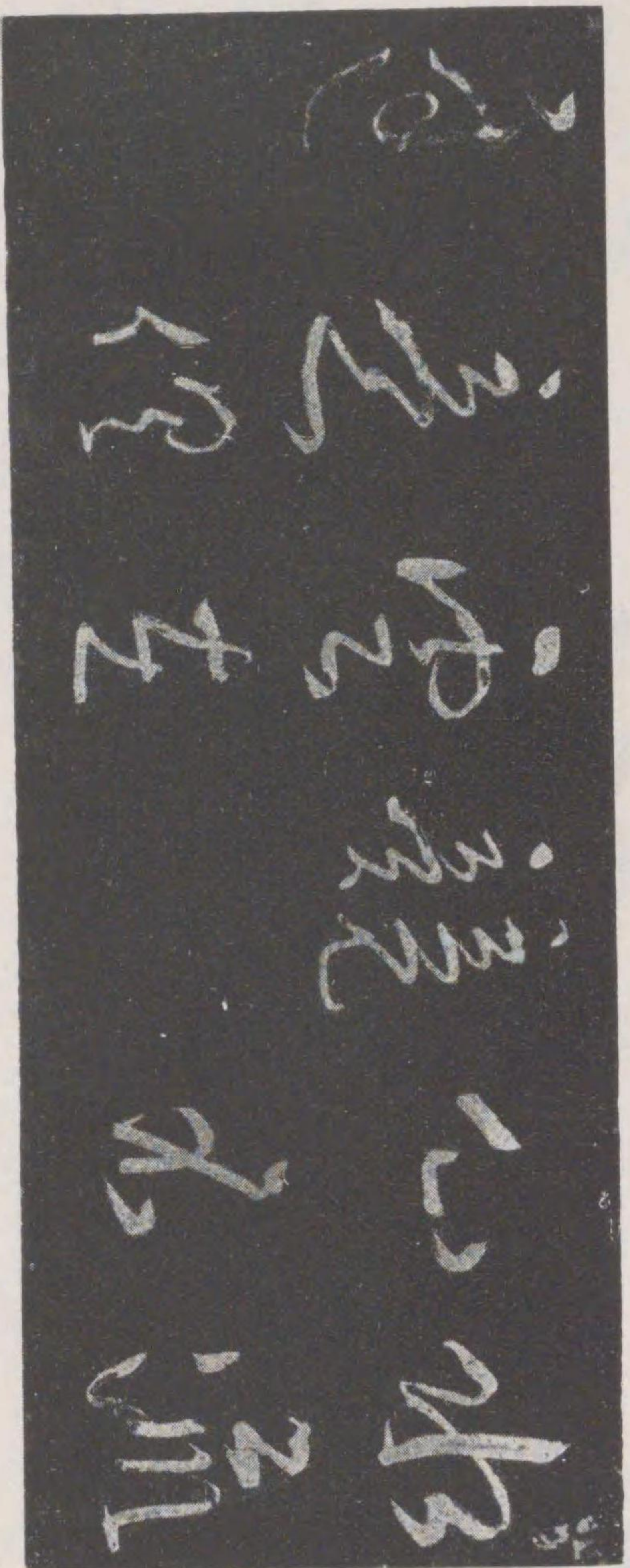


いが、道榮程の奔放は認め難い。人柄は至極温雅であつたことが想察せられる。春臺の書はこれに摸したのではあるまいか。世には張瑞圖の書風の加つてゐるものが、春臺の書として請取られてもゐるが、あれは疑はしい。故萩野由之博士も先哲書影に於て、雪山と春臺は誤つたと私に語られたことがある。

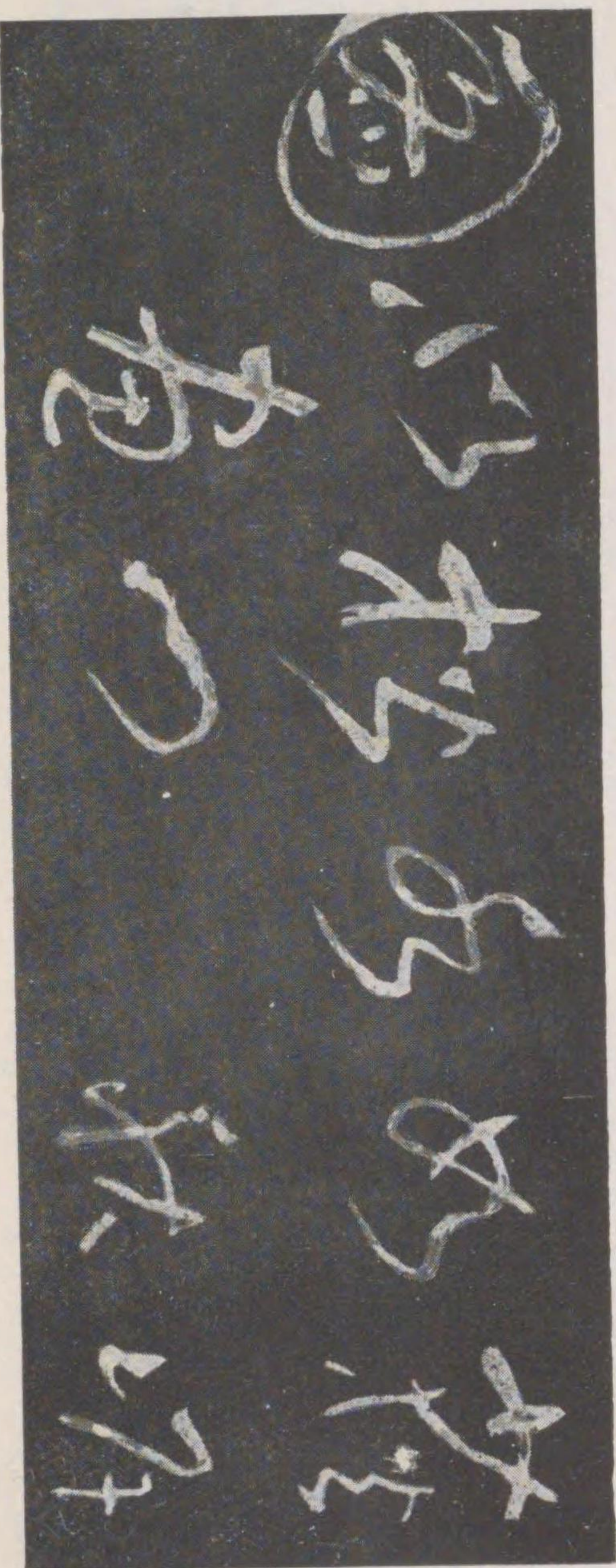
近頃になつて圖らず搗謙の書卷で、樂志論外二篇を書いた長卷を獲た。得意な草隸であり、其の死に先だつ三年の筆で、前者に比すれば、圓熟味が一段と勝つた出来である。

### 6 池無名水流帖

大雅堂池無名の書の渾秀は其の繪に譲らない。私は幼時より好んで其の字を観たが、出自に就いては定説を知らない。彫鑄して墨本として世に行はれたものも數帖はあるらしいが、中に就いて私は水流帖を酷愛する。大雅歿後の刊行で、刊行は其の素志で無かつたらしいが、私は其の湮滅に歸さなかつたことを喜ぶ。先年京都帝室博物館で、大雅堂の遺墨展観を行つた時に、其の版木が出陳



大雅堂筆 水流帖





源鱗冥鶴  
 小極有  
 李觀  
 北極一

金蘭齋書卷

名は水流心不競の句に起してあるからで、來由は帖後の海保青陵の跋に委しい。  
 當時此の帖の眞蹟原本が遺存してゐたのであるが、今何人の藏弁中にあるか知  
 らない。  
 別に私藏中に大雅堂の眞蹟間行流水圖がある。大横幀だが、往時は詩句と圖  
 と相聯つてゐた卷物であつたらしい。共通の文字が多いので、對照して見て得  
 る所が少くない。

せられたといふ。私は驚喜せざる得なかつた。

今私藏にあるものは、大雅の姻戚三上家に贈つたもので、私は三上家の沽却物  
 中に獲たのである。やゝ佚簡があつて完品の出るのを俟つてゐる。水流帖の  
 名は水流心不競の句に起してあるからで、來由は帖後の海保青陵の跋に委しい。  
 當時此の帖の眞蹟原本が遺存してゐたのであるが、今何人の藏弁中にあるか知  
 らない。  
 別に私藏中に大雅堂の眞蹟間行流水圖がある。大横幀だが、往時は詩句と圖  
 と相聯つてゐた卷物であつたらしい。共通の文字が多いので、對照して見て得  
 る所が少くない。

7 金蘭齋書卷

此の稿で不忘帖の記事を終らうと思ふ。大師流に關してはこれまで一切觸  
 れなかつたのであるが、今度は専らそれに就いて述べようと思ふ。

享保六年十二月廿四日に七十九歳で歿した秋田出身の金蘭齋こんらんさいが、草書に偉腕



をふるつてゐるとは、故黒木欣堂君から聞いたことであるが、其の書を見ること  
が出来なかつた。京師に住して老莊の學を講じてゐたことは、淇園の諸家人物  
誌や伴蒿蹊の近世畸人傳ぐらゐで知つたが、其の書蹟に接したのは一昨々年、書  
藝の上で石田直太郎氏が金蘭齋の詳傳中に掲げられた北極一首書卷の一部を  
見たのが最初である。奔放不羈は驚くべきだが、出自は支那の法帖でなく、なほ  
大いに研究すべきものだと思つた。すると今年に入つて西村南岳君が秋田の  
奈良磐松氏が珍襲してゐられる此の北極一首の全卷を拜借して下さつて、ゆる  
ゆる玩賞の時を供給してくれられた。こゝに掲げたのは其の一部だが、私は熟  
視するに随つて、大師流(入木道)の大いに加味せられてゐるを感じた。入木道は  
元來書道の意だが、我が國では意を狭めて、わが上代様の書風とし、起源は弘法  
大師にあることにした。而して室町の如く季世より大師からの傳統だといひ  
出した。手短にいへば、賀茂の祠官藤木敦直によつて大いに興起したもので、過  
去に於て十分日本化した書道に、改めて唐やうの書風を加へて、形を整へたやう  
に説くのである。蘭齋の時代は敦直より少し後れて、敦直の子の寂源の時に該

當する。寂源はえらぶつで、其の門人帳を見ると、慶安二年から元祿にかけて然  
るべき人達が三百人もゐる。さうした其の中には、官方や公卿や諸山の座主も  
あり、比較的に恵まれてゐた士庶もあつて、何れも神文を納れて、書道の傳授を請  
けたものである。叡山僧で高良山の座主であつた寂源の、京都あたりに於ける  
權威といふものは、實にえらいものであつた。隨て京都在住の蘭齋が其の書風  
に化せられ、多少の模倣をしたかとも考へられるが、老莊でもやらうといふ人間  
には、そんな事もあるまい、意の赴くがまに、筆を走らせたのであらう。醉中  
笑書と斷つてあるのも眞實さうであつたらうと私は考へた。それでも念の爲  
に石田氏の詳傳を讀むと、秋田の金浦こんのうらの出の人で、父三室は醫者となつて秋田藩  
宰澁江氏に殊遇を受けたが、孤兒を遺して死んだ。其の孤兒といふのが蘭齋だ  
とある。父の死は萬治二三年頃で、蘭齋は當時八歳位であつたといふ。澁江氏  
の斡旋の下に、邑の大龍寺に入つて書を學び、十八歳の時、初めて京都に入り、西山  
李齋を師とし、後、伊藤仁齋に就いて修學したとある。西山李齋は私には耳新し  
い人である。そこで再び寂源の門人帳を開くと、卷頭に近く、注意すべき左の記



載を見る。

萬治元年十二月十四日

八木李齋

萬治三年四月十一日

李齋舍弟稱號磯部

しかして李齋舍弟の所に、八木庄兵衛と記してある。西山は居住地で、本姓は八木であつたのではあるまいか。それなら蘭齋が京都に於ける最初の先生も、其の弟も、藤木家の門人であつたのである。當然のこと其の書風が混入してゐても一向不思議となすには及ばない。仔細に調べたら、まだ秋田藩士の名前を此の門人帳の中に見出すであらう。當時の米の運漕情態など考へると、かうもあるべきだと考へさせられる。

江戸の初世に於て、老莊の書を講じ、老子經國字解を刊行して好評を博した人であれば、蘭齋は特殊な氣魄の所有者であつたに相違ない。老莊に興味を有したのは誰に導かれたか明でないが、恐らく蘭齋の資性が恬淡で、倜儻不羈、禮法に拘らず、家に儋石の蓄が無く、環堵蕭然たる中で、老莊を講じて粥の資に充ててゐた結果、書にかくの如き氣魄と勁剛と奔放と超邁とを兼備して、筆法や墨つきな

どには頓着せしめないことになつたのであらう。蘭齋が一字の半ばで墨をつぐが如きは、日常茶飯事なのである。草體にあつてもさうだが、行書體に於て勇健を示せば示すほど、大師流と稱するものに近接する。文字の大小や字詰などは更に其の顧慮する所でない。頃日書道に造詣の深い二老人が私を尋ねて來て、私が此の書卷を愛觀するを見て、大きに我が意を安くしたといつて喜んで歸つた。それは些末のことに囚はれないからである。

往年日下部鳴鶴翁は、眞崎勇助氏の藏、歸去來辭を見て、激賞止まなかつたといふが、其の書卷の所在が今不明だと聞く。甚だ眞面目で雅韻のあつたものだといふ。篤志家によつて搜索されることを切望する。それが此の北極卷の如く、大師流風のものであるか否か、是非一度寓目したい。蘭齋は漢文も詩も達者な人である。今其の舌耕時代を考へると、長崎の盧草拙と相當り、共に享保の末に近く歿するのであるが、蘭齋の方が十八歳の年長者であれば、老子の講釋も蘭齋の方が先であつたと考へたい。されば漢學史上で大いに注目しなければならぬ。蘭齋の物にかゝはらぬ貧生活は老子を生で見るやうな人であつたらしい。



## 8 屋代流

漢土傳來の書道書法は平假名に調和すべき書風の發達を促し、遂に世尊寺流が成立し、他には青蓮院宮尊圓法親王によつて豊美圓勁の一流が起つたのであつたが、享祿五年に世尊寺流の家は絶えた。これに代つて持明院基春が後奈良天皇の仰を受けて書道の家を興した。これが持明院流である。藤木敦直等は此の持明院流に支那の筆法を加味して、あの一流を起したと思へばよく、わが國の書風で、藤木流を奉じなかつたものは、多く此の持明院の流を奉じたと思つてよい。江戸開府以來唐様が次第に榮えるに至つて、持明院流はさう振はなかつたが、江戸中期にあつては、森尹祥が持明院家の傳授を受け、継ぎ、旗本や諸藩の士に之を傳授し、寛政十年三月かに歿した。身分は江戸幕府の右筆であつた。これに學んだ屋代弘賢も同じく幕府の右筆に擧げられ、藏書の豊裕を以て知られた。不忍文庫を設立した。塙保巳一門下の學者で、寛政に入つては柴野栗山に引立てられた人である。極めて書のたちのよい人で、唐やうを加味して一流を立て、

世に屋代流と呼ばれた。先頃三村竹清君が書苑誌上で其の書を紹介せられた。歌などはまさにあの書風である。但し漢文の時には書體がまるで違ひ、虞世南ばりのものもあつて、これが却つて名高い。

私は弘賢に代表として見る如き三つの拓本を持つてゐる。一は伊勢の林崎文庫之碑で、文は本居宣長が天明二年十月十八日に作つたもの。書いた者は弘賢で、幕府内史局直事源弘賢書並題額と署してゐる。高さ五尺六寸幅三尺の碑面に平假名交りの長文が刻されてゐるのだが、先づは持明院流で、多少唐様が加味されてゐる。二は、築井古城記の拓本で、文化十三年冬十一月廿又八日と刻してある。文は大學頭林述齋の撰で、白川少將朝臣(樂翁)の題額、書は源弘賢の手に成る。書體は眞楷、虞世南の夫子廟堂記其の儘の書風で、見事な出來である。築井城は相模の築井にあつたのだ。後十五年たつて山梨稻川の碑を、弘賢の門人の狩谷掖齋が、虞世南の夫子廟堂記風に書し、撰文は幕府の儒官松崎慊堂で、篆額も掖齋であつたので、説文三家の碑と稱して尊重したが、此の築井古城記の方が古くもあり、顔ももつと揃つてゐる。三絶の名は寧ろ此の方に屬すべきである。







許にも獨樂園記と異なる所のない書體で、掖齋が宋袁采が交友の心得を述べたものを、絹の上に書いた幅がある。掖齋と小島成齋とは庸書關係がある。成齋は少祿の士で、掖齋が保護の手をかざしたやうにもいふが、教導といふ點でも掖齋の方が先輩であつた。元來成齋はずつと遅くて文久二年に六十七歳で歿するのであつて、成齋が書風を掖齋に及したことはなく、一切は弘賢に起つて掖齋に及びそれがまた成齋に及んだものと見る。



## 一三 山莊漫語

(昭和十三年八月稿)

## 緋 鯉

一年ぶりで山莊へ来て見ると、門からの見込が一變してゐる。數年山莊の留守をしてくれた友人が家事上の都合で故郷に歸らなければならぬ事になつて、昨年から出入の植木屋に留守を頼んだのであつた。専門家のことだから鉢植の配置も面白く、庭木の種類も増加してゐ、池に幾色かの睡蓮を浮かせて、それが今しも花盛りなのがひどく趣を添へてゐる。

時局柄逃避行など企つべきでないが、今春來關係した仕事が必ずしも在京を必要とせず、盛夏の間ぐらゐは山莊に棲遲しても差支が無さうなので、特に許を得て單身行李を携へてやつて來たのである。仕事といふは、やはり文筆關係であるが、それが五日置十日置に郵便で來るので、さう忙しいといふ程ではない。

私が十四五年前に出した日本歌謡史が巻末に明治大正の部を増補することが必要になつた處へ、出版元から是非といふ要求が出て、其の草稿を二十日ばかりで整理し了へると、そろ／＼孫どもが山莊へやつて來る日が近づいた。喜ばせてやりたいが、山鳩は先の留守居の所有で、持歸つてしまつた。池の面が少し淋しいがと思つたら、緋鯉や金魚の數が減つてゐるのが原因であつた。指定スキ場になる程の信越境の湯の村で、汽車の音が聞えるではなし、せい／＼水音と犬の吠え合ふのが、時折かしましい位のものである。小さい孫どもがそれを喜ばう筈が無い。やはり鳥か魚の動くものがよいと思つて、緋鯉や金魚の補充を企て、二三尾づつ買求めさせて見たが、池が二つあつて相當に大きいので一向子供達の喜ぶ迄の賑やかさにはならない。留守居の者が心當が出來たと言つて、つい近くの家から二三返に二十尾ばかり運んだ。一尺四五寸大の三色鯉、二色鯉、俗にいふ緋鯉、白鯉、斑鯉がゆら／＼と睡蓮の下蔭に見え隠れして、大いに賑やかになつた。何でもこれ迄小さな水の冷たい池に飼養してゐたので、大きくなれなかつたのだといふが、山莊の池には湯尻が適宜に加つて、溫度もよく、日當



りも木蔭も水深も程加減なので、鯉金魚が勢を加へて泳ぎ廻る。十月になると、もう餌を食はないと聞いて、大麥を二三合づつ煮させてはやると、十日ばかりで、目立つて肥え太つた。私が仕事のあひまゝには、欄に寄つて無心らしく遊ぶ魚の姿に見入ることになつた。自分ながら老境に入つたなと氣づくこと、孫どもが東京からやつて來た。見るなり、一番大きな奴が威張つてゐやがらあ」と評をする。成程一ばんの駄鯉であるが、子供のやる麩を、小さい仲間をかきのけて、ぱくりと一口に呑んでしまふ。昨年田上りの小さい鯉を澤山放したのだが、大きなのに呑まれてしまつたのだといへば、人類社會は池の面にも見られる。呑むものと呑まれるものだ。呑まれるものは宣傳もせず、呑まれて行く。運命といふものにして、攝理とか調節とかが行はれてもよささうだなどと思つてゐると、肩越しに何か飛んで池の面へ落ちて、ぼちやんと音をたてた。小さい孫が林檎を投げたのである。私は睡りからさめたやうに覺えて、孫を伴れて子供室に入つた。さうして乗物づくしの繪本を讀んでやつた。山の上を汽車が通る所に、凄いなあとあるのを讀むと、三歳になる孫が喜んで「凄いなあ」と歡聲を發す

る。同じ本を何遍も讀まされる煩しさに、子守を呼んだ。やはり逃避を企てなければならぬ。

### 儒者の書

江戸時代の儒者の書を二三十枚に説く約束をしてあるが、歸京すれば、又もとの多忙生活になる。やはり山莊で書いてしまふことにした。何の記憶をたどれば、五十枚や六十枚はと思つて、先づ寛永時代、元祿享保時代、寶曆時代、寛政時代、化政以降と五時期に分けて見ることにした。寛永は近代儒學の開祖藤原惺窩及び其の門下の時代、元祿享保は第一次儒學の旺盛期、寶曆は輩出した儒者たちの書の老熟した時代、寛政は第二次の旺盛期、文化文政以降は詩文家の輩出した時代と、かう見立てたのである。書の達人は必ずしもこんな時代分けに順應して出る譯のものでなく、隨時書才の天分裕かなものに因つて一流一派が開かれ、其の模倣者が相次ぐに及んで、其の書風が流行するのである。又書は人の好嫌ひによつて、其の法とする手本が同一でない。よつて何學派の書などと、學派に



よる書論は出来ない。又若年の時、壯年時代及び晩年時では書風がひどく違ふ人もある。のみならず書簡と改つて書いた書幅の書即ち所謂餘所行きの書とは大分違ふ。けれども漢字には共通味があつて、それには法帖の風が現はれるものである。よつて人の書に對して眞僞の判断を下すには充分の注意を致すべきで、濫吹と苛察とに陥らないやうにすべきである。私は此の趣意の下に必ずしも比倫の少い品といふよりは、其の人の書の變遷を物語るものを喜んで買求めた。それを私の一度も逢つたことのない弱年の人が私を評して、僞物を買つて喜んでゐるといつたさうだが、迷惑の話だ。手紙類から得た知識で、其の人の餘所行きの書までを律するのは、一隅をあげて他の三隅を類推するものである。煙草盆でもそれは許されない。況んや一代の間には變化し易い人の書風をや。

それと共に出來得べくんば、學問も書も勝れてゐるが、餘り世に知られてゐない人、書名に掩はれて學問の該博または深遠が知られない人、此等の儒者は進んで紹介すべきを思ふ。それにつけては左右に参考書があり、藏架に書畫のあ

る書齋に於て筆を執るべきを思つて一たびは中止したが、曉冷水聲に客夢を覺ましては、展轉反側をなし、其の果ては起き出でて記憶をもとに敘述をし始めた。こんな時に拙藏の儒家屏風の六曲片雙でも座右にあれば思出の手引にならう、あれには詩と尺牘を主にしてあるが、元祿より文政天保にかけて四十餘家の眞筆を四十年もかけて蒐めたものを貼つてあるのだがと思へど、山川百里を隔ててかひが無い。それで携帶行李の中に、何かあらうと思つて開けて見ると、今年は俳句類では白隱和尚の自畫讚に「鶯になりが似たとてみそささひ」と記したものがあつて、蘆菴や濱臣や石田梅巖や似雲の歌まであつて、釋家では春屋宗園の法語もあつたが、儒者筆蹟としてはたつた二幅あるだけ、一は中井履軒の行書七絶聯落、他は田鶴樓の七律横幀である。

履軒は大阪の人、中井竹山の弟、終身諸侯に仕へず、志氣の高岸を以て聞えた。懷徳書院の教授になつた人である。其の書蹟の傳はるものは少く、草隸に巧なものを以て許された。私は此の人の行草の書數幅を購つて見たが、卷くが惜しくて幾日も掛け通して置くといふが如き名出來に接してはゐない。今度山莊へ



來る數日前にふと入手した一軸は、此の人としては謹嚴な書幅で、次の詩が録してある。

步隨流水覓溪源 行到源頭却惘然

始悟真源行不到 倚筇隨處尋潺湲

固苦しくない教訓の意が寓せられて、見る人の心々で深淺如何やうにも解せられる。禪僧の作か又乃公自身の作か、そこまで調べる餘暇を持たず、又掛けて熟視する時を得ずに、行李に入れて來たのであるが、幽人を別號とする履軒には、此の位の悟りはあつたことも疑はない。これも行書であるが、いつもの行草よりは遙かに眞面目を示して、一點一劃にも心をこめ、悠揚の中に超俗を示して、卷くに忍びず、こゝ五六日掛通しにしてゐる。一體大阪の懷徳書院の教授には書道に勝れた人が多い。最初の教授三宅石庵は大日本史執筆者の一人三宅觀瀾の實兄であるが、顔眞卿を學んで會得する處が深かつた。特に楷書の上に顔法が鮮やかであつたが、草書では争座位帖の面影が十分に窺はれる。元來書くことは嫌ひで無かつたが、曾て一度も款印を施したことが無いので深く留意しない

奉和

橋梁先生高韻

露下梧桐淨玉堂  
綺筵開處月華光  
却杯休業堪浮影滿袖  
文豈香美問陶朱  
五湖逸行論李白  
四明松檜中畫  
清以黃鶴又見研  
款壽菊言

田仙澤和

益田鶴樓眞蹟



と見誤つて、筆者不明だといつてしまふことがある。次の五井蘭洲も勝れてゐた。後れて兄の中井竹山、弟の履軒が相次いで教授となり、二人共に儒名はあつたが、書は弟の方が上だ。前掲の詩は大島原田兩氏の譯註を加へられた良寛詩集の中に出てゐることであるが、良寛よりも履軒の方が二十六歳の年長者で、兩人の間には別に交渉が無かつたのであれば、もつと古人の作であらうと思つてゐる。

田鶴樓本姓は益田名は助右衛門、字は伯隣、始め確樓と號した。江戸小田原町の五靈膏本舗の主人である。客を好んで杯盤狼藉の中に起臥して、霑醉を娛としたといふ人である。高く標持して、門人を取るを好まない新井白石が、梁田蛻巖と此の人とだけを門人としたと傳へ、蛻巖はあの通り詩書に長じて居り、白石は詩書は當代に比肩するものが無いと稱せられた。確樓といふ號も其の居室が鶴ばかりを畫いてあるので、鶴樓と改めさせたのも白石であれば、伯隣も定めし詩書に長じてゐたであらうと思つたことも永年のことであつた。それでも詩だけは諸書に散見し、集に鶴樓遺編三卷もあるので見ることが得るが、書は見



たことが無い。書通を以て聞えてゐる人に尋ねても、知らぬ見たことが無いといふ。それが不圖手に入つた。奉書紙一枚に

奉和

鳩巢先生高韻

露下梧桐淨玉堂。綺筵開處月華光。御杯竹葉堪浮影。滿袖芝蘭更覺香。

莫問陶朱五湖逸。何論李白四明狂。樓中畫得皆黃鶴。又見酣歌舞菊裳。

田伯隣拜

とあるものである。田鶴樓が、字は伯隣であつたことを忘れてゐたが、室先生の韻に和すとあるので、相當な人だらうと思つて、求めて持歸つた。讀返して見ると、どうしても田鶴樓の作でなければならぬ。よつて手近の先哲叢談を開いて見ると、鶴樓の字が伯隣である。別に氣取つた書ではないが、健筆で雅味裕かな草書である。これが鳩巢の遺孫からでも出たのだとなほよいがと思つて、聞合せて見ると、白石の後裔の人が傳家の反故一束を賣つた其の中にあつたものかといふ。それなら分つた。師の白石に批正を求めたものであると、益々面白く

感じて、早速表装に廻した。山莊へ来る前々日に出來たので、見て楽しむ時間がなく、やはり行李の中に入れて來たのである。伯隣は歿時享年共に不明である。鶴樓遺編に附載してある南郭撰の鶴樓傳に「今年六月鶴樓小病不數日而歿」とだけあつて、今年とはいつのも事だか分らない。先哲叢談に、南郭たちは徒に情を詞藻に留めて、事實を考究するを知らない。百歳の後之を讀む者をして、其の故を解し得ざらしめる。これなら傳があつても後世に裨益することが無いと批難をしてゐる。眞に尤ものことで、南郭ばかりでなく、護園門下、いや徂徠にも此の弊がある。序にいふ、田鶴樓の歿は寶曆元年六月三日だとのことであるが、享年は分らない。

他には大日本史の跡始末をして功績のある豊田天功の十七帖ばりの一行幅があるばかりである。天功は羲之を習熟してゐることが知られ且つ其の出來がよいので書齋掛用に携帯したのである。以上三點を除いては、儒者の書執筆の際考慮に入れられさうなものはない。こんな棲遲生活には陽明學者として先覺者の内藤希顔の書卷、安東省菴の懷素の臨書、春水の富士行、近くは狩谷掖齋



の虞世南ばりの書でも持つて來てゐたらと、つくづく思ふのである。江戸初世から幕末迄の儒家の手簡數十本を蒐めたあの「儒家尺牘」の巻でも持つて來てゐたらと思ふが、後悔は此の際何の用もなさない。

## 良寛研究

縁談なんかは下手の私が員に加はらなければならぬ義理が生じて、山莊を出て越後の柿崎へ出かけて、それでも無事に済んだ。もう二三時間汽車旅行をすれば良寛の筆蹟の遺存中心地に着く。二十年前數日を其の地方に費したが、良寛の生地と終焉地と長岡新潟とで其の書を見、次いで正確な由緒あるもの三四點を求めて愛玩して來ただけである。今度は與板を中心にして西蒲原の國上山の五合菴、徳望家にして良寛の書に富む解良家、良寛研究家の森哲四郎君を訪ふことを目的として數日を費すことにした。先づ長岡を経て與板町に直行したら、森君が長明寺の前波氏方へ東導して下さつた。森君は温厚誠實な研究家である。私は斯人の話によつて積年の疑問が氷解し、解良家を訪うて良寛の書の秀

絶品を拜見した。國上山にも登つた。五合菴をも訪ひ、乙子祠にも詣でて良寛の碑を見、與板町では長明寺の藏、蓮生寺の記念碑、倉品家の名蹟、久住家の屏風、大無量壽經の抄録幅、森君藏の名蹟類を拜見して、三日を費して歸莊した。森君の談話はまた別稿に詳記するであらう。自己の所懐も細述するであらう。ただ良寛の前に有願といふ人があつて良寛が此の人に導かれたこと、良寛の後北越に書道の行はれたこと、良寛は諸家より法帖を借用して其の長所を採つて、あの書を大成したことだけを記す。勿論草書では懷素の自叙帖及び千字文、假名では秋萩帖が出自であることは動かし難い。歸莊すると電話で召命に接してゐた。準備に一日を費して急遽東京に歸ることにした。そここゝに應召兵を送る旃の立つのを見ては寸刻も早く歸つて筆を執つて御奉公をしなければならぬと思はぬを得ない。



## 十四 良寛三日

(昭和十三年九月稿)

大正五年の秋である。私は命を帯びて新潟縣へ旅行した。比較的に自由が許されてゐた旅で、成るべく片田舎も見て來るやうにといふことであつた。それで洋服を着てゐるものを見れば犬が吠えるといふ僻地へも行つたが、其處でもカチューシャの唄を子守兒が謡つてゐるのに驚かされたことであつた。

私は何の幸か、數年前からあこがれてゐた高古の逸僧良寛の書の石摺、後になつて知つたのであるが、國上山の乙子社畔に立つ記念碑、即ち生涯懶立身云々の幅を高田市に於て見た。さうして私の行程が良寛の終焉地島崎村の近くを經過することになつてゐた。島崎の隆泉寺には私も多少の縁邊があるので、丁度日曜日ではあり、同寺を訪ねて、先づ良寛の墓に詣で、良寛を擁護した木村家の墓がそれに隣接してゐて、其の表には良寛の筆に成る六字の名號が彫りつけてあるのを拜し、寺に保存する良寛筆の寄附札を見て、木村家へ案内せられた。木村

家は能登屋で知られてゐる家で、折りふし主人は不在であつたが、屏風掛物卷物、雜記の類、苟くも良寛の筆に成るものは悉皆陳列して下さつた。良寛の父の以南の書も列べてあつた。私は躍る胸を押へて、草聖の書の一點々々を熟視した。晩景に至つて見了へたが、難讀は今更に倍加するを覺え、禿筆の書が多く、又出來不出來の差が甚しく、脱字幅の少からず存在し、草書の拔群無比なると共に楷書は得意でない。それでも一點一劃を忽にしてないのには十二分の敬意を捧げて辭し去つたことであつた。それから寺泊長岡新潟地方を経て福島の方へぬけたのであつたが、所在で良寛の書十幾點ばかりを見た。今時の如く眞蹟と稱するものがさう多く無く、到る處で良寛の逸話ばかりを聞かされて、心に多少の疑惑を抱いて歸京したことであつた。それは良寛に對して最眞の引倒しをしてゐることと、逸僧を理解し能はぬのではないかと思ふことであつた。さうして、此の旅に於て私は良寛の最も勝れてゐるものは詩偈で、次は草書、其の次ぎは和歌ではあるまいかと思つたのであつたが、今も其の考はさう變らない。其の後私に良寛の書蹟景仰の念が高まつて、遺墨集刊行の企てもしたが、それは需に



應じて人に譲つて、四五の眞蹟を入手して満足してゐた。それには學僧日野宗玄さんを煩はした唐の崔塗の春夕旅懷七律の尾聯を少しく改めて書いた半折と、和歌と、中庸の句を書いた小點一紙と、他には尺牘色紙類一二點であつたが、小點に就いては中村宇吉さんの最大好意を受けたことを記し留めなければならぬ。爾後の二十年は良寛熱が一年増しに高まつた。眞蹟と稱するものはますます増加して東京や大阪でも容易く見る事が出来、事實越後地方の舊家の藏品が此のあたりへ移轉しても來た。私は一般書道に興味を抱いてゐるので、さう良寛にばかり没頭してゐるのでは無く、止むを得ない時の外には發言を避けてゐた。

此の夏山莊へ棲遲の積りで行くと、突然越後へ聳入りに同行してくれこのこと、行先が良寛の生地にさう遠くないので、喜を抱いて行つた。さうして用を了へたのは八月二十一日の深更であつた。

八月二十二日 與板行

長岡を経て三島郡與板町に森哲四郎君を訪うた。同君は良寛研究に半生を

捧げられた誠實な人で、直に小生を導いて長明寺に前波善學さんをお訪ねした。前に日野師の周旋をして下さつた良寛の書は、古くから此の寺で持傳へてゐたものであつたので、私は折を得て、挨拶に出たいと思つてゐたのであつた。前波さんは書に趣味を有せられる方で、珍藏の良寛遺墨を示された。此處で私は、以南の「松蟲の嵐にいたみ啼夜哉」と記した短冊以下味ふべきもの數點を拜見して、前波森二君と共に同町の蓮生寺を訪ねた。此の寺には良寛筆の記念碑があるので、それを拓本にしたいと、それが今度の旅行の目的の一つであつた。碑は御堂裏にあつて極めてよく保存されてゐる。「法會」と記した本坊の分は摺ることを快諾された。支坊の分は「自然」とあつてこれも上出来であるが、金網の掩ひがあつて、どうしても拓本を取ることは許して下さらない。けれども森君が往年石摺にせられたものが、友人の手に保存されてゐる。貰ひ受けてやらうとの事に、轉じて徳昌寺に鐵元和尙を訪うた。良寛と宗派が同じく、曹洞宗の御寺である。此の寺の三四代前の大機和尙が良寛と親交があつて、良寛に引導を渡されたのである。其の當時の過去帳を拜見し、なほ本堂に立ててあつた屏風に湛海和尙



の奇抜な書に目を見はつて、次いで久住重次郎氏の許に良寛の名詩を書いた屏風と大無量壽經の一節を抄録した幅とを見た。共に味ふべく、重んずべき書蹟であつた。

此の夜は前波さんと共に森君の許に招かれて、良寛の遺墨はさう多く見られなかつたが、研究に資すべき寫眞の幾百枚にも達すべきを見て、君の研究の根據を知るを得た。又良寛時代は北越地方に書道の行はれてゐたことも知り得た。元來北越には素封家で文人墨客を喜び迎へた者が多かつたので、鵬齋詩佛菱湖・雲泉・如亭等は皆此の地方に幾歲月を送つたのであつた。自然、書道も行はれて、幾多の書帖が諸家に愛藏せられた。良寛は其の生地の出雲崎を始め、國上山附近にかけて注目すべき書帖の借覽に力めた。草書に於ては懷素の自敘帖を酷愛して、其の模倣に専心したが、同じく其の千字文にも眼をさらした。如何はしい和刻も點在したらしく、克明な真正直な良寛は誇らず高ぶらず、其の何れにも模倣を試みたものらしい。假名は道風の秋萩帖を主にして學んだのであるが、それも文政刻の不出來千萬な帖をも模した。其の書風のものも眞蹟中にある

ので、眞否は巧拙を以てだけでは判じ難く、後人をして大いに困惑せしめることもある。固より秋萩帖は松崎慊堂や狩谷掖齋の跋を附した文化刻も見、また雙鉤本も熟覽して模倣に終始したことは、良寛遺墨の出來のよいものほどが之を示してゐる。又和刻假名帖も随分いろいろ見たらしいが、最後に秋萩帖に傾倒したらしいのである。斯人が十八歳で出雲崎近くの尼瀬の光照寺で出家し、二十二歳で備中國玉島の圓通寺で國仙和尚に就いて學ぶことが多年であつた。此の圓通寺修業頃の書を見たいと思ふのだが、まだ見たことがない。四十歳頃だといふ證左のあるものにも接してゐない。私は後に説く五合菴棲遲時代即ち文化の初年あたりから書名が高くなつたのではないかと思ふ。

八月二十三日 解良家訪問

早朝車を驅つて森君と共に、西蒲原郡の牧が花の解良家を訪ねた。良寛が親交のあつた家で、同地方の豪族であるが、十代目喜惣左衛門叔間が其の頃の當主である。叔間は詩歌が出來て、良寛の五合庵時代の擁護者であつた。森君が熟知の家で、今の當主の淳二郎翁は近年少々健康を損じて引籠つて居られるから、

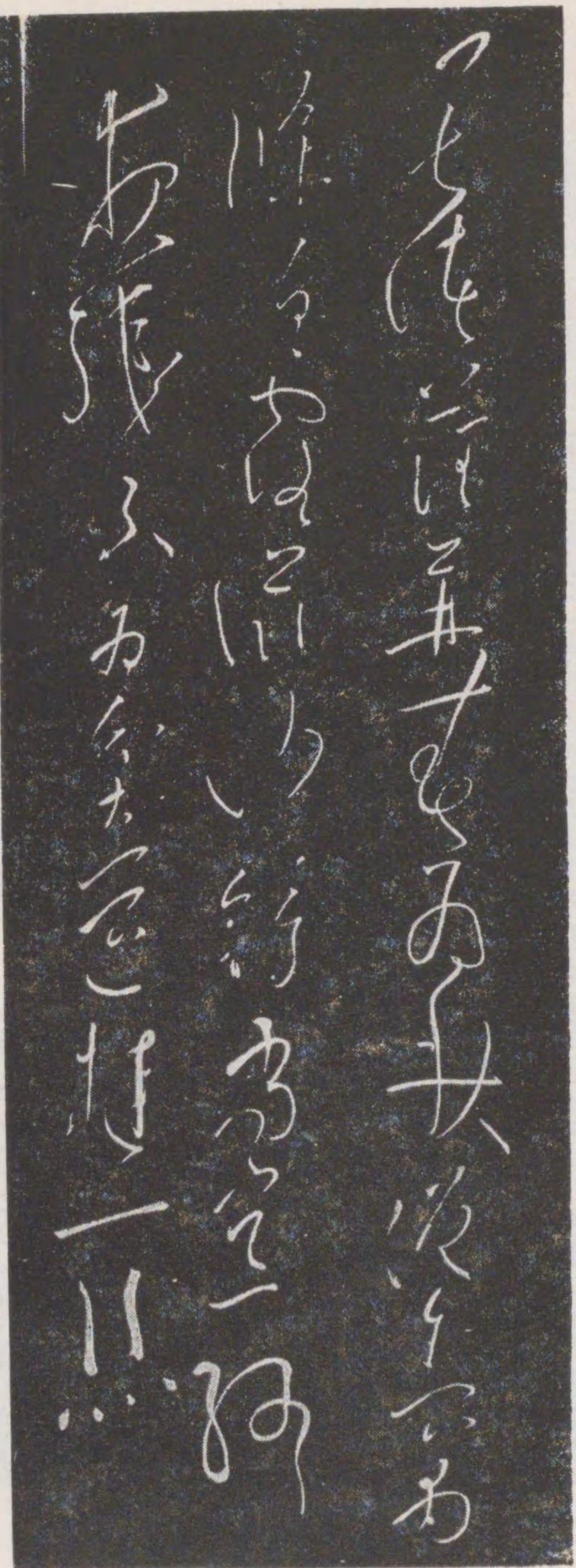


突然の訪問でも在邸だらうとのことであつた。與板町からは三里許りの距離だが、信濃川の架橋大川津橋が破損のままになつてゐると聞いて、稍不安の念を抱いて行くと、果然寺泊町を経て國上山の麓を通つて渡部橋を越えて行かなければならぬとのことであつた。牧が花を對岸に遠望しながら大迂廻をしなればならぬといふのである。車は涼しいといつても八月末の炎天酷暑で、寺泊町の海岸へ出ても、たらちねの母がみ國と朝夕に佐渡が島べをうち見つるかなと良寛が詠めた其の島の遠望も目にしないで、三時間を車の中に過して牧が花に着いた。解良家には若主人が居られて、快く來意を請け容れて下さつた。幕中の老主人も起出でて逢つて下さつた。若主人は室を清めて良寛上人の遺墨を陳列して下さつた。越後の舊家特有の大家屋には雅致のある庭園があつて、岩間から落ち来る瀧の音が絶えず涼味を送る。我等は先づ床の間の掛物から見始めた。聯落幅二條で、一は頭髮蓬々耳卓朔の七絶、一は心水何澄々の五律で、共に世にいふほぐれた出來で、見るからに叩頭を禁じ得ない作である。逸僧の面目の躍如たる書、固より懷素から出た書風であるが、六十二三歳頃の書でもあ



良寛眞蹟石拓





らうか奔放の中に法度の正しきを見る。又珍しく絹に書いた幅三條が壁間に下げてある。もと四幅あつたものだといふが、私は右の第一幅を見て啞然として其の前に蹲居し、次いで跪坐して時の移るを忘れてしまつた。見よ、其の嚴正なる草書もて、居諸荏苒春爲秋、客舍蕭條白露滋、沙雞當窓終夜織、不爲貧道一挂一絲上の二十八字を幅一尺二寸丈三尺の絹に書いたものである。旅夜聞莎雞と題した七絶であるのだが、題もなければ落款も無い、印章は固より無い。私は曾て良寛和尚の印章といふものを見たことがない。何がなくても上人の書であることは誰が見ても知られる書である。獨草に近い謹嚴を極めたもの、意氣充實、どこに一點の弛緩を示さない絶好の藝術品である。まさに自敘帖中に挟んでも甄別し難い文字である。他の二條幅はやや草草に近く、最後の幅には落款が署してあつた。

同じく注目すべきものは床の間に寄せかけてあつた「心月輪」と記した圓盤であつた。良寛墨跡に掲げてあるので、諸人の目に熟して居よう。模造品も作成されてゐるが、原物の筆勢、彫刻の雅味に富むを見ては、文字の配置には幾日間か



の苦心が費された鏤骨の作たるを思ふ。世には傳へて解良家の鍋板に書いた即興の文字だといふが、どこにも摘みの跡がなく、鍋蓋としては厚さが薄く、之を煮炊に使用した痕跡も無い。何かの工事に出た圓板に對して、圓實開悟の心境を想ひやり、苦心の餘りあの文字を配置して、和尚は快心の笑を浮かべたことであらう。かう考へ乍ら熟視してゐると、若主人の方から鍋蓋だといふのは訝しい。用ひた痕跡が無く、作り方も違ふと云ひ出されたことであつた。

以上の書は心水何澄々の一幅を除けば、他の總べては筆墨共に十分選擇の用意を経たもので、殊に筆鋒の疲れてゐないことは初下ろしの筆ではないかと思はしめる程である。私は由緒ある良寛の書の謹嚴なことと、秃筆もて匆卒の間に記したものの無いこととは三十年來想ひ續けて來たことであるが、今日それが實證されたやうに感じた。良寛の五合菴時代は紙筆に事を缺かなかつたやうだが、それは解良家其の他から供給したものらしい。

次の間の机上には良寛の書の諸體を見るべき卷物類や筆寫冊子等が重ねてあつた。詩稿の遺存も嬉しく、懷素學習以前の書と判すべきものや、他人の作に

加筆した詠草類もあつた。良寛研究家は改めて解良家に提供を願はなければならぬ資料の多いことを切實に感じ入つた。解良家にあてた書簡も鄭重に保存され、他に舍利禮文を記した紙片、皇后職から國上寺への廳の下文、これは文治元年六月に下されたものを良寛の寫したものであるが、此等忘れかねるものが多くあつた。殊に楷書の幾品かあるのには喜びを禁じ得ず、良寛の執筆の態度を目前に見る心地がして、今更に淳眞な逸僧を追慕する念を高めた。叔問翁の子、三郎兵衛榮重さしむらの筆に成る良寛奇話と題した一冊子を繕讀して、良寛に關する新知識を得、夕景に及んで謝辭を述べて歸らうとすると、記念帖を出して何か筆の跡を残せとの事であつた。良寛和尚の神品を前にして羞恥の念に堪へなかつたが、今日途中、國上山を遠望して口ずさんだ五絶を塵外焚香坐、行雲筆硯親、遠望長養趾、憶五合庵畛と記して、蒼皇として森君と共に與板町へ引かへした。

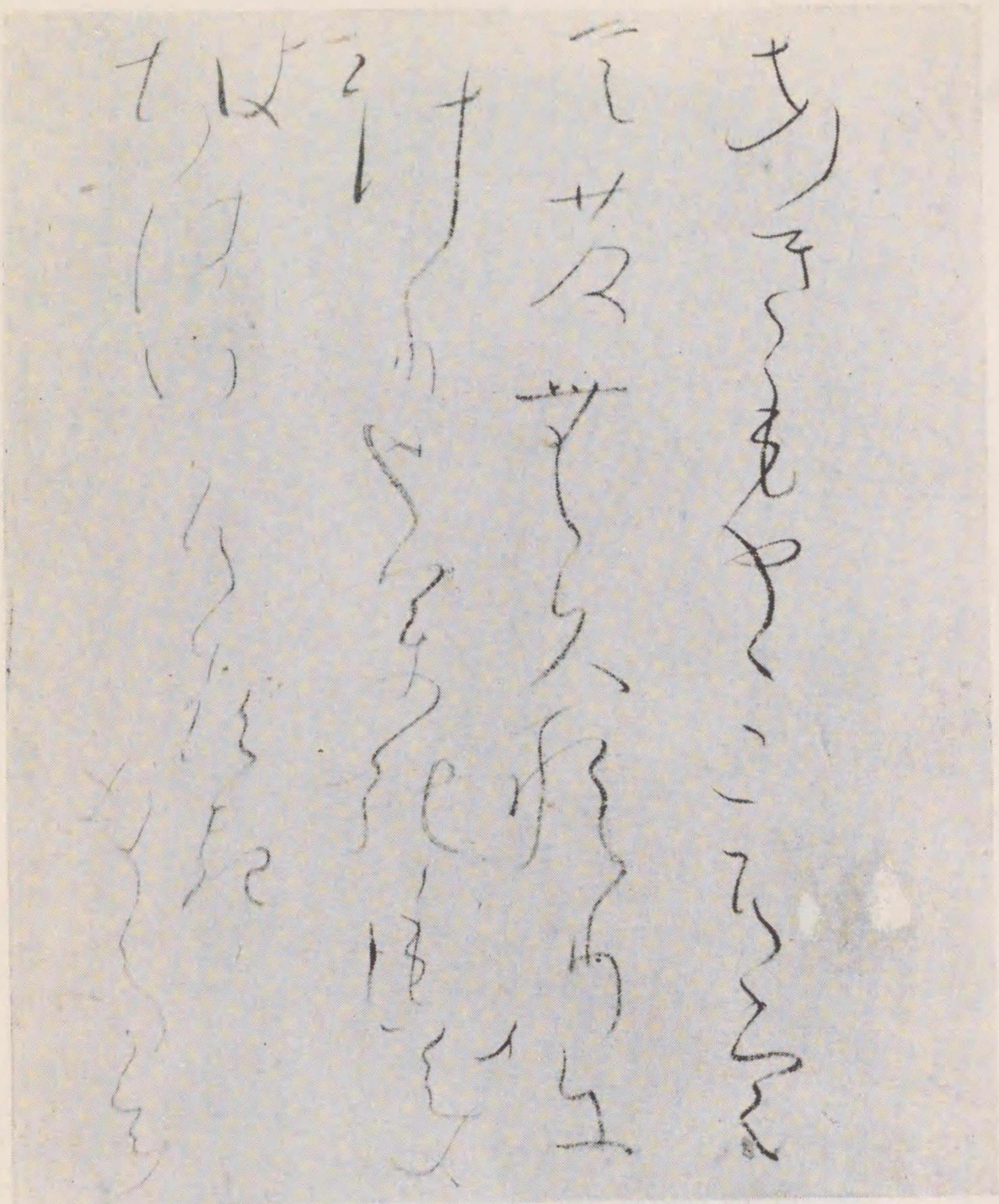
八月二十四日 國上山行 五合庵

森君に東導を願つて國上寺に參つた。結飯を用意せよと勧められて、山の水に乏しかるべきを憂へて宿を立ち、地藏堂町で汽車を下りてそれから車を驅り、



國上山麓にそれを駐めて、表口から登つた。存外の峻坂路で、並木の美しさも、瞰下遠望の景も味はず、流汗三斗の體で國上寺に參つた。流石に陰森な巨刹、庫裡に案内して通された室に、良寛筆と稱する屏風一雙が立ててあつた。熟覽少時、本堂に參つて行基菩薩作の本尊は拜み得ず、裏堂に役行者及び前鬼後鬼の像を拜した。後鬼は尤品で、近頃新潟市とやらの工業學校から借用の申込があつたとか聞く。今は眞言宗の寺だが、往時は修驗に深い濃い關係のあつたことを想像して、山のたたずまひや登攀路の困難なものそれで理會された。庫裡で酒吞童子の繪卷三本を見せて貰つた。江戸初世のものらしく、相當な物であつた。それよりも湖月抄に良寛の識語が各冊の表紙裏にあるのを喜んで見、屏風の字を拾つて作つた久賀美亭羅の扁額を庫裡の入口に見上げて、西坂から五合庵に向つて下つた。

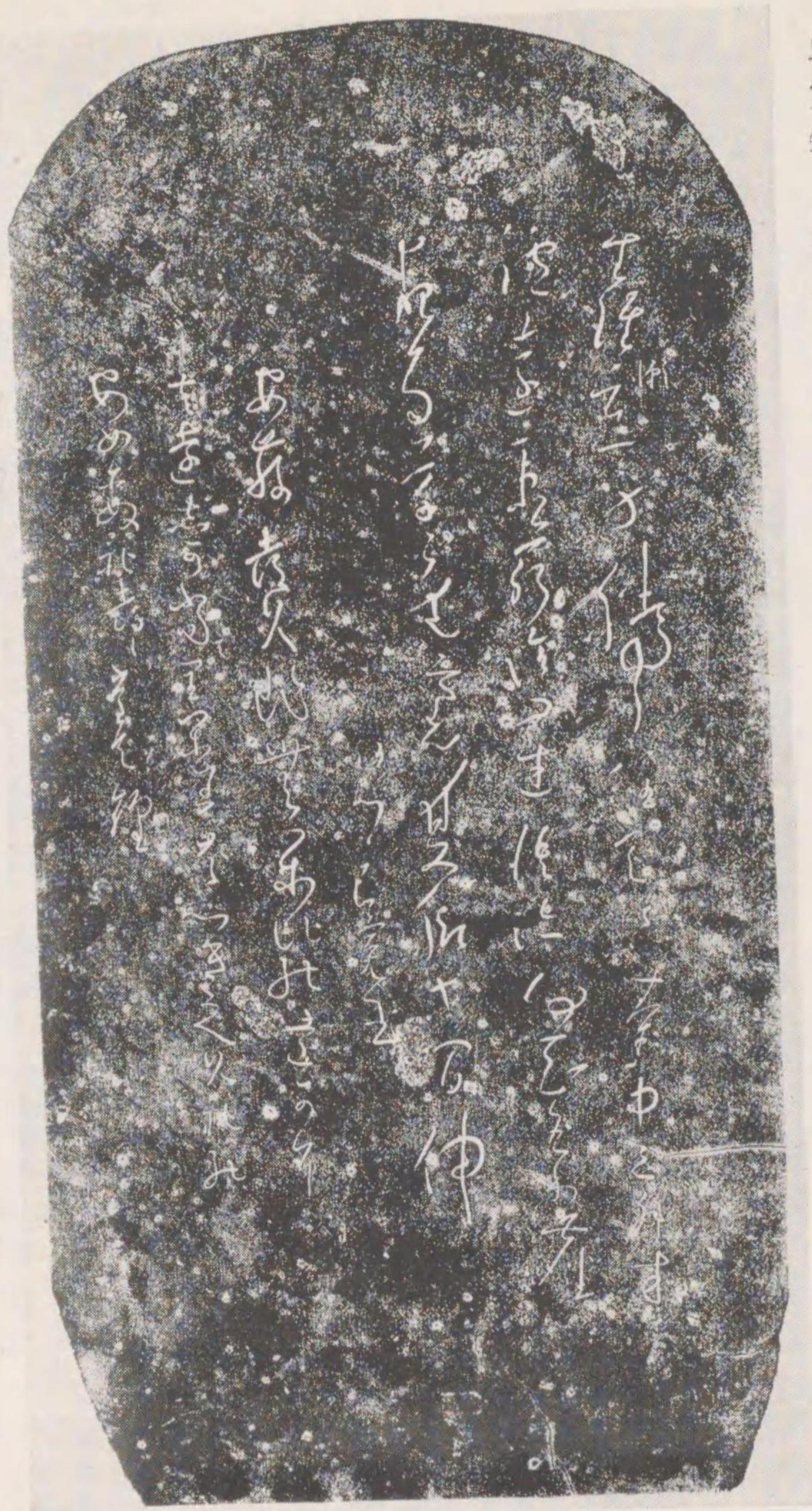
裏門を出る時見かへつたが、良寛が「くがみのおほとのもまへの一つ松、かみつ枝はてる日をかくし、なかつ枝はとりをすましめ……」と詠じた本堂前の一つ松は頽朽の老幹ばかりであつたのが、もう見えない。五合庵は三四町降つた處に



良寛眞蹟和歌

あきもやゝころ  
もて散無久那  
りにけりや萬  
のも美このちはい  
ろつはきぬ良は牟





あるといふのであるが、岩を劈いて作った急坂路は降るにも容易でない。良寛が朝にけに岩の角みち、ふみならしいゆきかへらひといつた通りである。さうして良寛が此の嶮路に薪を採つたことを想へば、古人の刻苦精進が知られて汗を拭ひ、喘ぎ喘ぎ菴の門を入つた。柴門寄山椒、蓬蒿失三徑、墻壁餘一瓢、隔溪開伐木と詠じたのは此處のことらしい。門を入つて右手に焚くほどは風がもてくる落葉哉の集字碑が建つてゐるが、刻が拙いので、直に菴の中を窺つた。佛龕もありとは思へない方二間程の板間は俗悪を極めてゐて、二目とは見られない。索々五合庵、室如懸磬、然戶外杉千株、壁上偈數篇、釜中時有麈、甌裏更無烟、唯有三東村叟、時敲月下門で、想像して來たので、失望は禁ぜられない。千株の杉もなく、菴後に竹の疎林を見るだけである。往時は竹も茂林をなして、其の筍が簞下を侵し、其の生長を圖つて蠟燭もて孔を明けてやらうとして、つひ庵を焼いたといふ逸話を生んだ竹林だと思へば、少時は見上げざるを得ない。其の下に泉の跡を見る。良寛が二三合の米を洗つたのも此處かと思へば、如何にあせ荒れてゐてもなつかしく無いことも無い。森君から説明を聞けば、五合菴は此の寺



の中興萬元和尙が隱棲した貞享年中建立の小庵で、荒れ果ててゐたのに、良寛が文化元年から居らせて貰つたのである。「いざこゝに我身は老いん、あしびきの國上の山の松の下かげ」と詠じて安住したのは四十八歳の時で、それから「あら玉の年の十とせを過しつるかも」で五十九歳の時まで此の庵で、塵外生活をしたのである。生活状態は托鉢に少許の米を得て、自ら薪水に當つて、米があればあり、無きは無きに任せた孤獨安住、「以杖挑幽篁、下谷清泉淘、燒香盛朝粥、和羹充夕餐」といふ生活をしたのだ。實際はもつと低下してゐたものらしく、「獨臥草庵裡、終日無人觀、鉢囊永掛壁、烏藤全委塵」が日常で、必ずしも病中ばかりでは無かつたらしい。子守小供と毬突などをしたのは托鉢に出て、一二日分の施與を受け得た時だ。「靜夜虛窓下、打坐擁衲衣、臍與鼻孔對、耳當肩頭垂」が實況で、此の時の意は、寥々只自知るのみであつた。良寛は元來正坐することの出来ない人であつた。それでは大庄屋の家が嗣げない。私は良寛が出家の原因は一つはこれであらうと思ふのである。「玄冬十一月、雨雪正霏々、千山同一色、萬徑人行稀、昔遊總作夢、草門深掩扉、終夜燒榑櫓、靜讀古人詩」といつた冬を過したのであ

る。弟子の貞心尼へ「君やわする道やかくるとこのごろは待てとくらせど音づれのなき」といひやり「梓弓春になりなば草の庵をとく出て來ませあひたきものを」といひ送つた筈で、こゝが良寛の偽らぬ心情の表白であつたのである。「山かげの石間をつたふこけ水のかすかに我は住みわたるかも」と満足を表しても又時には人こひしさの思の湧く、それを偽らなかつたのが良寛たる所以である。私等が萬元和尙の墓にぬかづいて出ると、栖霞山の墓表が庵に近く立つてゐた。霞山は麓の國上村に手習師匠をしてゐたものである。良寛が晩年五合庵への坂路往返の苦に堪へかねて、村中の乙子社の側に庵住した。其の趾へ今碑が立つてゐるが、其の碑の建設に大功のあつた人である。と、通りかゝりの里人に聞いて、間違へさうな間道を通つて、乙子社に詣でると、右手に例の生涯懶立身の五律と、あさつくひむかひのをかにさをしか立てり……の旋頭歌とを彫つた碑が雨風に瘦せず荒びず、屋根や掩の中に保護されてゐた。起句の懶の字が落ちてゐたのを横に補つてあるが、それは碑を建てる時に、霞山の加へたものだといふ傳へもあり、やはり良寛の筆だともいふ。元來碑の文字は整ひ過ぎてゐて、其の



遺墨の原紙が何處に存するのか聞知りたいのであるが、其の所持者も目撃者も無いとのことである。或は二三紙つぎ合せたかの疑は湧かないでも無いが、あの文字を以て、良寛の書の一代表とすることに、異論を唱へようとは思はない。唯多少の修飾が加へられてあるのでは無いかの思ひは私の念頭を去りさうもない。それにしても、

歌やよまん手まりやつかん野にや出でん心一つを定めかねつも。

風は涼し月はさやけしいざともに踊りあかさむ老の名残に。

我がやどは國上山もと冬ごもりゆききの人のあとさへぞなき。

飯こふと里にもいですなりにけり昨日も今日も雪の降れば。

と詠んだのも此處、此處に立つ碑に、

生涯懶<sup>レ</sup>立<sup>レ</sup>身、騰々任<sup>二</sup>天真<sup>一</sup>、囊中三升米、爐邊一束薪、誰知迷悟跡、何問名利塵、夜

雨草庵裡、雙脚等閑伸

とある例の詩も此處にあつた庵で詠じたのでは無いかと思ふと、立ち去り難い心地がする。それから村の大井戸と呼ぶ清水に渴を醫し、麓に駐めて置いた車

に乗り地藏堂町を経て與板町に歸つた。地藏堂町の中村宇吉翁は必ず訪ねて、往年の好意を感謝する豫定で來たのだが、登山を先にしたので、疲れ果てて訪はなかつた。此の一事だけは疚しさに堪へない。次回には第一に翁を訪ふ心組であるが、其の次回は明年の夏あたりになりさうである。

歸りの車中で、良寛は年齢からいへば二十四五歳上の有願和尚に書畫を學んだ。有願は同郡ながら五六里離れた新飯田村の圓通菴の住持で、良寛が圓通寺の國仙和尚に次いで此の人の感化を受けたことが多さうだと聞いた。私には耳新しい話で、之を聞いて、良寛の詩に有懷四子と題したのがあつて、四子は鵬齋大忍、左一有願の四人で、有願のは

苦思有願子 平生如<sup>二</sup>狂顛<sup>一</sup> 自<sup>二</sup>一逐<sup>二</sup>逝波<sup>一</sup> 于<sup>レ</sup>今六七年

とあつたことを思ひ出す。

八月二十五日

豫定の三日間は疾くに過ぎて、今日は此の地方に思を遺して立ち去るべく、早朝に起き出ると、もう森君が訪ねて來てゐられるといふ。朝食を認めながらも



話に耽つて、さて持参して眼福を興へられた遺墨に、またまた驚歎を止め得なかつた。與板町の倉品義治氏の藏品「裙子短兮褌衫長」は騰々と題した七絶、結句に一字を脱して補つた所のあるものだが、其の用意の周密と用筆の慎重とを見るべく、又「日々又日々」と起した詩、これも世に所謂ものとは異つて靜坐して黙視し、感歎之を久しうすべきものであつた。次に森君が心徐かに示された一卷は「しほのりさかわるときゝて」と題した長歌一首と、「地震後作」と題した古詩一篇とを收めたものであつた。最晩年乙子湖畔の庵を去つて島崎の木村家に移つてから後の書と認められるが、時を費すを憂へず一點一劃にも心をこめた長卷である。鹽入坂は角田濱にあつて高年の良寛には困難な坂路であつた。言はんすべ、せんすべ知らにありがたく覺えたので、事實以上に歎美したらしい。地震は文政十一年十一月十二日に、近く三條の地に大地震があつた。此の地震後には二三篇の長詩の作があつたが、此の卷物のは最長篇で、其の詩の熱を帯びてゐること、人を諷箴すること、例の蕭條を喜ぶ空林寒居の詩偈とは全く態度を異にしてゐるものである。大正十二年九月一日の大震災は天譴だと考へた人が多い。

私も其の一人である。其の當時人の驕奢は全く天の戒を受くべき状態にあつた。文政の末年も江戸末期の頽廢糜亂期であつた。水野越前守の大改革を要する直前であつた。超俗の逸僧良寛和尚にも厭ふべき世相がありありと眼に映じたのである。賦していふ。

日々日々又日々 日々夜々寒裂肌 漫天黒雲日色薄 匝地狂風捲雪飛

悪浪蹴天魚龍漂 墻壁鳴動蒼生哀

と先づ光景を叙したが、感慨に轉じて規箴を下して曰く、

四十年來一回首 世移輕靡信如馳 況怙太平人心弛 邪魔結黨競乘之

といひ、更に深酷味に入り、熱誠を以て、末世の濁惡を哀んで、

恩義却爲讐 忠貞更無知 論利爭毫末 悟道徹底癡

といひ、世の所謂やり手なるものを罵つて、

慢已欺人稱好手 以紫爲朱凡幾時 呼鹿爲馬曾無知 大地茫茫皆如

斯 吾獨惆悵訴阿誰

と、一たびは憤り、一たびは悲しんだが、日常の修行がここに顯はれて、悟つては



凡物自微至顯亦尋常 這回災禍猶似遲  
といひ、激勵の辭を以て結んで曰く、

大丈夫之子須有<sub>レ</sub>志氣<sub>一</sub> 何必怨<sub>レ</sub>人咎<sub>レ</sub>天傲<sub>レ</sub>兒女<sub>一</sub>

といつてゐる。此の詩は詩偈の人良寛を見ると共に、人間良寛を見るべき作である。長歌を通じては大分の長卷だが、克明に記して筆に些の弛緩をも見せてゐない。私は此の詩を最後に見て、瞑目時を移したかつたのであるが、出發の期が猶豫なく迫るので、匆々行李を整頓しようとする、良寛の書の拓本またと獲難きもの四葉を贈られた。中に一紙南無阿彌陀佛とあるものを抜き出して、これは西蒲原郡島上村熊野森にある碑を摺つたもの、久しく世に知られなかつたものを辛うじて二三紙を拓したものであるが、今秘藏のものを分けて贈ると。私は二十幾年前島崎の木村家の墓に此の六字を見たのであるが、記憶は薄れてゐる。且つかくの如き大字は未だ曾て見てゐない。深く其の好意を謝して行李に收めた。

歸途の車中つくづく思ふ。良寛は宜しく「詩偈の人良寛」「草聖良寛」「歌人良寛」

など題して、描くべきである。私の此の旅行は遺墨鑑賞が主で、とかく詩偈を例に引いたが、誰も知る乞食詩の「十字街頭乞食了」や避雨の「今日乞食逢驟雨」や毬子の「袖裏繡毬直千金」には不幸にして傾倒する程の名蹟に出會はなかつた。和歌は秋萩帖風の文字で書いて、詩偈の懷素風とは區別したらしいが、屏風を見ると、詩歌一様に懷素の風である。これも一應は研究に値しさうである。又私は詩偈よりも和歌には聊か心得がある爲か、良寛の至藝も和歌は少しく劣ると見る。萬葉集繙讀追従の態度なども間然する處がなく、成句襲用も斯人の口から出れば、稚拙が稚拙でなくなる。況んやあの心をこめた眞面目な文字で書いてあつては、進んで讚美の聲も揚げたくなる。詰り人間其の儘の歌に頭が下るのである。時に秀絶な吟詠に接してもするが、押しならしては詩偈に感激せしめられることの多いのは、私が詩の道に至りが浅い爲でもあらうか。國上山に登り、五合菴や乙子社畔を訪うたのでは、詩偈の方が境にびたりと合ふ。詩經を玩味した良寛は、紀記の歌を味つて、其の私淑が餘りに露骨なのに驚かされる。それでも追躡だの借用だのと攻撃せられないのも、良寛の人格がそれを打消すが爲であ



る。偽らず飾らぬ良寛が、其の時、其の處に於て、其の物を觀て、思ひの儘に口吟したのがあの詩、あの歌であつたのであれば、後人世俗に煩はされてゐる者の凡慮もて俄に兩者の甲乙を推斷してはならぬと、かう考へても、和歌が一番落ちるやうに思はれてならない。私淑のあとには詩にも歌にもあるのだが、かう思はれてならない。

歸途直江津に故舊を訪ひ、濱邊の善光寺境内に古墓石五輪塔の累々たるを見て、和久良に一浴し、居多の濱の入り口の、大にして紅なるを、此の旅の一獲物と喜んで山莊に歸つたら、其の翌々日火を發して此の寺の堂塔一切が烏有に歸し、累々たる墓石が焼け且つ踏躪られたとの知らせが來た。眞に火宅の世だ。若し良寛をしてあらしめば、何と詠出するであらう。詩か歌か、それとも黙して立去るのみであらうか。十日間の餘暇を作り出して、私は再び北越地方に良寛を擁護した諸舊家を訪問して、超凡の至藝に酣醉したい。又良寛の和歌に就いては一篇の所懐を陳べて特に四方の博雅に御計りをして見たい。

## 一五 寂嚴の書の出自

(昭和十三年九月稿)

書は天資で、生地を問はず、學の多少に關らず、又時の古今を論ぜざるものである。けれども法帖によりて先聖の書を學ぶは修得の捷徑であつて、これに爲人と學殖と識見とが參加して、其の人の書の書品と書趣とが生ずるのである。世に書名ある人の學習した法帖を識別論究するは、即ち出自を知るは決して無用の業でなく、これによつて書を個性化した跡を知るべく、併せて其の人の性格嗜好を知ると共に、書道變遷のよつて生じた所以をも知るべきである。

我が國近代の名書は良寛と寂嚴とである。而して良寛の書の出自は懷素の自敘帖と、所謂小野道風の秋萩帖たることとは世の周く知る所であるが、寂嚴に至つては俄に出自を推定するに苦しむ。人はいふ、黄檗僧獨立の書から出たのであると。獨立は明人王履吉の書風を奉じ、字々皆弛張を有して奇趣に富むのが特徴である。此の點に於ては寂嚴の書との間に類似を見るのであるが、結構



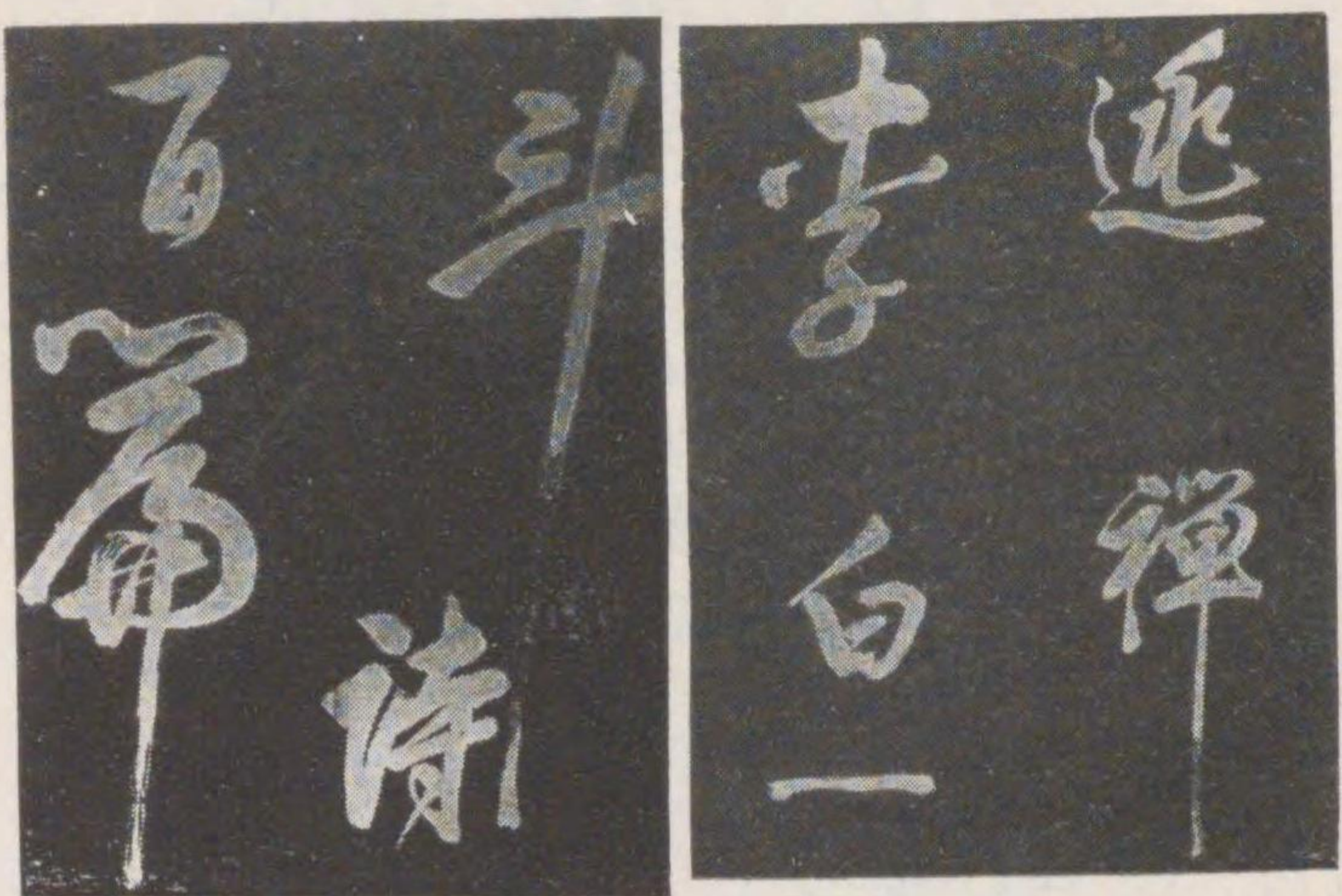
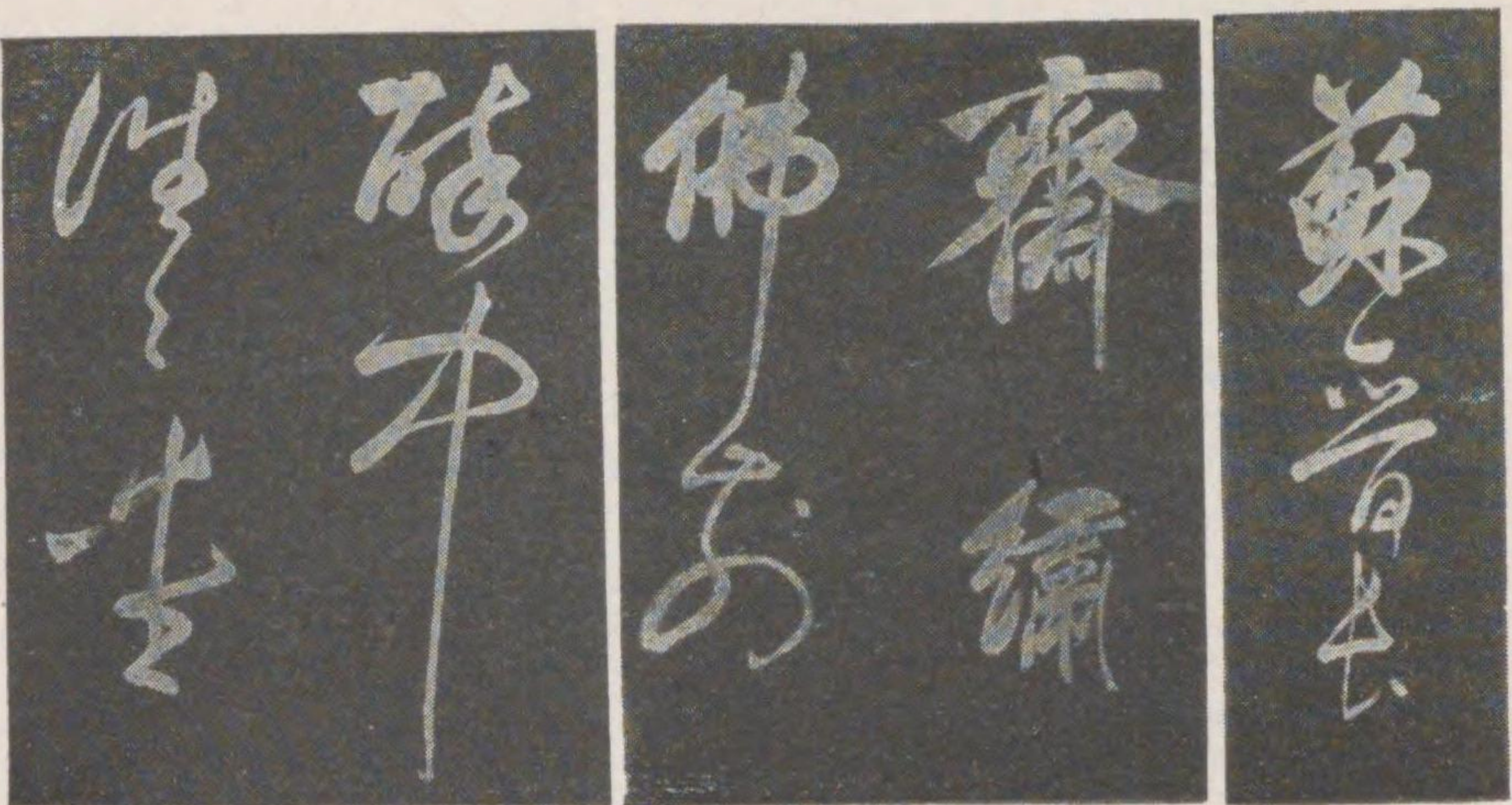
筆意に於ては背馳する所が多く、到底獨立を出自とするには賛し難い。出自は寧ろ董其昌ではあるまいか。殊に董書の飲中八仙歌帖の感化を受けたことが多いと認める。

良寛は書の外に詩偈に長じ、和歌にも秀でてゐたが、寂嚴は梵語の研究を除いては、全く書の人であつて、多く唐詩を書いた。而して最も好んで飲中八仙歌を書いた。私はまだ二十幾年來しか其の書に接してゐないのであるが、名品にして董字其の儘と稱すべきは八仙歌に於て之を見出す。試に承裕閣法帖に比較するであらう。一々點檢せずとも字形筆意に於て母子關係のあることは挿入圖によつても知了せられるであらう。特に草書よりも行書にあつては一層の酷似を見る。往年岡山市の骨董舗が非賣品と稱したものに優品を見た。其の書の龍蟠雲起を想起して今に之を忘れない。これは行書の横卷であつたが、縦横放肆、灑々落落、奇趣滿溢に至つては草書の上に之を見て、此の點は良寛と相通するのである。

寂嚴は齡三十を踰えて書道に分け入つたといふ。而して其の壯年時代の書

寂嚴真蹟 飲中八仙歌一部





董其昌筆飯中八仙歌帖一部

は目睹したことがないので、私は言を挟み得ず、中年後いやそれよりはもつと晩年に入つて、書名を博した備中國寶島寺の住持時代、同じく倉敷の玉泉寺の棲遲時代に就いてのみいふことになる。

細井廣澤は北島雪山に學んだ、文徵明風の書の通達者で、學識も博く、諸藝にも通じて、書に於て一世を風靡した人、寂嚴は廣澤の書を手することを熱望したが、學びはしなかつたと見えて、寂嚴の書には文徵明風の痕跡もない。京都の桑原空洞の書は寂嚴の書と酷似してゐるといふ。空洞は書道研究家で、其の造詣は廣澤と伯仲の間にあると松下烏石は評してゐる。上は周秦漢魏より下は唐宋元明にかけて、名人の眞跡墨本臨摹等を襲藏することは當代他に及ぶ者が無かつた。元來専ら禪を好み老莊を慕つて、高遊外金蘭齋等を友とし、延享元年に七十二歳で歿した。すなはち寂嚴より三十歳の年長者であつた。今寶島寺に空洞の飲中八仙歌の書卷を藏してゐるといへば、寂嚴は此の空洞に啓發せられて董書を學ぶやうになつたのではあるまいか。寂嚴は上京の度毎に空洞を訪問したといふ。



寂嚴は三十五歳の時京都の五智山に於て雲徹泊如門の梵語學者曇寂に謁し、四十歳の時曇寂の戒を受けて寶島寺に入つたのである。而して寶島寺には曇寂自筆の著作稿を藏してゐるといへば、其の書と寂嚴の書との近似の有無を同地方の人に檢べて貰ひたい。私がかう言ふのは、曇寂の師泊如に多少董其昌の筆意を有する文字が雜つてゐるからである。泊如は始め張即之を學んだ人だといふが、晩年には書風が變じて董其昌と認めたい運筆も交雜してゐる。當時京都の一部有志間には董風が喜ばれて、泊如空洞等が之を奉じ、曇寂も亦奉じて寂嚴が之に加はつたのではあるまいか。從來文徵明の流末のみが究明せられて、董其昌風の我が國に於ける流布に就いては顧みられなかつた傾がある。其の爲に寂嚴の書の出自が明かでないのではあるまいか。寂嚴は董風を奉じても、之を墨守するものでは無く、諸家の風を取入れて、遂に自家の一風を樹立したのであれば、曇寂等の書との比較は精緻に失するとも疎慢に流れないことを希望する。

良寛は細字に於ても謹嚴を力めたが、中字大字に比しては稍々劣る感がある。

寂嚴は細字にも巧みで、大字と同じくこれの上にも奇趣を示し、暢達を示してゐる。寶曆十四年朝鮮信使が來朝して、歸途牛窓に宿し、次いで靑津に假泊した。寂嚴は法弟寂津をにして得意の書六枚を信使に送つた。此の時五律を寄せて「韓客跨長天、繫舟吾日邊……恨如雲裂散、送迎幾山川」といひ遣つた。信使が次韻したのであるが、私は其の詩を見てゐない。此の時寂嚴の法弟で、寶島寺を嗣いだ文徹も同韻の五律詩を贈り、朝鮮の信使謙泉が次韻した。其の詩は寂嚴が書留めた。曰く

次贈

文徹大師見寄韻

舟行芳艸天 詩到白雲邊

奉使憐吾拙

交鄰想爾賢

文章餘事在 清淨

佛家傳 別恨兼愁水

明朝又大川

朝鮮國行人謙泉

謙泉の詩もさう巧でなく、寂嚴の詩は拙いものであつたが、文徹のも其の類であつたらしく、接待に當つた藩儒や沿道作家の詩の方が復かにこれに勝つてゐる

寂嚴の書の出自



た。又子昂の書ばかりを奉尙した信使連は寂嚴の書に傾倒しなかつたと見え、且つ自ら稱して東華といつたので、寂嚴は自記に、

寶曆十四年、朝鮮信使謙泉、贈詩於予山菴、書自邦、云東華、乃知毫端之勢、

不下於彼所云中華、於是不欲見夷人謗劣之詞筆、所以余之憤々不得已……

本業、此邦之教餘力、周孔之學、則山川自此一新、是希明和元年、甲申七月、寂

嚴記、

と憤悱してゐる。渡邊知水君の著僧寂嚴には寂嚴が徂徠の支那心酔に對しては甚だ反對した一人であつたとあるが、此の自記を見ては、さもさふすと認める。時は竹内式部の出た寶曆年中である。寂嚴は上京中に此の言説を耳にして、自國尊重説を抱持したのであらうか。良寛は枯淡にして寒居を喜び、寂嚴は熱を有して羈氣を藏してゐた。これは遺存せる尺牘の内容に徴すべく、又其の文字の上に認むべきである。故犬養木堂が寂嚴の書を推賞したのも此の點に着目したのであらうか。

寂嚴に眞楷の書があるのであらうか、私はまだ之を見たことが無い。行書は

草書の如き奔放を缺くが、雅味は相當に含んでゐる。董其昌は以勁利取勢、以虚和取韻といふ主義であつたが、寂嚴の草書には細字にもよくこれが行互つて居り、行書も熟視すれば、同一味の瀰漫するを感ずる。寂嚴自筆の藏書目錄を見るに、虚和を以て韻を取つてゐて、不用意の間にも趣致が窺へる。梵字を書くにも独自の運筆、弛張の變化を現はして書いた。これには出自がなく、全く寂嚴独自の書き方であつたといふ。

寂嚴は七十歳で、明和八年八月三日に玉泉寺で寂を示した。良寛は天保二年正月六日に越後の島崎なる木村氏の家で入滅した。世壽は七十四歳であつた。二人が生を此の世に共にしたことは僅に十四年間で、良寛が備中の玉島の圓通寺へ來て國仙和尚に師事した時は、もう寂嚴の示寂後七八年である。生前に邂逅した事もなく、寂嚴の示寂後に其の書を見たか見ないか、それも徵證は無いのであるが、見たにしても良寛はそれを書家の書として顧視しなかつたであらう。



後篇 文學・隨筆篇



## 一 櫻と日本文學

(昭和十三年三月稿)

## 目の覺める大景

花によつて目の覺めるといふ大景は櫻によつてのみ味ははれる。夜明頃ト  
ンネルを出た汽車が花の雲に突入する時でなく、眼下めしたに土手一面の花を遠望し  
たのでも、松や杉の間に色とりどりの麗はしいのでも目が覺める。目が覺める  
のは敢て日盛に己みの時とかがやく綺羅を装つた人を見る時に限るのでもない。  
薪を負つた翁を花の下に見るといつた、そんな小さい景で無く、滿目皆花といつ  
た大景に、不暖不寒の春氣分を味ふのが櫻の花見だ。櫻時は川柳子でなくても  
懐がどうやら暖かさを要求して、しきりに錢がほしくなるのである。

私の經驗では目の覺めるやうな景は櫻に限らない。ちと濃厚に過ぎるが、菜  
種の花が平野一面を埋めてゐる時にも感ずる。但し同時に眠が催す。ちと冷

めた過ぎるが、山畑つづきに蕎麥の花を見出した時にも感ずる。但し同時に淋  
しさが追つて来て、薄ら寒さを感じしめられる。やはり春に限るやうで、紫雲英  
が平田ひらた棚田たなだを埋めてゐるのも、まんざらではないが、ちと濃厚に過ぎる。大觀大  
景といふ點では、梅は問題の中に加はらない。まづは杏あんずの花だらうが、これも信  
州は善光寺に近い安茂里あもり一帯のそれでも見たものなら知らぬこと、見ないもの  
では、てんで景の存在も知らないであらう。菜の花も、紫雲英も蕎麥もうつむい  
て見下す草の花だ。櫻と杏は仰いで見上げる花だ。さうして連続の上に、集團しゅだん  
の上に、協合の上に大景をなすもので、此の諸點を考へると、どうも大景は櫻に限  
る。「花は櫻、櫻は山櫻の葉の赤う細きが」といつたのは本居宣長だ。それも一つ  
の見方だが、大景大觀といつた點では、山櫻は採用に値しない。書齋に鈴を赤い  
紐か何かでぶら下げて置いて、あきた時にそれを曳いて、うさをはらすといつた  
人の趣味だ。

「酒なくて何のおのれが花見かな」で、花に酒はつき物のやうだ。あつても無く  
てもよからうが、あつた方がよささうだ。落合直文といふ先輩は、緋をどしの鎧



を着けて太刀はきて見ばやとぞ思ふ山櫻花と詠じて、好評であつたといふが、虚飾の極だ。櫻時にそんな鎧を着て見て面白いものか、羽織も脱いで、片肌ぐらゐ脱いだ處に面白さがあるのだ。いい心持で朝寝をして「花の雲鐘は上野か淺草か」といつたあたりには花時の氣分がよく出てゐるのである。

かういふと、享樂主義の話で、頽廢と花見とでも題していふ方がよささうだが、必ずしもさうで無い。花を愛でる上にも變遷があり、文字に表はされて文學になつた上にも變遷があつて、時代相が出てゐないわけでも無い。櫻に就いては文人武人の逸話も續々と想ひ起される。それが國文學の上に色と味とを添加してゐる。私がこんなことをのべつべたらに書いたら際限が無い。間違ついたら芳賀博士の「月雪花」の反覆にでもなりさうで、それは私には忍び得られない苦痛だ。野山の櫻花見の宴、武士と櫻能狂言の櫻歌舞伎の櫻結語といつたやうな區分の上に、私見を列記して見よう。

## 野山の櫻

今時なら靖國神社の櫻も上々だし、英國大使館前の櫻も悪くない。熊谷の堤の並樹は勿論いいし、東海道では程ヶ谷の土手の花も見物だ。けれども元來は川邊よりは野山のものだ。

これはこれとはばかり花の吉野山

貞室

吉野山霞のおくは知らねども見ゆる限はさくらなりけり 八田知紀

感吟は名所に多く、先づ思ひ出すのは吉野山だが、歌書よりも軍書にかなし吉野山(支考)で、南朝の御事蹟と結びついて我等國民に勤王の至情を湧起させるのである。「吉野山こぞのしをりの路かへて、まだ見ぬ方の花をたづねん」と詠じた西行は南北朝以前の人だ。以後の人であつたら、きつと詠史に感懷を述べたであらう。北方の天を睨み、劍を按じて崩御あそばされた延元の帝の御陵のあたりは、拜跪して低回去るに忍びない。周知の芳野三絶はやはり出來がよい。若い時には無法な悪口を吐いても見たが、今は後悔してゐる。頼杏坪の

萬人買<sup>レ</sup>醉<sup>ラ</sup>攪<sup>ニ</sup>芳<sup>ニ</sup>叢<sup>ヲ</sup> 感慨誰能與<sup>レ</sup>我<sup>ト</sup>同<sup>ジキ</sup>

恨殺殘紅向<sup>レ</sup>北<sup>ニ</sup>飛<sup>ニ</sup> 延元陵上落花風



はやはり名吟だ。世人といふものは案外に公平だ。甥の山陽は詠史が得意なのだが、其の山陽の「杉檜參<sup>シテ</sup>天春日黒<sup>シ</sup>荒陵誰弔<sup>カ</sup>後翻醒<sup>ヲ</sup>を採らず、杏坪の延元陵上を擇んでゐる。山陽のは感懐がいつも程にいつてゐない。あれだけの詩人が、名所まけといふものであらう。

古陵松柏吼<sup>ニ</sup>天飈<sup>一</sup> 山寺尋<sup>ネテ</sup>春春寂寥 眉雪<sup>ノ</sup>老僧時輟<sup>メ</sup>箒<sup>コトヲ</sup> 落花深處說<sup>ク</sup>南朝<sup>ヲ</sup>  
の作者藤井竹外は山陽門下の七絶の巧手だ。嘉永安政以降の尊攘問題に關與しなかつただけに、どこ迄も詩人肌の見方いひ方だ。轉結の二句がいゝのではない一首整調詩として上々。もう一絶は河野鐵兜の作だ。星巖の門人だが、吉野山の詩だけは其の師よりも騒がれる。

山禽叫斷<sup>ビエテ</sup>夜寥々 無<sup>キ</sup>限春風恨未<sup>ズ</sup>銷<sup>ユ</sup> 露臥<sup>ス</sup>延元陵下<sup>ノ</sup>月 滿身<sup>ノ</sup>花影夢<sup>ニ</sup>南朝<sup>ヲ</sup>  
三首とも轉結がいい。星巖の詩も懷古の情は横溢してゐる。斯人の名作の一つに數ふべきであらう。

今來古往事茫々 石馬無<sup>ク</sup>聲<sup>ヲ</sup>抔<sup>テ</sup>土荒<sup>ム</sup> 春入<sup>ル</sup>櫻花<sup>ニ</sup>滿山白<sup>ク</sup> 南朝<sup>ノ</sup>天子御魂香<sup>シ</sup>  
いい詩だが、懷古の情ばかりで、幕末志士の大親分の作として煽動分子が足りな

う。

嵐山は京都から程加減な距離にあつて一日の行遊には申分が無い。けれども日本文學の上には大した寄與も無かつた。こゝの花はむしろ繪の上に活かされてゐさうだ。

花の山二丁登れば大悲閣

芭蕉

などと兎角櫻の横にそれたがる。事實河ぞひの途は小便臭くて鼻持がならな

い。  
當今の如く交通が利便なら、櫻の新名所が紹介されさうなものだ。紹介されても記憶に止まらないのなら歴史と結びつかない爲だと思はなければならぬ。諸所の城址や古社寺にはびつくりする花の大觀に出會ふ。郡山の開盛山や弘前の城址などはすてきなものだ。外國へも随分出すやうだが、出す時に新聞紙上を賑はすだけだ。もう何年かたつてゐるのだから、花は立派に咲いてゐなければならぬのだが、一向何の消息も無いのであらうか。氣候風土の違ふのが原因で、枯れでもしたのであらう。櫻は元來日本の物だ。ばつと一時に咲いて、



二三日で綺麗に散つてしまふ。そこに潔さがあるのだ。飽く迄も實利主義で、支那人ほども面子を考へない國には、移しても咲くまい。咲かない所に日本の國花たる所以が存在するのではあるまいか。

## 花見の宴

今のやうな人爲工作の加つた花は見られなかつたであらうが、天然自生の櫻の花は神代から見られた筈だ。さうして月や星の夜の景物には、晝間労働に渾身の精力を消耗した農耕者は、一向無頓着で、夜食をすますと、直に深い眠におちてしまつたらしい。夜を愛でることは大陸詩賦の指導を受けてからだ。豊葦原の瑞穂國とて、葦が到る處に繁茂して、大きな美しい穂を垂れてゐた國、換言すれば池沼地で、俗にいふちくたみ地が稲作に適してゐるといふので、日本を定住地とした大和民族だ。晝の疲に夜はぐつすりと寝込んだことだ。それが印度や支那に導かれて月や星の美を愛賞して次第に朝寝坊になつたのだ。農耕民は朝起が肝要で、それを實行した。さうして野山に於ても、庭先に於ても、朝靄の

間に朝日に煥發する櫻の花の美しさに見とれた筈だ。神代記にも木花咲耶媛と美しい女神を稱へ、醜い方は木花散耶媛と呼んでゐる。花の散つたあとは、暫く荒涼のものだ。神武天皇此方は櫻の美しさは感じて、発表の方面は努力の必要も刺戟もなかつたかして、允恭天皇の時まで歌には出て來ない。此の時はじめて絶世の美人衣通媛を妃に召させ給うて、翌朝井戸ばたの櫻の花を見て、

花はな細ほそし櫻はなのめで、如ごと是と賞あはははやくは賞あはでず、わが賞あはづる子等

と詠ぜられた。いふ迄もなく、姫を櫻にたとへての歌だが、わが國の櫻の歌としてはこれが最古である。姫は皇后の實妹で、憚つて藤原に宮を立てて住まさせて置かれたのだが、一夕いでまして、そつと様子を窺つて居られると、姫は「わがせこが來べき宵なり、ささがにの蜘蛛のおこなひ今宵するしも」と詠じた。これがひどく思召にかなつた其の翌朝の御詠が花細し櫻の賞であつた。衣通姫は和歌三神の一柱だが、わがせこの歌が後人の景仰を招來したのだ。

允恭帝の歌は櫻を譬喩に取つたまでで、櫻の花を觀賞して宴を催すといつたことは、すつと後れて、唐朝文化に一切の範を取らうとなされた嵯峨天皇の朝か



らだ。嵯峨朝は舞樂の修正期であつたが、今に隋唐の遺韻を止める、あの華麗な舞樂は爛漫と咲く櫻の下には恰適の舞だ。花と共に平安宮裡に見るべき舞である。花の宴は嵯峨朝以來引續き行はれたもので、源氏物語には卷の名にまでなつてゐる。紫宸殿前に行はれたあの花の宴の、此の宴の酔が残つてゐなかつたら、源氏の君も朧月夜の内侍を、だきすくめはしなかつたであらう。あれが無かつたら、源氏物語はどんなにか淋しく、須磨へのさすらひも無く、明石の卷も構へられなかつたであらう。

「花見の御幸と聞えしは、承安第五のきさらぎ」といふ歌もあるが、承安は高倉天皇の時、王朝末で、風流には富んでゐたと思ふが、華麗豪奢は後の豊太閤の二度の花見だ。足利時代に美しいといふので花の御所などと稱へもしたが、櫻の花が多く見られての謂ひでは無い。太閤のは、一度は吉野、一度は醍醐であつた。吉野の花見は小瀬甫菴の太閤記に、

文祿三年二月廿五日、吉野の花御覽あるべきとて、大阪を立出させ給ふ。秀吉公例の作り鬚に、眉作らせ、鐵醬黒なり。

供奉の人々、我も我もと美麗を盡し、わかやかなる出立なれば見物群集せりとある。太閤が既に作り眉に鐵醬黒といふ稚氣満振りでは諸大名以下の若づくりも見ものであつたらう。茶屋の設もあつて、千本の櫻花園などと巡り見て、後醍醐帝の皇居を拜し、昔義經がしばらく滞在した吉水院を旅館とし、前後左右を堅く守る番人たちを遠ざけ、諸侯大夫馬廻などに、勝手にのんびりと花見をさせて、樽肴を贈つた。如何にも太閤式だ。歌の會もした。太閤自身が

吉野山梢のはなのいろいろにおどかれぬる雪のあけぼの  
關屋の花の下では

芳野山誰とむるとはなけれどもこよひもはなのかげにやどらん  
などと詠んでゐる。誰か蔭武者がゐて加筆したのだらうなどと疑ふには及ぶまい。此の程度の歌なら秀吉も詠めたのだ。他の黒人の歌がいくらも是に勝つてゐない。幽齋玄旨法印にしても、連歌師の紹巴や、昌叱の歌にしても、いくらもこれに優つてゐない。太閤は荒削りでも柄が大きい。二月廿九日に歌の會を開いて、花の願不散花風瀧上花神前花花祝と五首の和歌を詠んだが、太閤の詠



は人にまけてゐない。私はあの人の天稟の高きを思ふ。

慶長三年には太閤は北の政所に醍醐の花見をさせ環堵くわんとの室を出でやらぬ女どもにも、いみじき春にあはせ、胸の霞をはらし、一榮一落に世を忘れさせようと思ひ立つた。これも小瀬甫菴の記によれば、前田徳善院に命じて、北政所の快諾を得、用意をさをさ怠らず三寶院は少破にも修理を加へさせ、院外五十町四方は三町毎に一ヶ所づつ番所を立て、弓鐵砲の者を置き、伏見の城から醍醐までは道の兩側に埒を結はせもしたが、振舞其の外よろづ潤澤にせよ、百姓已下、往還の旅人に迷惑を及さないやうにしろといふのであつた。此の注意は大きに参考に  
なるではあるまいか。三寶院で、装束を異装華麗にかへた太閤父子や政所上臈衆たちが五色の緞子の幔幕を打たせた間に逍遙して、寺々の名園名花を見物した。所々に茶屋の設はあつたが、増田長盛の工夫で御父子政所に行水をさせ、模擬賣店なども拵へて御機嫌を伺つた。果ての所に柴垣に竹の編戸の茶屋があり、町屋も見え、茶屋で焼餅を賣つてゐた。太閤が寄つて快くたべると、おあしを下さいと促はたる。見世棚にあつた瓢箪を腰につけると、それも代物を下さいと申

して、茶屋女の二十ばかりなのが兩三人、兩の手にすがつて代金を請求して放さない。秀吉は喜んで、そんなら勘定をしる拂をしようといつて奥へ通つた。勘定どころか、すぐ酒盛りになつて、目出度たや松の下、千世も幾千代、ちよちよと、なんどといふ歌にはしやぎ立つてしまつた。一切が大がかりの物であつた。醍醐への恩賞は莫大のものであつた。これだけは秀吉のやり得る花見で、これが日本文學の詞材となつたことは事新しく記述するにも及ぶまい。花見の興宴は秀吉なら出来るが、家康では出来ない、家光でも覺束ない。十一代の家齊は出来さうだが、それは千代田の城の奥で、何十人かの妾婢に圍まれての酒宴で、豊太閤のやうな、ぶつ開いた大規模な花見ではない。もし五節句を太閤にきめさせたら櫻の節句を選んだことであらう。

凡そ櫻は立木のまゝ見るものだ。花瓶に挿して見るものぢやない。大きな枝を切つて大きな瓶に活けて見るなら別だが、それも切るにも活けるにも及ぶまい。病人でない限りは屋外、いや野外に出て大景を味ふがよい。藤原良房が、染殿の后のお前に花瓶に櫻の花をさゝせ給へるを見て、



年ふればよはひは老いぬ、しかはあれど花をし見れば物思ひもなしと詠じた。后は自分の娘であれば、其の御全盛櫻の如きを見ては、かうも思つたであらうが、畢竟は平安宮裡の老公卿の小満足だ。こんなことで、政權は武門の手に歸したのだ。

### 武士と櫻

優美な櫻と剛強な武士とは好箇の對照だが、文學としては八幡太郎義家が勿來關外の落花を惜む吟詠が始めた。此の話は弦を鳴らせば物の怪が失せて御惱が鎮まる程の強將、八幡殿の御座ぞといへば、大盜も自分と後ろへ手を廻す程の猛將、鎧二領を苦もなく射徹す程の弓勢の持主に、こんな風流な一面のあつたことを語るだけだらうが、これが詩歌や繪畫の好題目として迎へられた。就中藤森天山が此の繪に題した七絶が世に喧傳せられた。

誓<sup>テ</sup>掃<sup>ラ</sup>胡塵<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>顧<sup>ミ</sup>家<sup>ヲ</sup> 懸軍萬里向<sup>リ</sup>邊沙<sup>一</sup>

馬頭殘日東風惡<sup>シ</sup>

吹落關山幾樹花

だが、關東儒者中の能筆で、安政戊午の獄にも取調べを受けた志士だけに、一段と喜ばれた詩である。

義家の次には源賴政が思ひ出されるのだが、私にいはせれば賴政は和歌の惑溺者だ。源氏の衰退誘致者だ。鶴退治はえらさうに聞えるが、名を揚げたのは、近衛天皇の時當座の御會に、深山花といふ題を出されて、人々が讀煩つた時に、

深山木のその梢とも見えざりし櫻は花にあらはれにけり

と詠じて御感に預つたことだ。安元三年叡山の大衆が訴訟御裁許がないので、神輿を振つて陣頭へ押寄せた時、たつた三百騎で御所の北の門を固めてゐた。とても手に合はぬと見て辯説に長けた家來をやつて、膝を幾重にも曲げて、平家の勢が守る門へ向かはせた。此の時にも此の歌の名聲が護身符になつた。源三位といへば本當に高位者だが、保元の合戦の時御方にて先を懸けたりしかども、させる賞にも不<sup>レ</sup>預、又平治の逆亂にも、親類を捨てて參じたりしかども、恩賞是疎かなりと平家の作者にも忌憚なき説教をうけた。總本家の義朝が平治の亂に大敗して、落行くのを知らぬ振りしてゐたものは誰だ。表面は背かぬふりを



して、いざといふ時になつて平家に附いた。形勢觀望の始まりは此の賴政ではあるまいか。平治物語の作者に「賴政心がはりの事」と筆誅の一條を設けしめた。それも其の筈位の昇進ばかりを望んで、永年の大内守護でも昇殿が許されないので、木隠れてのみ月を見るだの、三位に上りたさに、しるを拾うて世を渡るだのと詠じて、やつと三位になつた男だ。此の男が鶴を射殺したのは運がよかつたといふものだ。そんな二股男だから、矢二筋を持つて、一筋で射損つたら、残る一矢で推薦者の雅賴卿を射殺さうとしたのだと平家の作者は記してゐる。

如何に淺慮な義朝にせよ、源家の首領だ。それを見殺しどころか、窮迫せしめたのだ。息子の仲綱の愛馬を、庸劣な平家の宗盛に強請されて、呉れ惜しみをして侮辱されたといふので、七十を越した賴政が腹を立てて、以仁王の令旨を願つて、戰を起したのだが、こんな和歌狂に勝目のあらう道理はなく、宇治は平等院の扇の芝で、皺腹をかつ切らなければならなかつたのであるが、死方が二十年遅かつた。あれが平治元年に義朝と死生を共にしたら、日本の歴史は大變動を起してゐたであらう。随つて平家物語といふ哀史は出たか出なかつたか、極められ

たものではない。其の賴政が又に伏する時の辭世が

埋木の花さく時もなかりしにみのなる果ぞ悲しかりける

なので、引合にそこまで書くが、平家の作者も、その時に歌詠むべうは無かりしかども、若きより強ちに好いたる道なれば、最後の時も忘れ給はずと褒めたのか、くさしたのか分らない敘述をしてゐる。辭世ばかり考へて、戰は餘所にしてゐたのかも知れない。江戸の元祿時代の歌舞伎には、よく賴政を出す、好色漢に描き出してゐる。あやめの前一件もあるのだから、これが此の男の正體であつたのかも知れない。

櫻に關する文學といふ思ひ出では、平家の忠度の方がもつと哀れをひく。熊野育の大力者といふのだが、旅宿花を

行き暮れて木の下蔭を宿とせば、花や今宵の主ならまし

の作者だ。平家の總大將宗盛が平家の守護神嚴島明神の御膝許でともかくもならうといふのに背きかねて、都を落ちたが、淀のあたりから引返して、俊成卿の門を敲き、鎧の引合せから自家集一卷を差出し、勅撰の御沙汰もあらば、せめて一



首でもと頼んで行つて、一の谷で岡部六彌太に討たれたのだ。死際も潔く、箆に結びつけた文にかの旅宿花があつたので忠度だとは知れたのであつた。さて世が静まつて、果して勅撰の御沙汰があつて實行された。それが千載和歌集だが、歌詠みの腑甲斐なさは、俊成一人で撰んで、誰に氣がねもないのに、忠度のはたつた一首を、読人不知として載せた。それがあの名吟

さゞ波や志賀の都はあれにしを昔ながらの山櫻かな  
だ。これが本歌になつて、いくらも作り出された。

雪ならば幾たび袖を拂はまし、花の吹雪の志賀の山越

も其の一例だ。蓮月尼の

宿かさぬ人のつらさを情にて朧月夜の花の下臥

なんかも忠度の旅宿花の展開延長、いや換骨脱胎だといつても反對するものがあるまい。

西行も櫻の謳歌者であつた。けれども佛には櫻の花を奉れ、わが後の世を人弔はばと詠じたのが氣にくはない。凡そ佛に獻げる花として櫻の花ほどふさ

はしくない物は無いと思ふが、どうであらう。事實獻げる人がさうあるのであらうか。

南北朝時代の文學では吉野拾遺物語によつて、吉野の花に關する和歌を擧げるのがせいぜいである。それよりも吉野三絶の方が感も哀れも深く、それはもう説いた。轉じて能狂言の櫻について述べるであらう。

### 能狂言の櫻

能のことだから、概ね櫻の花の精が現はれて舞を演じて見せることにしてある。七八曲もあらうか、中では墨染櫻が縁が深い。上野岑雄が僧となつてから仁明天皇を悼み奉つて、深草の御陵で、

深草の野邊の櫻し心あらば此の春ばかり墨染に咲け

と詠じ、それを花の枝に結びつけて歸らうとすると、櫻の精が現れ、僧の弟子になり、此の春ばかりを此の春よりはに改めよといふと、花は悉皆墨染の色に變つた。それから精が先帝を慕つて歌舞をするといふ筋だ。著名なものは何といつて



も吉野天人に泰山府君、熊野に櫻川に西行櫻等であらう。

吉野天人は花好きの者が吉野山で里の女と同行して花を見た。里の女が家路を忘れて眺めてゐる。不審を起して聞くと、誠は私は天人なるが、花に引かれ來た。信心を致し給へ、後程其の古の五節の舞、月の夜舞を見せ申さうと、後段に天女と現れて、治まる御代を祝して舞つて見せるといふ筋。固より舞臺に櫻の花を見せるでも何でも無いが、悠揚を極める舞と謡とは我等にまのあたり花上の舞を見る心持にならしめる。五節の舞は天武帝が一日吉野の奥で御琴をあそばすと、天人が現れて五たび袖をかへして舞つて御目にかけた。それに本づいて御製作になつたのが五節の舞だといふのである。天皇がお彈きになつたのは朝鮮歌曲で、行幸と承つて前峰の茂みに影を潜めてゐた朝鮮からの歸化少女たちが、故國の歌調にうかれて白衣を着けたまま躍り出したのが、それが天女の正體だらうといふ。古今集の僧正遍昭の天つ風雲の通路吹きとちよの歌は五節の舞姫を見て此の故事にかけて詠じたもので、あれは在俗中の歌である。泰山府君は櫻町中納言の故事によるもので、是は始から天人が出てゐて、ワキは

中納言、後シテ泰山府君で、天人が

うれしや月も入りたりや。今はうへこそ花盛。木の下闇に忍び寄り。さしも妙なる花の枝。手折りて行くや少女子が。天の羽衣立ち重ね。天つ空にぞ歸りける。

で花盗人をするのである。後段は大分佛くさいものだが、通力自在を以て七日に限る櫻の盛。三七日まで残りけり」で結ぶものである。

「熊野松風に米の飯」とまでいふ。熊野を知らない者はあるまい。

四條五條の橋の上。老若男女貴賤都卑。色めく花衣。袖を聯ねて行末の。雲かと見えて八重。一重咲く九重の花盛り。

名に負ふ景色を清水寺に上り、佛前拜跪のひまもなく、花の下の酒宴に招きよせられた。「いかに熊野一さし舞ひ候へ」で、のうのう俄に村雨のして花の散り候は如何に。……あら心なの村雨やな春雨のふるは涙か櫻花散るを惜まぬ人やある」で、當座の歌を短冊に書く。よしありげな詞の末で、無情の宗盛が、取り上げて見れば、



いかにせん都の春も惜しけれどなれし東の花や散るらむとある。哀れは歌に催されて、即刻東に向はせたといふ話。少し長過ぎるがよい能である。

櫻川は親子の再會譚。子が母の窮迫を見かねて、人商人に身を賣つた。母は狂女となつて遙々故郷の日向から常陸の櫻川まで子をたづねまはつて下つた。流れる花をすくひ、剩へ渴仰の色の見ゆるのはどうした譯かと問はれ、さん候。我が故郷の御神をば木華こは咲さ耶や姫ひめと申して。御神體は櫻木にて御入り候。されど別れし我が子も氏子なれば。櫻子と名づけて育てしかば。……又この川も櫻川の名もなづかしき花の散るを。あだにもせじと思ふなり」と答へて、花見に來た寺人たちの中に我が子を見出でて再會する。あの三方明開の簡素の舞臺で、せいぜいが揃ひ網だけを持たせて、花やかな狂亂を見せるものである。

「花見にと群れつつ人の來るのみぞあたら櫻のとがにはありける」といふ西行の歌に基づいて、ワキは西行、シテは老木の花の精、ワキツレは花見の人。花の精が現はれて、自分に何の科があると、昨夜夢の中に問答をした翁だと名のり、春を

惜む舞を演じて見せるのが西行櫻である。

狂言の櫻は凡そ能の悲哀味に代るに、談話好笑味を以てしたもので、櫻の作り物を舞臺に出して演ずるものに、花折新發意、花盗人、花争等まだまだあるが、此の三つを以て代表視しても大した過誤には陥りさうもない。

先づ櫻の作り物を舞臺に出し、寺の住持は花見は禁制ぢや程に、どんな強請があつても許すなといひ置いて出て行く。果して四五の花見好きが來て頼む。新發意は斷る。仕方がないとあつて、遠望しようと思根の外で竹筒さきえを開く。新發意は大の酒ずき、神酒は花にも上げるがよいと説いて、自分も一杯呑み、酩酊して、あの枝此の枝と折つてやる。そこへ住持が歸つて來て、やるまいぞやるまいぞの追入で終る。

花盗人は大きな枝を折つて、見つけられて縛られたが、獨り言が主人の氣に入り、酒を振舞はれて謠ひ且つ舞つて許されるといふ筋。花争はもつと簡單で、主と下人で櫻が正しいか、花がよいかと、古歌を引いて議論するだけのこと。どうせ能程には深味が無い。軽い軽い笑ひ物である。舞臺の上の櫻は何といつ



ても歌舞伎に限る。

### 歌舞伎の櫻

操芝居にも櫻に關するものが無いのではない。けれど櫻の折枝で舞臺を飾るではなし、地の義太夫の文章で想像をさせるだけで、甚だ淋しい。それに引きかへ、歌舞伎の振事物は見た目も花やかで、俳優が花のあたりで、踊つて見せるのだから面白い。まあ道成寺に助六に關扉せきびが代表かな。

道成寺はいふまでも無く江戸長唄物、くはしくは京鹿子娘道成寺である。寶曆二年に中村富十郎の白拍子で賣出したものだが、今も盛んに演じてゐる。ざつと模様をいつて見れば、正面上下とも紅白の段幕、處々に櫻の立木、日覆から三重に枝垂櫻の釣枝を二段におろし、舞臺上手の櫻に張物の釣鐘を吊し、紅白なひ交ぜの綱を下手の櫻の木につなぎ、下手いつもの所に枝折戸と聞いたら、もう後の説明はいらぬでもあらうか。女人禁制の札が立ち、常磐津で「月は程なく入潮の煙みち來る小松原。急ぐとすれど振袖に。びらり帽子のふわふわと」で鳴物

入になり、向ふから白拍子の花子が、前髪へ愛嬌毛のついてゐる中高の島田。櫻の花櫛に同じく蝶のついた丸兩天へ銀のびらびら。前髪にはびらり帽子をかかけ、緋縮緬へ色絲の枝垂櫻と金絲の横霞を御簾縫にした着附、白羽二重に色ざしの散櫻の下着、白足袋にもみ緒の草履ばき、金銀黒塗骨、赤ぶさ附の扇を右手に持つて胸にあて、左の袖を其の上に重ねて、しなをしながら出て來て、花道七三のストッポンで止りといつたら、光景はありありと目前に浮ぶであらう。「いかに此の内へ案内申し候で、坊主どもをたらしこみ、鐘の供養を見せて貰ふ代りに、何なりと舞つて見せるといつて金箔置紫紐の烏帽子を被り、扇を中啓にかへて、鐘に恨はかずかすござる」になるのだ。舞も幾段かあるのだが、第二段に

いはす語らぬ我が心。亂れし髪の亂るゝも。つれないはただ移り氣な。

どうしても男は悪性もの。櫻々とうたはれて。いうて袂のわけ二つ。つと

めさへただうかうかと。どうしても女子は悪性もの。都育ちははすばな者

ちやエ

とあつて、踊に入り、三段が「戀のわけ里。武士も道具を伏編笠に」なり次の段が



梅とさんさん櫻はいづれ兄やら弟やら。わきていはれぬ花の色エ。あやめかきつばたはいづれ姉やら妹やら。わきていはれぬ花の色エ。西も東もみんな見に来た花の顔。サヨウエ。見れば戀ぞます。サヨウエ。かはゆらしさの花娘。

これが有名な花笠の段である。次の段が戀の手習つひ見習うて誰に見せうとて紅かね着きよぞ。……露をふくみし櫻花。さはらば落ちん風情なりでこの段の「ふつつり恪氣せまいぞ」との口説の所には見物もうつとりさせられてしまふ曲節がついてゐる。

もう此の位でよからう。娘道成寺は起首と結尾に能の道成寺の匂ひがあるだけで、中間は勝手な踊の編入で組立てられてゐる。隨て文は支離滅裂だが、見てゐれば目先が變つて大いに面白い。劇文學は時に理屈ぬきが許されてよい。殊に道行や振事がさうだ。終の祈りの段や「ヤレ來いやい」の押戻まではもう説くには及ぶまい。

助六は河東節の一手專賣で來たもの、くはしくは、助六ゆかりのえとさくら所縁江戸櫻で、これも寶

曆十一年に江戸で出來たもの。この前にも助六物が二三曲あつて、其の當り文句をよい加減に綴り合せてゐるのだが、舞臺面の花やかさはどうしても櫻咲く日本の國の芝居である。

助六は敵討劇であるが、馴染の遊女の揚卷の助力によるのである。其の助六が廓の格子の前を通る、すなはち前渡りをする所までを敘したのが、此の江戸櫻だと思へばよい。舞臺は新吉原三浦屋の店先で、日覆から櫻の釣枝が出てゐる。頭取の河東節への頼みの挨拶があつて、東西の兩花道から出た鐵棒曳つけぎはが付際ではげしく突くと、

春霞立てるやいづこみよしの。山口三浦うらうらと。うら若草や初花に和らぐ土手を誰がいうて日本めでたき國の名の。豊葦原や吉原に。根こじて植ゑし江戸櫻。にほふ夕の風につれ。鐘は上野か淺草のその名を傳ふ花川戸。

になる。初花のあたりで鐵棒は引込み、鐘は上野かで、本釣となり傾城新造若者等の出になり、花川戸で出畢つて揚卷が出てくる。



遠近人の呼子鳥。いなにはあらぬ逢瀬より……間夫の名取の草の花。  
の所が大切なのである。今はちと違ふやうだが、寶曆の正本には次のやうにあ  
る。

△へ笑止、地まはりの若衆かと思つたれば、助六さんぢやわいの

○へ助六さん今までさるおあひ方様が、お前のことで、こゝに氣をもんでゐさん  
したぞエ

△へそれにお前は悪性ばつかりしてゐさんす程にの。そのやうに浮氣では揚  
卷さんにしつぱり叱られさんせうぞエ

○へちと逢つてあやまつたがよいわいな助六さん

△○へほんに

助六へさうぢやなあ

の臺詞があつて、思ひそめたる五所紋日待日のよすがさへ……雨の蓑輪の冴え  
かへる」になるのだが、このあたりは助六の花道の所作だ。此のあとにまた臺詞  
があつて、此の鉢巻は過ぎし頃、ゆかりの筋の紫も君が許しの色見えて、うつりか

はらで常磐木の、松のはけさき、すき額びなの所になり、有名な草に音せぬ塗鼻緒、一つ  
印籠一つ前。せくなせきやるなサヨエ浮世は車になり、しんぞ命を揚卷の。こ  
れ助六が前渡り。風情なりける次第なりで終るのだが、仲の町の櫻の下だけに、  
はでに美しく見られるのである。ぱつとした江戸歌舞伎は遺憾なく此の上に  
發揮されてゐる。江戸中世の歡樂期よ、二三十年後には大へんな緊縮期が迫つ  
てゐるとは知らず、浮かれに浮かれて、飽くまで櫻氣分にひたつてゐたのである。  
關扉は常磐津節の第一の大物、くはしくは積戀つちのこひゆきのせきのと雪關扉である。天明四年に江  
戸で重人ぢゆうにひと重小町櫻の切淨瑠璃に出したのである。逢坂の關の關守は關兵衛  
少將宗貞がこゝに閑居の體。名高い墨染櫻がここにあることになつてゐて、今  
しもかへり、花の眞最中。宗貞がひく箏の音に三井寺詣りの小町姫が立寄つて、  
さまざま問答の末、墨染櫻を小町櫻と呼ぶいはれや、宗貞との戀の由來を話す。  
面白い踊の後に、關兵衛の正體が怪しいとあつて、小町はすぐに小野篁へ知らせ  
に行く。こゝ迄が上の巻で、櫻關係は下の巻からである。關兵衛は奥から酔つ  
て出で、又大杯をあげて、



「この盃中に鎮星ちんせいのきらめく影かげは寅の一天。今宵今宵三百年にあまる此の櫻を切つて護摩木となし云々」

で立てかけてある斧をとぐ。そこへ墨染櫻の精が伏見の名君墨染となつて現れる。

關「ヤアいづくとも見なれぬ女、この山蔭の關の戸へは。いつの間にもどこから來たのだ。」

墨「アイわたしやアノ撞木町から來やんした。」

で、關兵衛が次第にたらされ、廓のしこなし、手くだの諸わけ、裏茶屋這入りの魂膽まで話すうちに關兵衛のかくしてゐた片袖が落ちる。墨染が見て、「ヨ、此の片袖は夫の血潮云々」になり、「かくなる上は何をか包まん我こそは中納言家持の嫡孫、天下を望む大伴黒主とはおれがことだわヤイ」「さてこそ」で名乗りになり、ありあふ櫻を取つて呵嘖しよとの咎。關兵衛は斧取なほし打つてかゝれど、凡人ならぬ精靈の業通は散々に關兵衛をなやまし、歸り花の雪と散つてゐる根方に消えるといふ筋。實に見せ場、聽かせ場の多い大物だが、近年は芝居にも餘り出ない。

かうした形式美は次第に劇場から消え失せるのであらう。

### 結語

凡そは時順を追つて説いて來たが、もう既に幕末期、志士連の櫻を引合に出すのは、潔く咲き潔く散る所であつた。櫻田門外では十七士の一人黒澤忠三郎は呼ヒレ狂呼トレ賊任ハトニ人評スニ。多歳タ愁雲今日晴。方ハ是櫻花好時節。櫻田門外血如ヒ櫻トと詠じた。一命を捨てたものは多く櫻にかけて決死の程を示した。佐久間象山は屈原の橘頌にならつて櫻賦を作つた。近來の難文であるが、鬱茂を極めた大作長篇である。故事も多少はあつて「國舅忘シ志ツ染殿ニと良房の事に及び「王孫發セリ感渚ヲ院ニと敘して業平の

世の中に絶えて櫻のなかりせば春の心はのどけからましを千古の絶唱としてゐる。ひとり業平ばかりでは無い。古今集以下の歌集や詩集から櫻の詩歌を除いたら、どんなに淋しいことだらう。俳句にしてもさうだ。これが櫻の國華たる所以だ。



櫻賦はもつと故事を入れて、慷慨の志士が芳野をのぞんで皇業の振はないのを大息したことを敘すると共に、源義家や兒島高德の故事を説くを忘れなかつた。櫻の名所として奈良嵯峨嵐山小倉大原の上方をいふと共に、東の小金井や隅田川、こゆるぎの磯、霞が浦、岐蘇、足柄をも擧げた。やゝ西に疎だといふ感が無いでもないが、象山の苦心の作である。文久二年三月正親町三條實愛を経て天覽に供し、次いで注本を献上した。さうして其の榮光を歡喜して、

居然山澤、一腐儒 廢錮九年形跡孤 多謝三春櫻樹子 微言因汝達天都

と詠じた。此の賦は今飛鳥山に石に刻まれて立つてゐる。人といひ處といひ申分なしだ。俳句大觀は天明が中心で、上は寛文頃から、下は天保頃までの諸家知名の人の句だけを選んだのだが、彼岸櫻、初花花花の雲花曇花盛花散落花花見花衣花守初櫻櫻一重櫻八重櫻絲櫻山櫻櫻狩櫻人散櫻遅櫻等にわたつて五百餘句を収録してある。花とあるは勿論櫻のことだ。もつと下端の俳人の句まで蒐めたら何千にも何萬にもならう。國學者や歌人の和歌にしても同様だ。これも何千何萬だらうが、近世では

うらうらとのどけき春の心より匂ひ出でたる山櫻花

賀茂眞淵

しきしまの大和心を人間はば朝日ににほふ山櫻花

本居宣長

の類、他に一二首もあげればもうよい。誰も歌へば、誰も相當に詠みこなしてゐる。此處に、櫻の國華たることが現はれてゐるのだ。

上野は古くから櫻の名所だが、大窪詩佛が花明三十六僧房と詠んだのが名高

い。けれどもそれ程でもない。蜀山人は

一面の花は碁盤の上野山黒門前にかゝる白雲

白雲の上野の花を見てしより今日かあすかに日暮の里

と詠んだが、いひかけや縁語で運ぶ狂歌は到底櫻には向かない。川柳もさうだ。もう四十何年も前だが、或夜友だちと二人で上野公園に入り込んだ。全山寂として靜かな春の宵だ。午後九時頃だと思ふが、動物園前の數の多い櫻に、「おう綺麗だ」と感歎の聲を漏らして交番の前を通ると、いきなり「あなたはどこへ行きま



杉林を指した。「一ぶくして行き給へ」で、そこで一休みしたことであつたが、今も切株だけ残つてゐる女夫杉の前あたりは、晝は花下に小袖幕も見られて、緋毛氈の上に提重を開き、知らぬ者にも盃を出したものだ。秋色の「井の端の櫻あぶなし酒の酔を見られることもあつて、まるで嘘のやうな話だ。今ぢや上野もあの通りだし、隅田の土手もあれだ。飛鳥山は小便可さい。やはり郊外へ出て花は見るべきで、郊外文學が榮えてよい。夜櫻は静かなよい物で、月があれば上々で雨の櫻よりずつとよい。清元の保名に「植ゑて初日の初會から」とある新吉原の夜櫻は、全野人の私は見たことが無い。祇園の夜櫻もよくは知らない。夜には弱い昔ながらの男だ。

## 二 花見苦笑

(昭和十二年四月稿)

### 上野の夜櫻

年々の花時をのんびりと過ごしたことは無い。但し學生時代には無かつたわけでもない。

明治三十二年の四月初旬の夜である。心おきの無い友だちと二人で上野公園へ足を向けて、動物園前の廣場へ行つた。そこは櫻の老木のびつしり植わつてゐる處で、丁度満開時であつたが、どうしたのか見物人が一人もゐない。交番の巡査が私ども二人を何處へ行くと檢べたが、何處てこともなくやつて來ました。ひどく静かですな」と答へると、「今あの杉林の中で決闘があつてね、説諭して歸した所です、まあ此處で一服やりませんか」やらせて貰ひませう」と、そばのベンチへ腰を下ろして、その談に聞き入り、十一時の鐘に驚いて、本郷の下宿へ急いだ



ことがある。落ちついた花見は、あとにも先にもこれが一度だ。下役人時代は靖國神社の境内か、英國公使館の前かで花を見た位のもので、何れあわただしい生活であつた。教員時代は丁度入學試験にぶつかるので、受験者の青い顔や溜息を聴くと、窓さきに咲きこぼれてゐる花を見ても、見たやうな氣がしなかつた。家を持つては夜櫻なんか見に行かれるものでない。夜を書入れの讀書三昧時代はさうしたものだ。私は小金井に花よりも葉を愛でに行つたことも一二度はあるが、若い頃でありながら、歸り途が案ぜられて、そこそこにして歸つた記憶があるばかりだ。

## 嵐山の櫻

一度官費旅行の次手に、嵐山の櫻を見に行つたことがあつたが、大悲閣までは登らなかつた。何にしても酒臭い小便の香に困らせられたのだ。辛うじて奥の温泉へたどり着いて晝食をしたためようとしたら、女中の持つて來る膳が庭

前で横取りされたとかで、待つても待つても持つて來ない。湯にでもと思つて行くと、男湯は男女で一ばいだ。

さう手間取つてもゐられない豫定であつたので、逃げ出す相談を始めたら、女中がゆで卵を五つに食鹽を添へて渡してくれた。

花どころの沙汰でなく、見知らぬ人の舟に乘せて貰つて、人力車を驅つて二條停車場に行き、さて辛うじて乗せて貰つたのは、きたない貨物車、顔見知りの知事さんの奥さんも、つい隣にゐられた。驛員らしいものが挨拶に來て、「白切符の方に此の車では」といつて頭を下げた。成程私も白なら奥さんも白、隣にゐた人も白の切符を持つてゐた。それでも豫定時には六條の停車場に着いたので、別に不平にも思はなかつたが、大津で棚に上げた荷物を整理したさに立ち上がる、四十恰好の感じのよくない顔をした婦人が、私をつきのけて私の席に腰を掛けた。いゝ氣持はしなかつたが、どこか空席はあるまいかと見廻した。すると、カバンを下ろして席を作つてくれた人がある。それが先刻雑踏の汽車の中で、白で立ちん坊をした婦人であつた。白白といふ、白が自慢かなどと悪く取



つて下さるな、嵐山に向ふ時に、電車には乗れず、汽車なら白の四人分だけの席がある、他には無いと斷られて、仕方なく四人の中に加はつた其の二人が私どもなのだ。その婦人は鐵道に關係のある大官の夫人でもあつたのか、次の停車場では驛長が挨拶に来て、悪く丁寧に頭を下げ、何分にも此の地方は全國中でも屈指の公德缺如地でありまして……と低い聲で述べて行つた。

## 苦笑の花見

それから彼は二十年もたつたらうか。今年は珍しくのんびりした心持で花を見る氣になつた。少しは勝手な生活が許される身の上になつたのだ。それで其の花といふのは、道を隔てた相向ひの家の櫻だ。私の書庫の屋上、曝書どころへ出て見ると、近傍に櫻の多いのに驚くのだが、前のうちの櫻がかうも美しいとは今年迄氣づかなかつた。といふのは、今年の三月中旬に自分の家の勝手口に赤い角棒をぶちこんだ。あたり近所には七八箇所もぶちこんだ。府の役人が卷尺を持つて来て、私どもの屋敷うちや家の大きさを迄調べた。向側もさうだ。

いよいよ道路がひろがるのだ。二間幅のが八間か十間かになつて、自分たちの先年寄附してつけた道が廣くなり、どうやら縁故拂下をすれば、私の所なんかは、前方へ二、三尺も屋敷が廣くなるといふ。

嬉しからうぢやあるまいか。所がさう安くはあるまいし、コンクリ塀を送り出すにも尠からぬ費用がかゝる。その外、新道路舗設費として、間口一間あたり百三十圓位徴收されるとおどかした人もあつたが、何大したことはあるまいと、早速書齋前の植木を移轉させたものだ。五間に六間ばかりの空地を作らせ、そこへ二階造りの圖書の閲覧室を建築しようとしてだ。田舎から棟梁を呼んで、私の設計に基いて水盛をさせた。さて届出を建築代願人に依頼すると、やつて来て、もう三尺引込めなければ許可は出ないといふ。理由をきけば、前接道路の擴がるのは既定のことだが、まだ着手されてゐない。二間幅の道路に接する家の高さは一丈九尺までだといふ。それなら三尺引込めようとすると、折角苦心してよけた便所が鬼門に當つてしまふ。そんな事はどうでもよいといふと、いや人の忌み嫌ふことは同じく嫌ふがいゝといはれて、無理押しも出來ず、



道の擴がるまで待つて、豫定通り家を建てるがよからうといふことになつた。翌日は快晴、春光はうらら。私の胸は大曇。表を通る無心な小學兒童が「春が來た、春が來た、どこに來た」と謡つて行く。あれは三十七八年も前に、私が文部省で國定小學讀本を編纂してゐる時に作つたものだ。まだあれを謡つてゐるかと思ふと、苦笑せざるを得ない。花はよく見えて美しいが、空地を通して見るのでは苦笑せざるを得ない。吹き來る風は薄ら寒い。爛を命じて八九升と洒落れる所だが、私にはそんな酒量がない。

支那蕎麥のチャルメラ細き春の宵

風なき辻を散るさくらかな

### 三 學究の夏

(昭和十二年八月稿)

大正十二年の大震災に類焼の厄を免れた私は藏書の全部を保有し得た。失つたものは他に貸して置いた藏幅の四五と、代金を支拂つて置いてまだ引取らなかつた役者繪の四五十枚位で、下町住居の人に比べて損失は物の數でも無かつた。自分の研究に缺くべからざる典籍類は多く下町の人の許に襲藏せられてゐたのである。上野の東京音樂學校が残り、帝國圖書館の無事であるのは嬉しいが、わが研究の將來は一層の難事に屬して五年の豫定は十年をも要するに相違ない。さらば今よりして學究生活に埋もれて行かうと決心した。さうして翌十三年の夏は何處へも行かなかつた。

暑さ避けむあしもたぬ身は戸を閉ぢて昨日も今日も古書に裏打つとよんで、汗だくの日を送つたのは大正十四年の夏であつた。



昭和に入つては幾年も平凡な夏を送つたが、三年七月東京音楽學校の爲に今上天皇陛下の大禮奉祝歌を謹作することになつて、京都の御所の拜觀を願出でて御許しを得、

瑞氣天地をこめて、喜び八島にあふる

といふ起句を得、永く御所に奉仕する人たちに問うて、大禮を擧げます頃の光景を思ひを浮べ、

右近の橋黄金をつらね、左近の櫻は紅葉をかざす。

といふ句を思ひ浮べては當日の光景を想像し、

實に今日こそは、生日の足日、日と赫よひてわが大君の大高御座に即きますよき日。月と照して後の宮の、並びの御座に立ちますよき日。

を心の中に作り設けて、私に取つては一生涯忘れられない光榮の夏であつた。

翌大正四年の夏は萬葉地理の研究に志して南大和に自動車走らせた。珍しくも此の時は小遣に事を缺かなかつたかして、

僧俗の男女相乗る自動車の飛鳥かけ行く昭和御代

來て見れば飛鳥はせまき地なるかもうべし都の短かりつる

おとなへどいらへはあらず飛鳥寺古き本尊のたゞもだします

ふちは瀬にかはりてし世の戀しかり飛鳥川面水草ゐにたり

活動の姿の見られし往古の飛鳥川が戀しいのである。かう思ふものは私ばかりではあるまい。

君が名も富の緒川も絶えせねどかなし流れの末は濁れり

など口ずさんだことであつた。最後の和歌は聖徳太子薨りましし時、巨勢三杖丈夫が「いかるかの富の緒川の絶えばこそわが大君の御名忘れえめ」と詠んだことを思ひ出せば、何人も頷くことであらう。

一先づ藥師寺へ引返して吉野山の方に向ひ、それから北越を経て歸らうと思つて行くと、東京から急電で、一人の娘が病氣で大學病院に入つたとのこと

青蓮のまなじり旋へせ南無藥師わがひとり子は病み臥すとふ

と詠じて、すぐ引返したことであつた。



大正六年は福島縣の土湯に夏を送つて、江戸長唄の爲に「秋の山」を綴り、俳趣味に成る自慢の作であつたが、吉住小三郎からもつと新しいものにしてくれといつて來た。新しいとは何の意か迷つた。どんなに歌の想が新しくても、それが理解出來ない人には新しい曲は附くまいと考へたが、手紙の様子では新浦島のやうなものにしてくれといふ意らしかつた。そこで八月の末に相模の大山に登つて、山頂の眺を「曙」と題して

大虚遼廓晨星光收むれども、人寰なほ夜にして、山頂未だ明けやらず、須臾にして雞鳴脚下に起り、天風吹送る爽涼の氣

といふを第一節にして第二節には雲海、第三節には

人の技は拙かりけり、見よ東の横雲の、赤よ紫オレンヂを。自然が描くあの刷毛の巧を何とたたへまし。

と綴り、第四節には日出、第五節第六節に山地と都會との朝の活動を説いたものであつた。どうやら曲が出来て、オーケストラの助奏もあつて、演奏會も開けたが、高等政策とやらの煩はされて、其の後は二度と演奏されない。私に取つては

病を押して大山に登つたのであつて忘れられない歌詞である。

○  
昭和の九年十年は山莊で専ら江戸文學史に筆を執つた。十一年は最も思ひ出が多い。浴衣一枚の夏を送り得た。二十幾年も關係した東京音樂學校と手を切つて心徐かに書を読み、漢詩に耽つた。釣と碁將棋と球撞とは性來嫌ひなので、禪味の濃やかな書畫幅を弄んで、白隠や東嶺、遂翁や誠拙等の墨蹟に親しんだ。筒蓆に杯を重ねる山館の夕は、決して悪いものでなかつた。温泉を引いてささやかな浴室を設けて清白湯と名づけた。それは村人が晩夏初秋に源泉地で大根の嫩葉を煮るので、其の香氣が湯につく。そこで大根の古名清白すじろを取つた迄で、別に何の意味もない。いつしか立秋の日が來た。眼地を劃かきる五岳はあざやかに日々姿を見せる。

秋立つといふ日より五岳さやに見えて、雲の色さへ白うなりぬると端紙に書きつけた所へ、加藤繁博士が過訪されて、自分も

五岳みな晴れて秋立つ朝かな



と吟じたたのことに、短冊にしるして戴き、私も拙作五絶を山莊即事と題して

窓外芭蕉戰 枕頭蟲語長 少時貪曉冷 沐浴暖枯腸

と色紙に誌して呈したことであつた。

○

今十二年は北支の風雲が急で、閒適生活は許されない。掛軸でも雲板でも志士の筆に成るものにして、嚴肅氣分の中に暑さを忘れることにしてゐる。高山彦九郎の唱和歌や林子平の詩句を床にし、江川坦庵の慷慨詩を高島秋帆が書いた幅を書齋にかけ、専ら志士の文學に眼をさらし、日々のニュースに耳を傾けてゐる。立秋は旬日の後に迫つた。今日七月二十七日、池水が急に澄んだ。遠望すれば五岳の姿が鮮やかに見える。

#### 四 御大禮奉祝歌

(昭和三年七月謹作)

瑞氣<sup>あめつち</sup>天地をこめて、  
喜び八島にあふる。」

現つ神わが大君  
天津日嗣承けまし、  
御大禮<sup>おほみ</sup>あげます今日、

瑞氣天地をこめて、  
喜び八島にあふる。」

賢所に鈴が音清く、  
大君親しく神々に告らす、

御大禮奉祝歌



畏き此の朝、畏き此の日、

瑞氣天地をこめて、

喜び八島にあふる。」

右近の橘黄金をつらね、

左近の櫻は紅葉をかざす、

南殿の廣庭光にみたり、

並み立つ御旗に、装へる臣に。

實に今日こそは生日の足日、

日に赫よひてわが大君の

大高御座に即きますよき日、

月と照して後の宮の

並びの御座に立ちますよき日、

皇族よ 臣よ 蒼生よ、

祝へ 祝へ 此の日を祝へ。

呼へ 呼へ 萬歳呼へ。」

悠紀田主基田の垂穂の稻に、

造れる御酒御食手づから捧げ、

親しく祭らす御心畏。

仰げ 仰げ 御心仰げ。

祝へ 祝へ 昭和の御代を。

永久に榮えん昭和の御代を。」



## 五 大山登攀記

昭和六年八月二十八日午前二時、大山町の宿を發して阿夫利神社の奥院に詣づ。江戸長唄の歌詞を作らん爲に大山山頂の曙の景を見んとてなり。

昨日は朝より心地悪しかりしかど、強ひて出立ちしなり。午後三時といふに大山の麓の町に宿りを求めて入浴して涼を取れど、箸取る力もなく、手洗所に立つことも三度四たび、熱も少しはありて、登山は覺束なう思はれしに、午後十一時頃寫眞師が近き室に宿りて、なにがしのはよく撮れたり、それがしのは悪しなど宿の人と罵り合ひて眠りがたし。祭禮の夜なりければ、終夜人の表を通ふ音絶えず、少しも眠り得ずして午前一時半といふに起されて結束して出づ。ケーブルカーは宿より三町程の處にありて、これに乗れば頂上へは二十八町といふ處まで登り得れど、それはた午前六時を過ぎねば運轉せずといふ。頂上にて來光の景を見んといふ我等には用立つべくもあらず。マキゲートル草鞋金剛杖と

いふいでたちにて強力に導かれて登る。十四日の月霄の程は明らかかなりしが空曇りて足許定かならず、提燈を便りに行く。山上は如何ならんと語り合ひて同行の荻野秋風君と喘ぎ喘ぎ登る。中腹の不動尊迄はさまで疲れざりしが、社務所のある向拜といふあたりより汗出でて堪へがたし。山の開かれてあるは七月の二十七日より此の八月の十七日迄なれば、登山口の表門は閉ぢられてあり。脇の小門より入りて登る。石磴の急にして數の多きこと、芝の愛宕山に幾倍し、紀伊の那智神社より急に、讃岐の金毘羅よりはいと狭うして、夜の目にはいと危く且つ苦し。強力も喘げど、秋風のみは身輕に事も無げに上る。石磴盡きて九十折の途なり。自然石もて階を造れど、其の一階と一階との間の高きこと、鎌倉時代に造れりといふ那智の瀧壺への途と同じ。四丁五丁と登るにつれて、足痛みて息苦しさを増す。頂上迄は如何あらんと心の中には案じたれど、意地にも上らでやは。必ず來光を眺めて、その實感を歌にせんと汗を拭ひて行く。タオルの汗をしぼること兩度。上ること表口より十町十一町といふあたりよりは雲の上といふにもあらねど、月影さやかにして富士の姿遠くかすかに見える



たり。十六町といふ時には、すでに午前四時となりて、東天白みかゝりぬ。日出は四時四十分なりといふに、それ迄には到底頂上には行き着くべくもあらず、横雲も赤く紫づきたり。此處にて來光を眺めんといへば、十八町まで急げ、そこは十分に拜まると強力はいふ。秋風は駆け上りて、二十町の處眺望最もよし、急げと呼ぶに勇を鼓して這ひ行く。

月は今、富士の寶永山下に入らんとして清絶いはん方なく、東天紅炎々として嚴正壯麗をきはめたり。目的半ば達しぬと喜び、仔細に其の光景を熟視して、辛うじて頂上に登る。參拜先づして、朝食をとる。然るに稍目まひして頭に微痛ありしかど強ひて海苔包の握飯を口にするに、中の梅の實食慾をそゝりて、二箇にては足らで、食パン半斤にバタしたたか附けて平げたり。急に氣力の増すと共に、眠氣催し來る。乃ち濡れたるシャツを着かへ、用意の腹巻をつけて社殿横の扇賣る店に休らふ。末社めきたる所、廣さ一坪ばかりなる板敷に上り、新聞紙を布き、パンの包を枕にして足を伸ばしぬ。自らは知らねど、いびきの聲は山を撼がしたりとぞ。三十分ばかりして元氣舊に復し、携帯せしめし紅茶の熱きを

魔法瓶より數盃傾けて、さて再び四方の地理を問ふ。實にお山は晴天にて、富士愛鷹箱根の二子、伊豆の天城山等一眸の中にあり。大磯平塚あたり江の島も幽かに眺めらる。馬入川は白布しけるが如く、名の知れぬ川は銀絲の如くなり。脚下の山脈やまなみよりは亂れ雲空に騰りて、遠雷甲州の方に響くこと夥し。二時間餘り頂上に過し、丹澤山の赤緑斜に幾百條の縞なすを眺めて、奇絶美觀と叫ぶこと數多たび、赤きは去る大正十二年の大地震になだれ落ちたる痕にて、震源地などいはれたるも此の爲なりきとか。十六町目の茶屋めづらしく開きてあり。生暖きビールに渴を醫して、こたひは裏道といふより下る。頂より稍下りて懸巢かす駒鳥、更に下りて頬白巧婦鳥みそささいを、山毛櫨ふなば林しもみの林のあたりには啄木鳥きつを聞けり。秋草はさまざま珍しからず、但額の花と谷塞たにかきと稱するもの美しきが目をひけり。向拜よりの歸路はケーブルカーによりて僅かに七分にして下り着く。宿に歸りて湯に入りたれど晝食を取る心なく、午後三時迄横ほり臥して立ち出づ。又二十五町を直下りに下りて乗合自動車に入り二十分程にして伊勢原驛に着し、一時間を小田原急行電車中の人となる。十五年間に木曾の御嶽へ十三度、富士



に一度、今日大山の中腹向拜まで詣でたりといふ行者と席を並べ、大山は富士山よりも登りの苦しきことをつぶさに聞きて、午後六時秋風と共に代々木の家に歸る。よくも無事に登山を了へしことよと我ながら驚く。九時床に入り午前四時起き出でて記憶の失せぬうちにとて一篇の歌詞を草す。成るべく新しく、従來の江戸長唄の形式を離れくれよ、漢詩調もよし、散文體もよし、必ずしも七五を喜ばず、といふは近時の自由詩と呼ぶが如くなれば、其の望を容れて、三味線の手もつけやすかるべく、オーケストラ式の助奏もなしやすきやうにとて筆を馳す。苦心は此の間にあれど、作曲者はその十が一をも知り得ざらんかし。殊に序曲は莊重に、中ごろには洋風曲のみにしたき處もあり、獨吟にして何のあしらひも無き處もほしなど希望の申出は果てしも無く、しかも明らかに意識しての事には無きが如し。ともかくもとて一文を二三時間の間に綴り、曙と題して清書して其の翌二十九日の正午少し過ぐる時、吉住小三郎稀音家六四郎の兩人に渡す。

## 六 曙

——山頂の眺——

大虚遼廓晨星光收むれども、人寰なほ夜にして、山頂未だ明けやらず、須臾にして雞鳴脚下に起り天風吹き送る爽涼の氣。

曉闇の薄るれば地に湧き出づる雲の波。醸しつ溢れつ、群れつつ競ひつ、倚りては離れつ、連り續く遠つ方。

人の技は拙かりけり。見よ東の横雲の赤よ紫オレンヂを、自然が描くあの刷毛の巧を何と稱へまし。

おう、紅炎々、一團雲を押開き、金箭燦と輝けば、世に嚴かを正しさを、はた明るさを示しつつ、現れ出づる日の御影、妖魔棲家や無かるらむ。



高山は島とのみ見ゆ。海の波磯邊によせて白浪の立つとのみ見ゆ。亂れ雲空に騰りて山脈は通路見せつ。河々は白布しけり、銀絲をも細う延べたり。南に海見えそめて工場に汽笛響けり。

山毛櫟林樅の林に、山鳥曉を告ぐれば啄木鳥は朝の柝撃ち、掛巢高う起きよと叫ぶ。頭振りて駒鳥は谷やわたれる。頬白は峰に木傳ひ、巧婦鳥籠に向ふ。

日高まりて人の世は今し朝なり。馬車市に馳せ行く。遠雷は何處の山ぞ。

## 七 赤櫟の惱

(昭和十二年十二月稿)

かう題したら、金色夜叉の中に出る赤櫟滿枝が、間貫一に對しての惱だらうと思ふ人があるかも知れないが、さうではない。庭前の赤櫟一本を伐らうか伐るまいかの惱である。

私の今居る所は地圖の上で見ると、大東京の本當の中心地である。これが私の移り住んだ頃、すなはち三十幾年か前までは麥畑地であつた。そこに地均らしをして家を建てたのだが、それこそ麥の外には地境用の空木一株もなかつた。家を丸裸にしても置けないので、通り一ぺんの庭樹を植ゑ、東北の隅には櫟の木を三本植ゑた。地味が適してゐたらしく、櫟はめきめきと生ひ延びた。二十年ばかりで目通りが尺五寸位になつた。木がさうなる頃には、私の頭の毛もまばらになつて、書庫建築の計畫を立てなければならなかつた。試に書庫の敷地を測定してみると、櫟三本は邪魔になるので、季節外れにも係らず移植させた。植



木屋の案じたやうに、質のよい柳葉二本は枯れて、一本だけが無事であつた。それが赤樫で、今伐らうか伐るまいかに迷つてゐる木だ。書庫の南面にあつても、採光の上には邪魔にならない。それで火防用には大いになる。又風致をも添へる。兎も角も生々として幾十本の庭木の中で、貫祿に於ては第一である。それを何の必要があつて伐るのか。

私は入用に應じては前後左右を顧みず、新古を問はず、書物を買入れるのが癖だ。保存すべき月々の雑誌も七部や八部ではすまされない。寄贈される書物だけでも一年には百部位には達する。書庫は充ち溢れてきた。其の結果、所要の書を捜し當てるのは容易でない。そこで書庫の板敷を延長して南面に一棟新築する案を立てた。

私は家屋運の悪い男で、折角澁谷に新築すると、萬國大博覽會の敷地にすると、土地收用法にあつて、折角の地代の安い地を追立てられた。今の家は其の次ぎの造營で、中途に一ぺん二階の建増もやつた。それやこれやで多少は建築の事には慣れてゐるつもりで、庭の東南部に地を卜して四至を定めた。どうして

も赤樫は伐らなければならぬ。此の木をよけるとWCは金神の方に當つてしまふ。何構はないと主張した。けれども出入の者や仕事師は賛成しない。人の嫌ふことは避けるがいい、何か事でもあると、それ言はないことかと非難をされるといふ。大工棟梁の案で間がねで割出して、赤樫は避けることにした。すると南面の二間道路を東京府で八間道路にするといつて測量を始めた。自分たちの側でなく、反對側の方へ廣がるといふので、決定標識の赤杖をうつのを待つて建築届を出した。それは代願人に任せて置いたのだ。所がもう三尺引込めなければ建築法に抵觸するといふ。引込めるには赤樫を伐らなければならぬ。何さう惜しい木ではないといふ者もある。女どもは落葉掃除が大へんだからといふ理由で、いらないと木だと主張する。出入の者は庭木としてさう上等のものでないからといふのである。私にして見れば、さう簡単に片づけられない。三十年来わが家に仕へてくれた木である。目通りが二尺もあつて立派な仰高目標になつてゐる木である。移植するには大木すぎる。之を移すやうな、そんな土地はどこにでも明いてゐるものではない。伐つて材木にした所



で、大工の鉋の臺位なものにしかならない。伐らうか伐るまいかに迷ふは優柔に過ぎると思ふ人があるかも知れないが、人情味のある人間なら、まさに思案にくれるべき所であらねばならぬ。

東京の材木屋で材を求めたのでは、私は増築の負擔に堪へられない。そこで信州の大工で、立志傳中に收むべき棟梁三田清助君に依囑した。斯人は今立派な宮師寺大工で、かつては松岡映丘畫伯も住宅の造營を囑し、私も記念書庫の内、部一切を工夫して貰つた人で、十分信任すべき人である。當然のこと年中忙しい人であるが、其の忙しい所を差繰つて、マツチ箱のやうな私の増築を引請けてくれた。さうして信州で切組んで、トラックに積んで來ることにして、それに先立つ水盛工事に上つて來てくれることになつた。もう一日も猶豫は出來ない。私は斷然赤檜を伐れと命じた。枝葉は切り下された。根廻りが掘下げられた。斧が振上げられた。赤味のある木片が私の書齋の前へ飛んで來た。やがて大きな音と共に老幹が倒れた。道を行く人は勿體ないといつた。庭木を移す手にたうとう此の木までお伐りになりましたねと隣の人は眞實に愛惜の情を

表した。私はひそかに藤村の「常磐木の折れず凋まざるはいたましきかな」の詩句を別な意味で想ひ起さざるを得なかつた。

數日後に支那事變で道路工事は見合せになつたといふ風評が立つた。私は赤檜を伐る前々日に掛員の出張所へ行つて聞いて來てゐるので、まさかと思つたが、それでもと思つて行つて見ると、出張所はもう引拂つてしまつて誰一人ゐない。元來道路を八間幅にするのなら、三階を建てても、四階を建てても法に觸れないのだ。それを今建てるのであれば、二間幅の現在に即して立案しなければならぬので、廣くない屋敷に住む者には一工夫を要するのである。散々ぐらつかれ且つ悩まされた末に赤檜を伐つてしまつた。此の上はもう何尺でも引込めて建築し得るのだから、別に不平はいふまいと思つてゐた所がまた變更だ。道路掛員は私方を訪ねて來た。穩に話をしたが、煎じ詰めれば、私の屋敷の表通三尺づつ十四五間を無償で府に提供してくれといふことであつて、どうしても此の道路一本だけは必要だといふ事になつたのださうである。さうして私は希望もしない道路の鋪設實費とやらを、私の力では負擔し得るかどうか分らな



い程出さしめられるのださうだ。私どもは忠孝主義で育てられて来て、それを布衍してそれぞれの施設に反対せず、御奉公をしなければならぬのだと思つてゐる。だから書庫の書物を賣つてなりとも公課賦金は出す。誰だい、遠い所で、土地の位があがるぢやないかなんて言ふものは。それは商業地域での話だ。我等住宅地として此處に住む者にとつては地の位が高まつて、出しものが多いなるのを苦痛とするのだ。表に人通りが多くなつて、うるさいのも迷惑だが、それは公に對する義務だと心得て、言ひたいことも言はずに居るのだ。賣つて餘所へ移轉しろといふのか、移轉してもよいが、誰か鐵筋頑固建の書庫を引請けてくれるものがあるだらうか。商業地域ではなく、且つうるさい土地を高く評價してくれる者があるであらうか。おう、赤檜の後始末だ。どこかの家の焚き物になつたらしい。根本の太い所は下駄の齒にもならず、やはり鉋の臺になるらしい。大工の若造が割つて、今日に干してゐる。人間にも此の赤檜と同一な運命に遭遇してゐるものが尠くない。

## 八 土木請負業

(昭和十二年十二月稿)

容貌ばかりは天賦である。人爲工作を施しても、汗と涙にはすぐ剥げる。結局如何ともなし難い。女ばかりで無く、男にしてもさうだ。男性美を備へたといふ言ひ方は、二十年以來の言葉らしいが、それを解するやうな理智を有する女で、女性美を備へてゐる人は稀らしい。どう考へてもやはり美貌の持主は羨ましい。私は煙草をやめてから、むくむくと肥つた。便便腹になつて、一年に三度も洋服を作り立てなければならぬ時代もあつた。といつて體重が二十貫に達したことは無いのだが、ビール樽だの、デブちゃんだのと呼ばれた。これはまだいい方であつて職業の推定をされるのには困つた。

會社員型、醫者型、教員型、學者型、商人型、工夫型、女給型等、擧げ來れば際限はなく、勿論定型は無くても、おほよそは外れないものらしい。間違ふことは、そりやいぐらもある。私も時々間違へられた。二三人會飲の時に、誰か私を先生といふ



と「あら先生、誰の先生、碁の先生？」と、取持に出てゐる女から問はれる。けれども「活花の先生」とも問はれなければ、まして「學校の先生」とはきかれない。詰り型にはまつてゐないためらしい。らしい所でなくさうなのだ。黒髪だが赭顔だ、酒毒色らしい。薄髭があつて、眼鏡をかけてゐる。かういつたら、知らない者はよく見て代議士、低く見て土木請負業者である。

私が四十歳頃のことである。一日K君と淺草の牛肉屋で晝食をした。私も少しはいける方だし、Kは先づ六七本といふ時代だ。二人で十本もあけたらうか。話がだんだん聲高になり、面白可笑しさうな話もしあつたらしい。すると、女中が名刺を一枚持つて来て「お隣さまからですが」といつて出した。全く知らない名前で、名の上に土木請負業とある。別に人の氣に障るやうな口をきいた覚えはなし「お知り申さない方だが、こちらへといつて下さい」といへば、「御免下さい」といつてもう隔ての襖をあけて中腰でやつて來た。名刺の御本人だ。人相も福々しく、先程來五六本はあけてゐるらしい。頗る上機嫌だ。「お話の模様では御同業と見請けまして」これが挨拶の始で、いや辯じるわ辯じるわ「手前などは

まだまだ駈出同様で、やつと省の塀の修繕に小節の板でも納めるといつたあたりで」と、卑下はしてゐるが、どうしてどうして相當の人らしい。私もKも信州生れで、材木のことには多少は知つてゐるので、話はわかる。今更二人とも教員だともいへず、ばつを合せて一時間ばかり對手になつた。さきは調子に乗つて官界の裏面まですつばぬく。まんざら嘘ではないらしく甚だ以て面白い。時に笑を合せてゐると、旦那などの御境遇は羨しい。こんな立派な書記さんを御使用になつて」と來た。かはいさうにKは土木請負業者の書記に見立てられてしまつたのだ。それでもKは面白さうに話し續ける。木曾では五木といつてなど、どうやら教員口調になるが、先では氣附かない。冬季拂下は雪の時、根本の六七尺位をおいて、上で伐採する。春になつて其の根元の拂下をするのが、大した利得さなどやり出す。本物の請負業者は成程といつて腕を組んで眼をつぶつたが、こくりこくりとやる。計算ではなく、夢におちたらしい。遂にいびきをかき出した。先刻來退屈さうにしてゐた女中は、隣の當番らしい女中と二人で運び出してくれたが、ひどく重さうに見えた。さう、私よりは、大兵の男であつ



た。「さあ今だ。歸らう」と會計をすませて出たが、Kの酔はもう醒めてゐた。

これが第一回、次は昨年の夏だ。山莊の留守をしてくれる小學校時代の友だちと、一日田中・澁上林あたりの温泉まはりをして、中野町で下車した。ひどく暑い日であつた。友達は姓も名も頭字はKである。額の汗を拭きながら「一つ骨董屋へ寄つて見よう」といふ。「それより氷水といふ所だ」といふと「そりや店を出して貰はう」と至極蟲のいふことをいふ。二三町だといふのに、七八町もある所を歩いて行つた。その途中でKが話す。「てんで目はないのだが、融通が利くので、度胸一つで、大口の物も買入れて、それでどうやらこなしてゐる。どうせ此の邊で仕入れるのだから、大した物はあるまいが」とのことであつた。夕方の電車には時間があるので、隙つぶしの心持で行つた。

六七間間口の店頭に、所せきまで並べてある。安手の床置も十や十五でなく、場違ひの九谷や有田、ひどいのは何處かその近くで出来たらしい相馬焼、學校でも無ければ用はあるまいと思ふ大花瓶、右手には佛壇佛具古箆、正面横にはあやしげな油繪、其の下に舍利塔の眞新しいもの、火鉢、鐵瓶、古書一山、全く雜然と

列ねてある。唯一つ正里に種子島といふ部類の古鐵砲が釘にかけてある。元祿頃とでもいひさうな古物だ。さてKと二人で立寄つて、聲を掛けても返事がない。まさか晝寢でもあるまいがと思つてゐると、卅恰好の男が奥から出て来て、Kと話し合ふ。

「今日は、おとつあんは留守かね」

「町外れまで行きましたが、おつつけ歸ります、どうぞお上り下さい」

「いや此の方が勝手だ」

といつて、Kは古書の山から心學物の松翁道話を取出して見はじめた。私は柄にもなく古鐵砲の價をきくと、賣物ではなく、學校の展覽會には借出される品だとのことであつた。右手の古膳箱の上に尺に尺七八寸、深さ二三寸の桐ざしの箱が十ばかり重ねてある。重箱式の製で、半折幅を並べて入れられさうだ。何の箱かと問へば、明治初年に地券とやらを入れる爲に作らせた物ださうだと答へた。地券もこれだけあつたら素封家だといふと、此の邊第一の大地主の家のものだが、邪魔けだといふので買取つたなどと話してゐると、度陶家の主人が歸



つて來た。

「おう、Kさんが珍しい。さあお上り」

「何、二三年ぶりさ。其の後書畫の方は止めたかね」

「相變らずで、屏風額掛物類で、奥は一ばいだ、茶でも呑んで、ゆつくり遊んで行つて下さい。どうぞお伴れの方も」

といつて私の方を見た。私は田舎の書畫屋には懲りてゐる。よく掘出した話を聞くが、あれは百に一つで、あるものは古い處では應舉北齋はまだよい方で、華山椿山竹田山陽といふ大家揃、新畫では現代知名の人揃で、食指の動く品にはついで出逢つてゐない。てんで氣は進まない。けれども兒玉果亭の出生地に近い此の町のことであれば、まんざらでもあるまいと思ひ直してKと奥へ通つた。成程屏風も額も澤山ある。どれもこれも仕込物らしい。澁茶をすすつてゐる間に、簞笥から五六幅出して見せた。特置品と見たので、お義理で始の方五六寸明けて見ては返す。五六幅づつ何度か繰返した。主人は變な顔をしだした。

「まだ四五百幅もあるのだが」

「四五百幅なら、一時間足らずで見るといつた後に、當方でもお断りだ」と口まで出たのを辛うじて吞み込んで店へ出た。さうして前の地券箱を求めて荷造りをさせた。桐の分厚にさしてあるものが十重ねでたつた五圓だといふのである。六七十年たつてゐるので時代色も丁度よい。ざつと新調一箱の價だ、信州は桐がよく育つにしても安いと思はざるを得ない。この時奥で「おめえが全體わりい。それならそれとせえばいい」と主人が稍どなり氣味である。Kも何かといふやうだが聲が低くて聞取れない。桐箱の包は出來たし、歸ることにしようと思つた。奥の間へ行くに「どうもお見違へ申しまして。どうぞお茶を一つ」と今度はいやに慇懃で、玉露に出しかへてくれた。信州は雪國で、比較的茶にはぜいたくの所だが、玉露は相當な資産家でないとは持合せてゐない。Kが來る途で融通が利くといつたのは、話がわかるの意でなく、金銭のことであつたなと悟る。暇乞をして出ると「どうぞお懲なく、お序

「いや、もつともだ」

「そんな見方をする人には見せられない」



には是非お立寄り下さい。大先生のお出とも存せず、とんだ失禮を」と腰を屈めた。箱は自轉車で息子が停車場まで届けてくれた。

車の中でKに聞くと、かういふ工合であつたといふ。

「おめえ、あの人を知らないか」

「あゝ知らね、どうせおめえが伴れて來たのだから、西大瀧か秋山かへ來てゐる請負師か何かだらう」

「違ふ違ふ。あれがそれ……」

「さうか、書畫の大先生の……」

といつた後が「おめえが全體悪い」であつたさうだ。骨董屋の大先生は鑑定家の意味だといふ。これが土木請負業と認められた第二回目だ。次手にいふ、西大瀧は信濃川水力電氣發電所の設けられる所で、その頃金を湯水だと心得、温泉地の貸別荘から其所へ自動車を通ふ人も二人や三人來てゐたのであつた。それでも汽車の中で鈴木某君と間違へられて、話の受答へに窮した時よりは餘程ましだと思つて苦笑したことであつた。

第三回目は最近だ。庭前へ維摩堂を建てようと思つて、信州から名工に來て貰つた。下駄の齒入れから身を起して天晴な官師寺大工となつた立志傳中の人だ。腕は現代に稀な男で、身なりに構はないことも當代無比だ、どこへ行くにも木綿の筒袖半纏に紺股引、おまけに帽子はかぶらず、藁草履といふいでたちである。此の人から襖の引手に注文が出て、二人で簞笥町の平田へ行つた。私も着つけない和服を着て二重まはしを着てゐる。同行した棟梁は見本の陳列棚を見ては、あれこれと出させて吟味をする。黒人だから言ふことがみんな甲どこに當る。

「どうせ御商賣でせう」と私にいつた。「いや違ふ」と答へたが、廣い意味では襖障子の建具類も土木請負の中ださうだ。さう聞けば、まさにこれが三度目だ。

こんな話をすると僧侶かなと思ふ人もあらうが、さうではない。洒落氣のある人は維摩堂ぢやあるまい、閻魔堂だらうといふかも知れない。けれども正眞の維摩だ。室も方丈にした。杉の面皮柱に、天井は櫨の皮づきと葶殻だ。半茶だなといふ人があるかも知れない。さうしたら左様と答へる。この室で無言



の半茶生活がしたいのだ。但し號外賣の聲には、きつと飛出しさうだ。

繪畫と彫刻

見よや見よや 彩色の光 筆の力

繪絹二尺 狭けれど 繪師は 心こめけらし。

心こもり形成りて 氣韻高し。

映えたり技 冴えたり筆。

見よや見よや 奇しき木理 鑿の運び

木彫二尺 低けれど 工匠 心こめけらし。

心こもり形成りて 氣韻高し。

映えたり技 冴えたり鑿。

九方丈

(昭和十二年十二月稿)

山莊も南面の池の端には落の蓋がいくらか地からはみ出したであらう。私  
はあの勇ましい潔い懸巢鳥の叫びが聞きたさに、よく十二月の末から野澤温泉  
に出掛ける。スキーの名所だ。信越の境で、冬のさ中には雪が五六尺も降り積  
り、今年なんかは七八尺もあるといふ。旅館は二三十軒あつて、スキー客の二三  
千は迎へ得る所だ。

私はもう骨に弾力性が乏しくなつてゐる。スキーはやれないが、年若い男女  
諸君が早朝から鼻の頭を赤くして、スキーを肩にして、高地に向ふ姿が見たさに  
出掛けるのだ。之を物ずきだといふ人があるかも知れないが、野澤へ行くと、不  
思議に食慾が高まる。温泉にはひるので、運動も適度で、表へ出れば紫外線とや  
らが作用してくれる爲だといふ。

それが今年は行けなかつた。時局柄といふわけでは無かつた。無理算段を



しても、積極的に支出しなければならぬ事情が湧いたからだ。外でもない庭先へ一棟増築しなければならぬことになつたのだ。といへば息子によめでも迎へるのか、孫でも出来たのかと思ふ人もあらうが、孫は二人あつて、上が九歳でといつたら、それぢや何の爲だと問はれるだらう。

別ではない、書物の置場である。それこそ時局柄遠慮すべき事のやうだが、ぐづぐづしてゐると貰つた金をなくしてしまひさうだ。そこで萬難を排してといふことになつたのだ。さういつたら、どうした金だと尋ねられさうだが、滿六十歳になつたので、讀書生活に復らうとしたら、辱知交友各位から、書庫充實費に當てろといつて、金一封を賜つたのだ。お互に金は便利なもの、あればきつと遣ふもので、建築費充當の限界線がぐらつき出した。東京の棟梁では到底當方の希望を充たしさうも無くなつた。そこで故國信州の棟梁に依頼した。引受けてくれたが、豫定通りには進行しない。切組一切を信州で了へて、トラックで運ぶといふ段取であつた。それは事故なしに行はれた。瓦と壁土の外は悉皆運んだ。後になつてわかつたことだが、壁土にしても持つて來ればよかつた。

棟梁が長年蓄積の材まで運んで來た。柱や板造作材一式が總べて信州産で、外材は板一枚用ひず、何物も豫定以上に優秀である。下見板に塗る生澁まで持参といふ熱心と親切とは、私は例年の如く、スキーになどといはれた義理でない。それにもう一つ、私の所に鎌倉時代の作としてよい所もあれば、ちと悪い所もある。維摩居士の高さ二尺ばかりの木像がある。何も鴨長明を眞似るのではないが、方丈の室を始めた維摩のことだから、方丈を建てて、それに安置することにし、腹でも立ちさうな時は、其の室に引込んで、無言でゐよう。邪念を拂ふなんて大それたことは望まず、茶の一杯もすすつて、黙つてゐようと考へ出した。斷つておく、私には茶の手前なんどの心得はなく、所謂かんましても、ろくに泡の立たない稚拙さである。第一手つきなんかも私がやつたのでは滑稽で、見てはゐられないのだ。所が方丈即茶室と考へた棟梁は杉の面かは櫟の皮つき、屋根裏用として芋殻の大束を七八束もトラックに積んで來た。縞柿の棚板を南天で釣るといふ目新しい案も立ててゐた。壇の板と床板とは古材がいい、何かあるまいかとのことに、出入の者に相談すると、大名門の古扉なら持つてゐる人があ



るといふ。棟梁と共に見に行つた。申分の無いものだ。快く譲つてくれた。片扉で、幅が五尺丈が鏡板だけで六尺四寸、それが樺の一枚板で作つてあるのは驚かされた。厚さが一寸からあるので、それぞれに使つても、まだ額一枚分が餘つた。それへ張即之の方丈の二字を摸して棟梁に彫らせて搏風下の棲桁の上に掛けた。幸に五六十日の間一度も降雨が無かつたので、壁だけは十分に乾いて、二月中頃には完了しさうだ。庫一ぱいに積んである書物の配置もつきさうだ。私は年末年始、それから以降を風邪に冒されて、一月中を減茶苦茶にしてしまつた。少しよくなると、工事の進行工合を見に出て、寒風にあたつてぶりかへしたのだ。

三月の末、彼岸櫻が東京で咲出す頃になつたら、私も雁にまねて、都の花を見すて、越の方へと向ふつもりだ。雪が大方消えて、野山に霞の立つのは請合だ。田の畔や畦道の端には子どもの握拳ほどの露の臺が萌黄色にふくらむ。梅や櫻には二十日も間があらうが、鶯だけは姿を見せる。人の心も浮き立つ。お揃の若い人たちも見える。私の山莊はもと御粗末な料理屋であつた。三叉路の

一角に地を占めて、眺望だけはすてきがいい。それに手を入れて棲まれるだけに、湯も引いて一通りにはした。時折間違へられて、伴の女は門の外に立たせ、男の人だけが入口に来て

「静かな間が明いてゐますか」

と申込む。留守居の人は散々の苦勞人で、時々面白可笑しく相手になる。

「御覽の通り部屋は大てい明いてゐるにはゐますが」

「それぢや南向のごく静かな所を」

「それに火燵でも切つてあつたら御誂向きでせうが」

「是非そんな部屋を」

と頼んで、門外へ伴を呼びにでも出さうにすると、

「一寸待つて下さい。私は留守居のもので、これは東京のさる方の山莊で、人をお泊めしたことはありませんでして」

と困つたやうな様子をして見せて、體よく謝絶したりもする。一度なんかは見知らない人が階子段をとんとんと昇つて来て、「おい」と呼ぶ。留守居も女中



も出かけてゐるらしい。私が書齋から出て行くと、いきなり

「僕の荷物をどの室に入れましたか」

「どんな御荷物ですか」

と問ひかへすと、旅行用のケースと大きな風呂敷包だといふ。そこへ女中が勝手から出て来て、

「御隣との間違ちやありますまいか」といふ。本當に間違であつたが、荷物には別條が無かつたらしかつた。三月に往つたら、露味噲をつくらせう。甘く、苦く、鹹く、どうやら故郷の味がする。私はあの味の複雑なのを愛する。

## 一〇 書齋

(昭和十三年四月稿)

雑誌「書齋」の記者が来て、隨筆風に書齋の事を書いてくれとのことであつた。

私はこれ迄書齋はいろいろ工夫して今度やつと落着いた部屋が出来たやうに感じてゐる際なので引請けた。記者とは教室で相見えたこともあるさうで、加ふるに十日間にといふ至極のんきな約束であつたのだ。

日露戦争當時のことである。月給四十五圓の私が國庫債券五拾圓券を半命令の下に買はされた。勿論買った四五日後には賣つてしまつた。さうしなればならない財政状態であつたのだ。それを見た友人は土地を借入れて家を建てろと勧めてくれた。現今とは違つてそれは上策であつた時代だ。私がさうしようかといふと、丁度よい地所がある、戸田子爵の世襲財産の貸地だ。自分も二百坪餘借りて近々工事に着手する。君の爲に斡旋しようといつて、早速借りてくれた。故人の澤柳政太郎さんもそこに借入れられた。澁谷の今の練兵



場の所で、加賀さんの松林を近くに見るよい所だ。私は初対面の大工棟梁に鉛筆でひいた略圖を渡した。大工は「思切つた建築です。もう半坪奢りなさい、明るい家が立ちます」といつた。「それでは宜しく」で話が出來た。私の持論で、家中で一ばん衛生的なのは家族のゐる茶の間でなければならぬ。ついでに書齋に寢間である。客間なんかどうでもいい、日當や風通しが悪くても構はない。通居心地が悪いなら、早く歸つて貰ふまでのことだ。書齋はさうはいかない。通風採光共に申分なく築構しなければならぬ。子どもが一人も授からず、女房に女中に自分といつまでも三人だけだらうと思つたので、八疊の書齋を八疊の客間の隣に設けて、ともかくも新築が出來た。坪當り三十五圓、それで並よりは上等といふ嘘のやうな時代だ。よくそんな金が出来たと訝る人があるかも知れない。御尤だ。いふ迄もなく借金で、知合の實業家から融通して貰つたのだ。其の書齋といふは床も押入もある椽側つきの二方明りの南向の間で、當時の私には一間でそれでよかつた。家庭お伽文庫といふ月刊雑誌のやうな單行本、それが私の月給にも近い収入であつた。それを毎月其の室で書いた事だけ

が記憶にある。

建築後たつた一月で、六箇月以内に移轉をしると命ぜられたことを官報の上で知つた。萬國博覽會の敷地にする爲で、我等借地人二百人ばかりが全部立退かなければならぬのである。私の家が取拂はれる最南端である。おまけに棟上の日が農商務省の決定測量の日だと聞いては一寸驚かされた。借地人の間に立退不承諾の決議が出來、測量に來た人たちを、無斷侵入だと怒つて、手槍を以て突きかけた老人もあつて、一時騒いだこともあつたが、移轉費が豊富なので、すぐに鎮まつた、私なんかは貰ふ金で、總費用が支辨出来る上に、家は當方の所有の儘だといふので、損では無いやうな氣がしたものであつたが、今思へば大損大迷惑の話であつた。地代は月一坪一錢五厘の土地を立退いて四錢五厘の處に移つたのであつた。其處へ先の棟梁に移轉させたのが今の家だ。爾後十年間は書齋も其の儘で來た。物見遊山の金は一切書物になるいふ書生生活を續けてゐるうちに、書齋は狭くなつて東の寢間つづきに二階家を一棟建て、上は書齋、下は納戸にした。其の二階は東南二面の明りを受け、大きなデスクを据ゑ、廻



轉書棚に廻轉椅子で大分便利になつた。私はここでは二三の著作をしたり、月の原稿も怠らず書いた。四五年は経過した。出入の庭師が来て、二階臺がもうあぶない。ああも書物を載せては、地震があると大變だ。荷の勝つた柱は地へめりこみさうだ。書庫をお建てなさいと言ひ出した。そんな金が工夫出来る身ならと、腹の中では笑つてゐた。

そこへ大正十二年が來た。九月一日午前十一時五十八分が來た。あの大地震大火災だ。私は汽車で輕井澤を通過しようといふ時に驚かされて、翌二日に辛うじて歸宅したが、案じたコンクリート塀が倒れて人に怪我でもさせなければ、よいがと思つて來た塀も無事で、二階にも異状はなく、屋根瓦が飛び散り、壁が少し落ちた位ですんだ。當時私は古寫本や古板物の必要があつて、身分不相應に買入れてゐた。どうらくの書畫も五十幅や百幅は買つてゐた。書庫の必要がいよいよ問題になつて建てた。二間三間の二階建だが、鐵筋コンクリート建て、しかも永久建造物とやらで、豫想以上の費用を要した。必要以上に四壁を厚くした。大きに無理な工面をした。勸銀から借金をしたのも此の時だ。

これより先、今の代々木へ越して間もなく私は養女をした。男の子を貰はなかつたのは、成長してうちがいやなら必ずしも居なくてもいい。男の子では面倒だ。女ならよめにやればよいと至極あつさり考へたのだが、忽ち娘は年頃になつてしまつて、婿養子をしなければならなくなつてゐた。そこで、二階下を改築して私の書齋にした。出来るだけ明るくして和洋折衷の腰掛生活、畫卷物を見る時の場所も窓際に設けるといふ工夫も試みた。書庫は隣接させた。いはば書庫の出入口が書齋に接続してゐたのである。ただし本屋と書庫との間が一間ばかり離れてゐる。私は其の間にガラス屋根を葺いて長六疊の板間にした。是は書齋の延長でもあり、書庫の延長でもあつた。そこを圖書館式に高く書棚を設けて、梯子で出し入れをするやうにした。次いで婿養子をした。二階は豫定の如く其の用に供した。孫は出來た。二人になつた。おぢいさんの書齋が比較的設備がいいので、食後の俱樂部にされた。されなければ淋しい。だが痛しかゆしで、西鶴の嬉しがなした。外に其のガラス屋根にも泣かされた。小さな地震があつても直ぐひびが入つて雨漏りがする。忘れようとしても忘



れられないのは、昭和九年の九月二十一日の大暴風雨だ。屋根瓦がけし飛んで、ガラス屋根に大穴を明け、雨は瀧をなして書齋に奔流した。庭師を呼びにやつたら、自分の住宅の屋根を風に持つていかれてそれ所では無ささうだとのこと、自分で始末をしなければならぬのだが、折しも江戸文學史を書いてくれといつて来てゐて、私が雨漏りでやきもきしてゐるのを見ても、一向歸つて行きさうにもしない。家族は又何といふことかみんな外出してゐて、ぶなれの下女一人で書齋の始末なんか出来はしない。一時遁れに文學史を引請けて談判委員は歸したが、それが三四年越に他の筆を封じられて、一に文學史に没頭することになつてしまつた。忘れようとしても忘れられない。

ガラス屋根は銅板にかへた。たまるものは塵に雜書に借金だ。書庫は入口まで書物で一ぱいで、どうしても一棟建増をしなければならぬ。書齋も書物で身動きがならない。年は滿六十歳になつた。やつと勸銀の債務は果し得た。それを機會に本官は免じて貰つて、ただ大正大學一つだけは小遣取りに勤めることにした。幸に恩給で米櫃だけはがたつきさうもないからである。此の時

ありがたいことには同好の知己友人諸君から書庫充實費として金一封を戴いた。そこで増建に向つて枕を割つた。

私の藏に一寸古い維摩の木像があつて、之を安置する爲に庭先に方丈を建てようと前々から思つてゐた。其の方丈に接續して木造にするのなら、戴いた金で支辨が出来ようから、閱覽室向きなものにしようと思つた。所が支那事變の爲に物價の騰貴は私の計劃が許されさうも無い。おまけに腰掛けよりも疊の上で見るやうにしてくれ、あきた時には仰向に引つくりかへれるのが日本人の好みだといふ説が出て來た。そこでさうして見ようか。金は大方都合がつくだらうと、故國信州の棟梁に切組一切を任せて、昨年十一月に建前をして、今年の三月までかけて工事を竣へた。維摩堂は自分には過ぎた數寄屋になつた。新館もをこがましいが、二階は客間にも書齋にもなり得る。明るいことは氣恥しい程だ。私は奥の間に熾仁親王の江澤と書かれた二品親王時代の筆に成る額を掛けて客間にした。大きな家にしたいのだが、地所がないので三間に四間の二階屋しか建たなかつたので、客間は八疊にしかならない。そこで二間の釣



床釣棚にして室を大きく見せる工夫をした。仕合に二間一枚の床板があつて、目的が貫徹した。次の間の六疊は三條實美さんの問津所すなはち學問所と書かれた額を掛けて書齋にした。舊書齋はやはりデスクの室、新書齋には毛筆用の机を直した。利慾の念を去つた筆を執る室にしようといふのである。

今日四月十六日、昨日までに、生れて始めての面正しい文章の起案を了へて、ほつとしてゐる。正午少し過ぎに所用を果して歸つて來ると、だんなさま、今日お使の方か知りませんが、原稿を取りに來ましたといつて、既得の権利を行使するやうな口調でいひましたといふ。びつくりして、さうか十八日までの約束だつたが、といつて見たが、既得の権利には驚いて、どうしてこんな言葉を覺えたのだらうと思つて、偉大なる體格の所有者に不在中の來客が誰かと聞くと、別に無かつたといふ。日々新聞は見るかといへば「はい見ます」と答へた。ははあ法律問答欄で覺えたのだなと思つた。今日だけは約束履行の爲に特に先例を破つて、來客を避けて、問津所に於てペンで此の原稿を書くことにして書き了へた。明朝速達便で出さう。

## 一一 昔の美人

(昭和十二年一月稿)

昔といふ意味を上古から室町期の終までと定めていふ。すなはち浮世繪發生前以前で、似顔繪の筆者としては藤原信實以外にどんな人があつて、どの程度まで進んでゐたか、それが判然としてゐないので、こゝにいふ所も、史書や物語の傳へを本にして、私見を加へて説いてみるだけである。

上古時代のことは一向分らない。神代の木花咲耶媛にしても、八千矛神が通はれた古志の細女こほめにしても、其の容姿面貌等に就いては埴輪でも見當をつけて見るだけで、それももつと古い神代時代の人に對して、どこ迄の確實性があるか覺束ない。降つて仁徳天皇の御寵愛あそばした八田若郎女わかいらつめも、允恭天皇が殊寵せさせられた衣通姫も、雄略天皇がお召しになつた吉野少女も、歴代の采女たちの容姿も繪になつて傳つてゐないので、何とも説明の下しやうが無い。ただ衣通姫だけは姿容純美にして光艷衣を徹するが如くであつたので、此の名がつ



いたのであるが、面貌については何とも記してない。頭髮に就いても記してない。中世以降衣通姫を和歌三神の一と稱し、近世に入つては之を畫題にしたが十二一重姿にしてあつて上古の面影を傳へるものでは無い。

奈良朝以前にあつては采女が其の代の美人であつた。此の采女なるものは後漢の光武帝の時に起つたもので、わが國では此の記事は、仲哀紀から見えてゐる。もとより大陸の風にまねたものであらう。允恭紀や雄略紀の記事を併せ考へてはかう想定したい。史上には容貌端麗とあるだけで、委しいことは記してないが、當時大陸式の美人といふのは、花顏柳腰、衣にも堪へないといふのでは無かつたらうか。凡そ支那では唐と唐以前とは美人の型が違つて、漢代から初唐までは李夫人型の細身婉美を賞し、盛唐以降は楊貴妃型の豐滿艷麗今の世にいふ肉感的のを賞美したことは争なへい。かの長恨歌に「春寒賜浴華清宮、溫泉水滑洗凝脂」とあるのは詩人の誇張でなく、貴妃の白色肥滿な肢體は脂ぎつてゐたのであらう。唐代の土偶美人が之を證する。わが采女時代は唐より古いので、恐らく李夫人型であつたらうと思ふが、此の楊貴妃型の姿體を美人と觀

ることは早速我が國に入り込んだ。正倉院御藏の鳥毛屏風の樹下美人圖が之を證する。さうしてこれまで天皇におかせられては、皇后を皇族中からお召しになつたのを、聖武天皇の時から臣下からお選びになつた。それが光明皇后で唐と同様美しい方をといふことになつたのであると思ふ。藥師寺の至寶吉祥天女圖は此の皇后の御姿だらうといふ説がある。眞にさうかどうか定め難からうが、華麗豐滿、唐の楊貴妃も、これまでであつたらうと思ふ。此の好みは彼土でも我が國でも永く〜繼續した。歴代の文獻が之を證する。わが國の萬葉集時代すなはち奈良朝にしても、往古の佳人として語る所の眞間の手兒てこ奈なや、葦屋の菟名負うなび處女とよめたちは別であらうが、其の代の美人といふは此の大陸式の豐滿相であつたであらう。吉祥天女は脅威を感じしめられる程の艷麗さを具有する、奈良朝から平安期への過渡期に立つ小野小町も此の相好、此の容姿であつたのであらう。

平安朝は總じて安逸豐滿雍和趣味が一切を支配した。貴族連は今の寺院式の住宅すなはち光線の善くゆきわたらぬ、通風の宜しくない處に起臥してゐた。



當代の美人なるものも多く此の中から物色されたのだが、第一には頭髮のめでたかるべきが注目された。頭髮の長くしてふさやかなるは美人の一相であつた。藤原道長の女、上東門院彰子などは、身長よりも遙かに長くて一二尺も座を曳いて歩いたといふ。此の好尚は終に頭髮の薄いものには義髻いれげを入れることを強ひて、競ひ合つて、此の重量に富むものを添加して、引摺つて歩いた。流行となれば、今も婦人が夏羽織を着るが如くで、御苦勞様の至りであつた。女は髪のためでたからんことこそは、兼好法師の言をまたず、何百年も前からそれで、義髻は命から二番目の大切なものであつた。今も熊野へ參詣するものは、新宮の寶物殿に國寶として此の義髻の丈餘のものが幾條か垂下げてあるのを見るであらう。あれは多く平安朝末に奉納した物である。あんな物まで入れて、頭髮を豊裕に見せたのに對しては、細面は貧弱に失して、對揚調和の權衡を缺いてゐた。さうして奈良朝よりも稍長めに且つ下膨れな顔を喜んだ。所傳の繪の上から判じてはかうで、隆能源氏の美人どもを見てもさうだ。扇面古寫經の下繪の女を見てもさうだ。しかしながら畫家の好みは、描出する女の顔形を左右するの

であれば、二三の材料だけで斷言は出來さうもない。

和泉式部は當代の美人であつたといふが、委しい記載には出會はない。比較的信用し得るものは承安元年の五節淵醉屏風繪である。右京大夫藤原信實朝臣の畫いたものを、住吉如慶が卷物やうに寫したものが今傳つてゐる。五節であれば、舞姫は年頃の美人が選ばれたことはいふまでもない。其の帳臺の試には其の舞姫を由縁のある朝臣たちが手を執つて導くのである。當時平維盛は廷臣中の美男子といふ評であつたが、十三歳の維盛が導く舞姫ともう一人の舞姫とだけは其の全貌を描いてある。源平時代に入つてゐるだけに、所謂ヒキメカギハナといふ象徴化でなく、もつと寫生味が濃やかで大分近世味に近づいてゐる。此の信實筆と傳ふる圖卷は公卿方全部を寫生でいつたもので、一々其の年齢を示し、顔の長圓、髭髯の有無までを精寫し、同一人は何回出るも同一相貌に描いてある。此の信實のことは畫史に「工和歌兼善圖畫」尤長寫眞諸畫亦優柔爲中世妙手とある。但し此の人は文永二年に八十九歳で歿したのであれば、承安元年にはまだ生れてゐない。恐らく信實は前人の描いた屏風を傳寫し



たのであらうが、相貌を違へて寫す必要は更に無いので、之を信用するより他に途が無い。

信實の榮華物語繪卷も有名な作品である。これに出る美しい姫たちは、五節の舞姫よりはやや古風にして、眼は細う、頬はふくやかに描いてある。信實には往古の美姫はかう想像されたのであり、お手本にすべきものもかう描かれてゐたのであらう。大正十一年三月森川勘一郎氏が玻璃版にされた信實筆の紫式部日記繪卷の、若き美しき姫達の書きざまを見るに、豊頬で眼はヒキメに近いのもあり、後世人をしていはせれば三平二満式だと評しさうなのがある。時順から考へても美人といふ上に此の位の變易はあつたであらう。詰り紫式部日記繪が最も古く、榮華物語はやや後れ、五節の圖は最も後れて信實の生時を去ること三四十十年前後の様を畫いたものと見てよいのである。随つて確實性は最もこれの上にあると判じて誤はないであらう。千百の説明より二三の繪の挿入によつて、明瞭に把握される、幸に手許に傳寫の卷物があるのでそれで説く。

源平時代の美人祇王や佛又は常盤熊野千手靜といつた人たちの肖像は傳つ

てゐないので、其の面貌は述べやうが無い。鎌倉時代に入つても同様で、大磯の虎や化粧坂の少將なんかも見當がつかない。繪卷物の類によつて、當推量をして見るだけであらう。それでも武家の時代に入つた世人の心持が美人といふものの上にも現れて來て、昔のやうに髪を長くふさふさと描かず、夢を見てゐるやうな目はやめて、次第に大きくなつて來た。すなはち實感に富むやうになつた。春日驗記や法然上人行狀記の中の、若く美しさうな女に就いていへば、概ねかうで、女の動く眼、働く姿を描き出して來た。法然上人行狀記には遊女の室君を畫いてある。靜や千手はあれで見當を附けたら大差があるまい。顔が次第に長めになつて來た。婢女には特に長くして頬をこけさせてある。又は横廣にして顴骨を秀でさせ、或は輔車を高めてある。これが美醜の差異點で、姿勢に就いてはさう畫き分けてない。やはり舊を追うて面貌は豊頬又は下膨をよしとしてゐたものの如くである。若しそれ近代の錦繪や浮世繪で見る美人の様式で、古美人を想像したら全く見當が違ふであらう。

尙古主義は室町時代の貴賤上下に一貫してゐた。もし美しい貴女といふの



であつたら、信實式の顔を畫くのが無難であつたらうと思ふが、世好を顧みては顔を少しく長めにして目を大きくし、眉や額のかかりがますます實感性を多分に帯びさせたと、かう思つたら恐らく誤なきに近からう。庶民階級の見目好き女は既に法然上人繪傳の佛前に念佛する女に見出せる。中高にして目も大きく餘程近代の美人に近く描いてある。融通念佛緣起の類には美しい佛菩薩の面容の女に接する。これは所謂佛顔でなく、生き生きとした實感味のある面であれば、恐らく其の代の美人の顔に則つたのであらう。これは佛畫によくあることである。

土佐派の人は隆能風を承けて、畫風は信實と異り、必ずしも寫實を旨としなかつたやうだ。明德頃の光重の筆だと傳へる「祭の草子繪」について見ると、大分江戸初期の浮世繪に見るやうな、聰明さを潜めたふつくり姿になつてゐる。又明應頃の光信、此の人の筆に成る小繪卷「賢學の草子」は其の當時の風俗を直寫したものと見受けるが、これも美人は大分古風に描き出してあつて、更に一段江戸初期の美人に近接してゐる。信長の妹で、細川昭元の夫人となつた人は楊貴妃か

觀音の生れ出でかと稱へられた美人だが、随分長顔にうつしてある。淺井長政夫人もさうだ。此の頃から文祿や慶長迄を通じての美人型には大差が無かつたらしい。

ただ一つ能の面だけは考慮に入れなければならぬ。小面でも孫次郎でも萬媚でも若き美しき女を現す爲につける面は、下膨味は少く、何れ長めのもののみである。これは着ける優人の顔が圓い人もあり長い人もあつて、圓い方はともかく、長い顔が面を外れて見えるのは恰好をなさないので、長くしたと判すべくも、一つには當代美人は中古時代の如き大袈裟な義髻を入れないので、細面式の面でも對揚調和が出来たのである。かう考へる以上に尙我等は武家時代に入つて既に二百年、人の好みも信念も變り替つて、能面式の顔面に品位と美しさを認めるやうになつてゐたことをも合せ考へなければならぬ。江戸時代に入つては主として長顔の美人が描出されるが、それも早く室町時代に起つてゐたことを看却してはならぬ。女歌舞伎の繪に見る顔は室町末期の繪卷物中にくらも見出されるのである。私はこれまで義髻と面容の關係についての説述



を少しも聞いてゐないが、此の程度の關係はありさうに思ふ。

○

以上は専ら繪畫を資料にして、往昔の美人に就いて述べ、それと共に著名な美人をも擧げることにした。けれども繪筆に描き出されたものの外に、我等は古來の物語や説話の上に幾多の美人を想像せしめられてゐたのである。今其の美人を一括して列擧すべく、最も網羅されてゐる恨之介草子の一節を借用するであらう。此の物語の主人公雪の前の美しさを述べていふ所に、

物によくよく譬ふれば唐の楊貴妃摩耶夫人、虞氏君李夫人星の宮、越の西施阿閼夫人、漢のちうたん五翠殿、毘沙門の妹に吉祥天、朧月夜の内侍督、染殿の御后彼の野宮に住み給ふ御息所に葵の上和泉式部小式部に小督の局、紀の有常が娘かや、義經のおもひしは靜御前や淨瑠璃姫、その行平の中納言三とせを契る松風や村雨または妓王妓女、用明天皇の心をつくさせ給ひける眞野殿の一人娘、さて在五中將の忍び給ひし二條の後、曾我の十郎祐成が契をこめし大磯の虎、宍戸の四郎が思ひける鬼女の娘、阿波の鳴門にてその通盛を歎きつつ海に

沈みし小宰相の局、無官の太夫敦盛の御室の御所にて見初めしより、しづ心なく戀にせし按察使の大納言資隆の卿の御息女、げにや思ひは深草の四位の少將の心を通ひける小野小町、班女玉蟲玉藻の前、菖蒲まこもに常盤の前、奥州の莊司が子、佐藤兄弟忠信と同じよみ路の安壽御前、力壽御前、小夜姫、立田の姫、佛御前に大織冠、江口の君に千手の前、雪姫熊野の長とかや、鬼が娘の十郎御前、ましほの卿の妹に戀死の女、こんよの姫に中將姫、凡そ源氏に見えけるは桐壺帚木若紫紅葉の賀花の宴葵の上、その榊葉に花散る里、須磨明石、濡標六十餘帖のものとても、是にはいかでまさるべき。

甚だ幼稚な列擧法だが、私の茲に説く昔の美人揃をしたものである。伊勢や源氏はいはずもあれ、平家曾我謡曲舞曲の中には搜ね當らない美人まで並べてある。繪巻物や草子に出て來る美人や口碑傳説上の女までこれには擧げてあるが爲に引用したのである。此等の美人は所謂元祿時代に、戯曲や小説の上に復活せしめられて、元祿人の性情を附與せられ、手練手管をしかねないやうな女となつて再び我等に顔を合せるのである。



## 一一 笠森お仙

引

明和年中、谷中なる笠森稻荷の水茶屋かきや鍵屋にお仙といふ茶汲女あり、淺草觀音堂裏の大銀杏樹の下なる楊枝屋、本柳屋のお藤ふたばと美名を競ひ、二人共に鈴木春信に描出されて其の名ますます著る。蜀山人等の記す所によれば、お仙の方美しかりしといふ。當時笠森を瘡守の義にとりて、詣づる者多く、水茶屋には土の團子と米の團子とを三寶に盛りて賣り、願掛の者は土のを求めて供へ、願成就の者は米のを供へたり。お仙明和七年廿歳の時御家人倉地政之助の妻となり、十餘人の子を生み、幸福なる世を送りて文政十二年正月七十九歳にして歿せり。生涯身持はよかりしものの如し。今囑によりて春信の繪と當時の俗謠とを材として詞入りの江戸長唄一篇をものす。

昭和十一年五月

第一コーラス(女聲)

第二コーラス(女聲)

第三コーラス(男聲)

お仙

倉地政之助

鳴物

三味線  
 ヴァイオリン  
 尺八  
 其の他

上

第一第二第三コーラス齊唱

ありし名を此所に傳へて笠森の稻荷の宮の賑ひは、神の利益もさることなが

笠森お仙

三一九